

【読本に傾注し始め、落款の北齋に葛飾を冠し始める】

※享和4年(1804)より関わり始めた読本の挿絵に、この年よりさらに傾注する。

●読本『新編水滸面伝』初編初帙(半紙本六冊。曲亭馬琴作。葛飾北齋画。印画狂人。一卷見返しには、葛飾北齋主人画とある。馬琴の序文は前年9月の稿。江戸麹町角丸屋甚助注(衆星閣)/前川弥兵衛(盛文堂)版。後摺版は、英平吉/河内屋茂兵衛(大坂心斎橋)版。22.4×15.4 早稲田大学図書館/島根県立美術館:永田コレクション/日本浮世絵博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)。

注)角丸屋甚助:江戸書肆。衆星閣。

※初編後帙は、文化4年1月に刊行。各編は前帙(10巻)と後帙(10巻)に分かれ、全9編90巻という膨大な読本である。初編十巻十冊は曲亭馬琴訳。二編以降、版元角丸屋甚助と馬琴の間で訴訟沙汰があり、馬琴が降り高井蘭山(1762~1838)の翻訳となる。北齋は初編から九編まで挿絵を担当した。

以下二編~六編は文政12年(1829)~天保9年(1831)に刊行されたとされる(詳細不明)。初編の奥付には文化二年九月とある(飯島虚心『葛飾北齋伝』及び脚注 p99、p287)ことから一般的には文化2年からの刊行とされているが、見返しに「丙寅癸兌」(文化3年刊行)とあるので、実際の刊行は文化3年と思われる。

【馬琴、北齋の挿絵が気に入らず、二編以降は高井鴻山の翻訳】

※北齋の挿絵が気に入らず、馬琴は「北齋が挿絵をなさば、予は後篇を翻訳せずといひ、北齋は馬琴が翻訳をなさば予は挿画をかゝらずといひ」版元が困って江戸の書肆が集まり評議の結果、「当時馬琴の作、北齋の画、並び行はれて、何れも優劣なしといへども、此の書既に絵本といへる題号あれば、画工の意に従ふべしといへるに決したり」(『葛飾北齋伝』p88)ということであった。

翻訳を高井蘭山にさせたが「北齋後編(文政12年、英平吉版)を閲し、嘆じて曰く、馬琴が翻訳に及ばざること遠し」という(『葛飾北齋伝』p82~83)。

※飯島虚心は自身の感想も付け加えている。

「細に『水滸伝』の挿絵を閲するに、中に人物の衣服、室内の装飾、日本にあらず、支那にあらず、一種の風を画き、又其の挙動は、酒宴の席に卓子(筆者注;テーブル)をおき、数人の客、椅子により、しかして芸妓は、地板に列座し、蛇味線(補注:「蛇皮線」のこと)を弾くなど、其の凶実(むじつ)に和漢錯雑、抱腹(たはへ)に堪へざるもの、往々これあり。北齋翁此の凶をもて、自ら足れりとするか。挿絵中に、酔中筆と記さんを欲するなり。馬琴の痛論、措かざるも又宜ならずや。嗚呼『画伝』九編は、蓋し北齋一世の失策なるべし」(句読点・ルビは筆者による。『葛飾北齋伝』p85)

●狂歌絵本『耳目集』(一冊。口絵に北齋の絵。北齋画:扉の落款。浅草庵市人撰。壺側社中版「浮世絵文献資料館:絵入り狂歌本年表」及び『年譜』で紹介する『狂歌書目集成』より)

【北齋の勧めで馬琴の執筆】

●読本『石堂丸刈萱物語』(五巻五冊。曲亭馬琴作。文栄堂版 葛飾北斎画 東洋文庫：岩崎文庫/広島大学図書館/早稲田大学図書館/国文学研究資料館蔵)

※後編は文化4年正月に(葛飾北斎筆)として刊行される。説経節注「苺萱」では、高野山で出家した苺萱を追って来た妻は山中で病死、苺萱は子の石堂丸にも父と名乗らず突き放して善光寺に向かったという展開。

注) 説経節：仏教の内容を分かりやすく、節をつけて語ったもの。

※馬琴の自序によれば、この本は北斎の勧めで書かれたという。

馬琴自序「丙寅年(文化3年)畫工北齋子。わが著作堂に遊ぶこと。春より夏のはじめに至て三四箇月。一日(筆者注：ある日)余に謂て曰。嘗聞苺萱記は。五説経の一にして。今なほ人口に膾炙す。(略)主翁設彼後傳を作らば。かならず閱者の快事ならんといふ(略)」(読点・ルビは原文のまま。但し、ルビの読みは現代仮名遣いとした)。

482『石堂丸刈萱物語』(国文学研究資料館)



●読本『絵本壁落穂』前編(角書「春宵奇譚」。1月。前編五冊墨摺。小枝繁作。葛飾北斎画。一卷見返しに画狂人葛飾北斎画。印画狂人。角丸屋甚助版。すみだ北斎美術館/広島大学図書館蔵)。下記『新田義統功臣録』と同本。後編は文化5年(1808)刊。

●読本『新田義統功臣録』前篇五巻、(『新田功臣録』とも。角書「知神靈」。小枝繁作。葛飾北斎画。角丸屋甚助(衆星閣)版。早稲田大学図書館/関西大学図書館蔵)

※『絵本壁落穂』改題本。後編は文化5年(1808)刊。読本における独自の細密描写と薄墨の巧みな表現が見られる。天保12年(1841)には『箭口神靈感得奇聞新田義統功臣録』として改題後摺される(小枝繁作。葛飾北斎画。岡田茂兵衛・河内屋孫三郎版)

483『新田義統功臣録』前篇「義興の霊江戸兄弟を亡す」(早稲田大学図書館)



●読本『絵本西遊全伝』二編(『絵本西遊記』『通俗西遊記』『繡像真詮三蔵西遊全伝』とも。四編四十冊。岳亭定岡(岳亭山人)訳。岡田群玉堂(岡田屋茂兵衛)版。早稲田大学図書館/国立国会図書館(後摺)/上田市立図書館(後摺)蔵)。二編：文化3年刊、三編：天保6年(1835)刊、四編：天保8年(1837)刊。

※北斎は三編・四編に描く(北斎戴斗画)。

●絵手本『遠州流挿花百瓶図式』(「遠州流挿花百瓶之図」「挿花百瓶図式」とも。墨摺二冊。文化2年の序文と跋文があるが、刊行は奥付に文化3年正月とある。一冊。如月庵馬丈著。菱川宗理画。野田七兵衛・小林新兵衛版。高知県立図書館/早稲田大学図書館蔵)。

※宗理を用いた時期に菱川宗理の号はないとの説あり。あるいは俵屋宗理か。いずれにしても宗理号は寛政10年(1798)に門人宗二に譲っているもので、考証が必要。

※遠州流は、小堀遠州を祖とし、その美意識を花道に継承したもの。寛政期に初世貞松齋一馬(明和元年または6年～天保9年〈1764 又または1767～1838〉)により正風遠州流として完成したといわれる。武家や公家のみならず、江戸庶民にも受け入れられた。

盆や花瓶に生けた花や枝などの図案集。文化2年記の立川談洲楼焉馬の序文と式亭三馬の跋文がある。各地の遠州流門人の号が各図に記されている(早稲田大学図書館蔵に画号はない)。

●錦絵『仮名手本忠臣蔵』(4月。初段～十一段目までの11枚揃シリーズ。横大判揃物。無款。鶴屋金助版)

※この忠臣蔵以前にも『新板浮絵忠臣蔵』(寛政10年。可候画)がある。後に版木が和泉屋市兵衛に移り、後摺もされた。

※『仮名手本忠臣蔵』は、浄瑠璃芝居として寛延元年(1748)が初演。

☆〈初段〉(25.7×37.5 太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/ハーバー・コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「鶴岡八幡宮社頭の間」。海辺の神社境内で恋文を、塩冶判官(浅野内匠守)の妻顔世に差し出して言い寄る高師直。海の向こうに富士が描かれる。図中右下に「寅四」の改印がある。

☆〈二段〉(25.5×37.9 太田記念美術館：長瀬コレクション/ハーバー・コレクション/東京国立博物館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「建長寺 書院の間」。加古川本蔵が松の枝を切り落とし、仇討ちの誠意を見せる「松切り」の場面。

☆〈三段目〉(25.2×37.4 太田記念美術館/東京国立博物館/ハーバード大学サッカー美術館/山口県立萩美術館/島根県立美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館蔵)

※「足利城外の間」。鷺坂伴内が手下を率いて勘平を捕らえに現われ、伴内は勘平に斬りかかるが、首をつかまれ投げ飛ばされた場面。お軽は伴内の刀をつかみ、手下の首に紐をかけている。夜明けの月が描かれる。

☆〈四段目〉(25.7×37.3 太田記念美術館蔵：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「扇ヶ谷 塩冶館の間 花籠の段」。顔世御前が蟄居中の夫塩冶判官を慰めるため、八重桜を鉢に眺めているところに、原郷右衛門と斧九太夫がやって来る場面。

☆〈五段目〉(21.4×32.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/東京国立博物館/ミネアポリス美術館/山口県立萩美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※「山崎街道 鉄砲渡しの間」。斧定九郎に切られるお軽の父親与市兵衛の傘に「寅新板(文化3年の新板)」と書き込みがある。

☆〈六段目〉（25.9×38.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/バウアー・コレクション/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「与市兵衛内 勘平腹切りの場」。大星由良之助が祇園の茶屋で遊興しながらも、師直の偵察の手紙を読む図。

☆〈七段目〉（25.7×36.7 太田記念美術館：長瀬コレクション/大英博物館/ホノルル美術館/ミネアポリス美術館/ハーバード大学/ボストン美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「祇園 一力茶屋の場」。一力茶屋の由良之助のもとに呼ばれた遊女お軽が、秘密の密書を読んでしまったので、由良之助はお軽を殺そうと企むが、それを知ったお軽の兄寺岡平右衛門が、自分がお軽を殺して由良之助の信を得て仇討ちに加わろうとする。由良之助は縁の下に隠れていた斧九太夫を引きずり出し、お軽の父の仇を取らせようとする場面。

☆〈八段目〉（25.3×37.1 太田記念美術館：長瀬コレクション/ギメ美術館/国立国会図書館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「道行旅路の嫁入の場」。海辺の坂道を下りる旅人と駕籠。画面手前に道中差しの女と振袖の女の二人連れ。画面左に三人の町人の旅人と天秤棒を担ぐ物売りの図。桃井家の家老加古川本蔵の妻戸無瀬と娘小浪の母子二人が小浪の許嫁で由良之助の息子大星力弥のもとに行く「道行き」の場面。同画題は、寛政10年（1798）の『新板浮絵忠臣蔵』、享和2年（1802）の『画本忠臣蔵』でも先行的に扱っている。

☆〈九段目〉（24.7×37.2 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「山科閑居の場」。加古川本蔵の妻戸無瀬は、由良助の妻お石に娘小浪の力弥との祝言を断られた絶望から、母娘ともども自害しようとして刀を小浪に振り上げる。そこへ加古川本蔵が現れたので、お石は恨みのある本蔵を切ろうとするが、逆にお石がやられそうになったので、力弥が出てきて槍で本蔵を突こうとしている。その後ろで力弥の腰に抱きつき、父本蔵が殺されるのを止めようとするお軽。

☆〈十段目〉（25.2×37.0 太田記念美術館/バウアー・コレクション/山口県立萩美術館/国立国会図書館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「天川屋義平内の場」。堺の廻船問屋天川屋義平が武具を調達し、義士たちに渡す場面。長持ちの上に乗って見得をきる義平。仰向けになっている子供の足元に、版元の鶴屋金助を示す「金」が書かれた板が置かれている。

☆〈十一段目〉（26.0×38.7 バウアー・コレクション/山口県立萩美術館/国立国会図書館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※「討入 泉水の場」。義士たちの師直邸に討入りする図。大槌で門を叩き、門の屋根に梯子をかけて侵入しようとしている。

●狂歌絵本『風俗狂歌摺物帳』二帙（1月。色摺。魚屋北溪、岳亭春信、柳川重信、勝川春亭らの絵とともに画帖仕立てにしたもの）

※北斎は、二帙に中国五山（靈山とされる五山）になぞらえたもの。「五岳」とあるので全5図と思われるが、3図が知られる。「寅はつ春」とある。

※以下の3図は、いずれも美人を大首絵風に描いたもの。

☆〈五岳の内 南岳衡山〉（東洋文庫蔵）

※芸者風の女が、右手に脚付きの膳に化粧瓶を乗せて持ち、左の袖を口元に当てている図。

☆〈五岳の内 北岳恒山〉（島根県立美術館蔵）

※花瓶の前で琴を弾く女の図。

☆〈五岳の内 中岳嵩山〉（島根県立美術館蔵）

※一挺天符掛時計（釣り下がっている小錘のある掛け時計）の前で尺八を吹こうとする女の図。

●摺物

☆〈長脚国〉（かつしか北斎画。13.2×18.6 太田記念美術館：長瀬コレクション／東洋文庫蔵） 484 長脚国（太田記念美術館）



※座敷の中で、着物の裾をはだけ、両足の間にでんでん太鼓を挟み、撥を持って炬燵の布団に脚を入れながら赤子をあやしている。もう一人の女は、炬燵に腰掛けて赤子を抱いている。『和漢三才図絵』（正徳2年：1712。百科事典）からの画材と見られている。

☆〈三首国〉（かつしか北斎画）

※横兵庫髷の花魁と禿が座っている部屋の敷居の側で、大黒と見立てられる頭巾を被った男が二人、その後赤い小槌を持った男がいる。背後にウラジロなどの注連飾りが飾られている。『和漢三才図絵』（正徳2年：1712。百科事典）からの画材と見られている。

☆〈長臂国〉（かつしか北斎画。太田記念美術館／長瀬コレクション蔵）

※藤の掛け軸が架かる床の間には珊瑚とウラジロの飾られた部屋で、棒を持って臂を振り上げている宗匠らしき男に、盆に乗せた碗を差し出す男。その脇に顎に手をやる女がいる。床の間の前には横兵庫髷の花魁もいる。

●屋台幕図「虎図」（都留市八朔祭下町屋台注後幕図。横長判着色刺繍。東陽画狂人北斎筆。

印不明。208.0×588.0）

485 都留市八朔祭下町屋台後幕図（都留市 HP より）

注）都留市は、栃木県東部の市。八朔祭は、旧暦8月1日、生出神社（現山梨県都留市四日市場1066）例祭の行事。この頃は二百十日



前後で、秋の実りを、台風の影響から免れるように神に祈った祭。市内の下町などいくつかの町から屋台が繰り出される。現在では毎年9月1日に行なわれる。

北斎は屋台後部を飾る後幕（見送り幕）の下図を描く。「金糸・黒糸のだんだらで縫いとられ、あしらった緑の竹も影が薄いほど猛（マ）い獣王の姿である。虎の爪、牙は鍍銀された真鍮で、爛々たる両眼はガラスを光らしたものである。『東陽画狂人北斎』の落款がある」と都留市の説明がある。

※北斎が山梨県（甲斐国）にいつ行ったのかは不明。あるいは依頼されたものか。「東陽画狂人北斎」の落款は享和年間の使用と思われるが、「東陽北斎」の落款は寛政後期～文化初期にも使用されている。

永田生慈の『年譜』（文化3年）では、檜崎宗重『北斎論』（p294）の記事を紹介して、甲州都留市谷村の飾幕絵「龍虎図」（東陽画狂人北斎筆。印不明。現存不明）と「竹林猛虎図」（東陽画狂人北斎画。印不明）は「本年頃制作されるか」とある。「竹林猛虎図」が上記「虎図」を指すとすれば文化3年頃の作となる。

●錦絵『（小判）六玉川』（11月。九ツ切。錦絵六枚揃物。北斎画。版元未詳。すみだ北斎美術館蔵）

※「寅十一」の改印があるという（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』の記事を『年譜』が紹介）。

☆〈山吹 大和井出〉（12.7×18.5）

※床几に座る二人の女。緑の葉の山吹を眺めている。床几には湯飲みが一つ置かれている。

486 山吹 大和井出（すみだ北斎美術館）



☆〈手作 武蔵〉（12.7×18.8）

※二人の女が大きな鉢で布を洗い、男がそれを干している。

☆〈近江 野路〉（12.6×18.5）

※二人の女が紅葉の木の下で眺めている。左の女は右手をかざしている。

☆〈ちどり 陸奥〉（12.7×18.5）

※千鳥の舞う川辺に立つ二人の女。空には九羽の千鳥。

487 ちどり 陸奥（すみだ北斎美術館）



☆〈とうる 摂津〉（12.7×18.6）

※砵を打つ二人の女。側の犬が、女の振り上げた槌を見上げている。

☆〈どく 紀の国かうや〉（12.6×18.0）

488 どく 紀の国かうや（すみだ北斎美術館）

※屋根形の高札のある所に立つ二人の娘。手に羽子板

のようなものを持っている。側の小奴が右手で何かを指し示している。

●板絵「富士の巻狩図」(6月。板に彩色。画狂人北斎旅中画。印之印。139.3×180.4 木更津市日枝神社蔵)

※馬琴宅に逗留中、木更津の上総長須賀村を訪れ、その名主の家で描いたといわれる作品。木更津の日枝神社(現千葉県木更津市長須賀2444)に奉納した絵馬装のもの。図左上に「文化三丙寅六月」とある。

※建久4年(1193)、源頼朝による富士の裾野での巻狩りの図。仁田四郎が猪に刀を振るって刺し殺そうとしている。その傍で二人の武士が形相険しく刀を構え、松の木の後ろでは槍を構えた武士がいる。背景には裾に雲がたなびく富士山、その手前には巻狩りの陣の幟等が描かれる。



489 富士の巻狩図 (木更津市日枝神社)

●肉筆画「釣狐図」(紙本墨絵着色一幅。6月頃に木更津から江戸に帰る直前に見送りの人々を待たせて即席に描かれたもの。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。79.5×27.5)

●襖絵「唐仙人の楽遊」

※6月頃、木更津の逗留先、水野清兵衛宅の襖に描いたものという(『年譜』による)。

●肉筆画「蚊帳美人図」(着色一幅。北斎画。印不明)

※薄緑の蚊帳の中で、虫除けだろうか、細い棒状の先に火をともしている寝巻姿の女。赤い箱枕の引き出しが少し開いている。掻巻の夜具が敷かれている。女は眉を剃っているので年増と思われる。膝もとには大きな団扇が置かれている。 490 蚊帳美人図 (www.pinterest.jp より転載)



●摺物「朝妻舟の図」(1月。葛飾北斎画。『年譜』による)

●摺物「西王母」(中判摺物一枚。色摺。無款。19.4×27.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※西王母は、信仰を集めた仙女。姓は楊、名は回。漢の武帝が長生を願ったとき、西王母が天から降りてきて、長寿の象徴の桃を七個贈ったという伝説に取材。

羽団扇を持って立つ西王母の横で、桃を描いた絵を捧げ持つ女と、絵の下をしゃがんで支える女の図。「寅春」と制作年が示される文字が千栄松笠などの狂歌に続いて記されている。

※西王母の絵は他にも「西王母」(享和年間。摺物。16.6×7.3)、「西王母」(寛政6年頃。大判錦絵三枚綴。春朗画。37.9×74.9)がある。

●摺物「煙草入れに暦図」(1月。四つ切判色摺。かつしか北斎画。名古屋市立博物館蔵)

※毛皮の煙草入れの下に「文化三丙寅曆」の書き入れがある。浅瀬菴永喜（浅草庵市人門人）の狂歌「梅曆開けばなんとかながきに 安くよめたる山里の春」。

●摺物「耳を搔く男女」（北斎画）「寅春興」とある。つくし筆成の狂歌が記される（『年譜』による）

●摺物「梅樹の図」（かつしか北斎画）図中に「文化三丙寅春」とある（『年譜』による）。

●摺物「唐子と川を渡る虎」（紙本色摺。画狂人北斎画。14.6×19.0 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※川を渡る母虎は子虎を銜え、背中に一頭の子虎を乗せている。向こう岸には渡り終えた父虎がいる。こちらの岸には二人の唐子が虎の川渡りを見ている。「水をおよぐ虎より先へさく梅の かハ向ふまでわたす春風 山郷亭村路」、「虎の威をからでも梅ハものゝふの 四方に匂へる春のきよ正 新玉亭年波」、「唐竹にとらをゑかける大凧も ひやうぐとふく風に嘯く 芝の屋山陽」の狂歌が記される。

●摺物「雛飾り」（紙本色摺。かつしか北斎画。26.1×38.8 北斎館蔵）

※庭先に松ノ木のある座敷で、振袖姿の女性たちが桃の節句で雛飾りの準備をしている。幕の内側の雛壇には、恵比寿と大黒天、五人囃、菱餅などが飾られている。お神酒徳利に紙幣を挿したものを黒塗りの三方に載せて運ぶ女もいる。

●摺物「潮干狩」（花見判）（この頃か。色摺三枚続き。半切判。かつしか北斎画。19.4×52.8 北斎館/ボストン美術館蔵：番組案内全紙判）

※桜の咲く海辺の丘で花見をしている五人の女。一人は揚帽子（角隠し）を被っている。

莫産を担いだ男や、扇を振り上げている男、女の子を肩車している男たちもいる。海辺では、舟の浮かぶ中州で潮干狩りをしている多くの人々が小さく描かれる。



491 潮干狩：花見判（北斎館）

●摺物「和藤内」（色摺。かつしか北斎画。12.2×17.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※和藤内は、近松門左衛門作『国性爺合戦』の主人公。実在した明国の鄭成功をモデルにした人物で、中国人を父に、日本人を母に持つ。明国が韃靼国に責められたとき、父母とともに大陸に渡り明国の復興を図る。千里ヶ竹で虎を伊勢神宮の御札の威徳で従わせる。母の命を掛けた行動もあり、異母姉の錦祥女やその夫甘輝を味方にして韃靼軍と逆臣李諂天を討つ。図は、和藤内と母親と錦祥女がお互いに顔を向き合う姿を描く。賛に「とらの年」とある。狂歌「呉竹の八千代の春の遊びとて 七人ほども寄ん虎けん 成三樓

手酌酒盛」、^{せんりあるやぶ}「千里有藪もうちこすとの年 もろこし^{まで}迄も東風の手はしめ 梅月堂棍人」が記される。

●摺物「仙人」（紙本色摺。18.8×12.6 すみだ北斎美術館蔵）

※崖の上に立ち、柴木の束を背負って、^{まさかり}鉞を立てて振り返っている男。樵友亭 川瀬音常の狂歌が記される。

文化4 (1807) 丁卯 48 歳 葛飾北斎、北斎、画狂人北斎、かつしか北斎、 ^印 ：北斎、
亀毛蛇足、画狂人：こと(37 歳)、(富之助：21 歳)、阿美与 (19 歳)、阿鉄 (17 歳)、
阿栄 (10 歳)

◇4月25日、ロシア船、^{からふと}樺太・^{えとろふ}択捉に侵入。

◇4月27日、アメリカ船、長崎に来航。

◇5月1日、ロシア人、^{りしりとう}利尻島に侵入し幕府の船を焼く。

◇8月19日、^{ふかがわはちまん}深川八幡祭礼の人出で^{えいたいぼし}永代橋が落ち多数の溺死者が出る。

◇12月、幕府、ロシア打払い令。

◇^{きくかわふざん}菊川英山 (21 歳)、^{うたまる}歌麿風美人画で登場 (ポスト歌麿)。

◇^{かみがた}上方で大判錦画が増加。

★文化4年～7年にかけて読本挿絵を多作する (153冊に及ぶ)。

●読本『^{しんぺんすいごがでん}新編水滸画傳』初編後帙 (1月。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。^印北斎。五冊。角丸屋甚助 (衆星閣) / 前川弥兵衛 (盛文堂) 版。東洋文庫/早稲田大学図書館/島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館蔵)。

※奥付に「文化四丁卯年春正月吉日」とある。以下、二編以降は^{たかいらんざん}高井蘭山翻訳となる。二編～四編初帙は文政11年(1828)～天保6年(1835)刊。四編後帙～六編までは天保9年刊(1838)。

●読本『^{かたきりあらい}敵討裏見葛葉』(1月。五巻五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。平林堂庄五郎版。奥付に「文化四年丁卯春正月発販」とある。早稲田大学図書館/立命館大学 ARC 蔵)

492『敵討裏見葛葉』五巻最終図 (早稲田大学図書館)



●読本『^{しんかきげん}新累解脱物語』(1月。『^{せんかたん}巷談因果経』とも。五巻五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。^印北斎。大坂の河内屋太助 (文金堂) 版。下総国羽生村にまつわる「^{かさねがた}累ヶ淵」伝説注をもとにした怪談。すみだ北斎美術館/神奈川県立歴史博物館蔵)

注) 「累ヶ淵」伝説：累ヶ淵は、茨城県常総市羽生町の法蔵寺裏手辺りの鬼怒川沿岸の地名。江戸時代、この地を舞台とした累（るい、かさね）という女性の怨霊とその除霊をめぐる物語は広く流布した（ウイパディアによる）。

※五巻末尾に北斎画による馬琴像がある。
493『新累解脱物語』五巻末尾（ARC 古典籍ポータルデータベースより）



●読本『椿説弓張月』（1月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。前編。（半紙本六巻六冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印）亀毛蛇足。見開き 22.7×28.5 平林（平林堂）庄五郎版。馬琴の序は文化2年11月の稿。群玉堂（松屋善兵衛）の後摺がある）。

※後編六巻六冊（文化5年1月刊）・続編六巻六冊は文化5年刊。拾遺五巻五冊は文化7年刊。残編五巻六冊は文化8年刊。全二十八巻二十九冊を刊行。国立国会図書館/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵）

494『椿説弓張り月』前編第一巻「源為朝」（島根県立美術館）

【馬琴に低姿勢】

※同本執筆中の馬琴に宛てた手紙が『人間北斎』（p48 鈴木重三、昭和38年、緑園書房）に記されている（平成5年『日本浮世絵美術館所蔵 大揃北斎』p128で紹介）

「其節、為朝の写本三丁計り持参被致候間、是又御差函可被下候。御遠慮等欠而無用に御座候」（ルビは筆者）

前日馬琴が不在であったため置いて来た下絵について、校合が済んだならば受け取りたいということ、その際、下絵について指図すべきことがあれば遠慮無く申し出て欲しい、明朝は書肆平林堂の主人が来るので、その時「為朝之写本」を三丁分程度渡すことを述べている。

●読本『墨田川梅柳新書』（1月。文化3年正月の稿。同7月の校正。墨摺半紙本。六巻六冊（初編欠）。曲亭馬琴作。葛飾北斎筆。印）北斎。鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）版。22.6×15.6 早稲田大学図書館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※奥付に「文化四年丁卯春正月発行」とある。

●読本『そのゝゆき』前編（1月。『園の雪』とも。角書「標註」。半紙本。五巻五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。序文は前年夏の稿。印）画狂人。角丸屋甚助（衆星閣）版。22.6×15.6 すみだ北斎美術館/早稲田大学図書館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※河内屋茂兵衛（群玉堂）の後摺がある。



※出版準備中、角丸屋と馬琴の間でトラブルがあり注、馬琴は以後角丸屋と絶交する。後まもなく本の版木が京都の版元に売り出されるということもあり、後編は翌年春に刊行する予告のみで出版されず。挿絵には巨大な蜘蛛や鯉が登場する。

注：前年（文化3年）夏、馬琴が彫師の米助の困窮を聞いて、鶴屋喜右衛門に『墨田川梅柳新書』の彫りを依頼したことで、米助が前金を貰って引き受けていた角丸屋甚助の『園の雪』の彫刻が遅滞する事態となり、秋になって角丸屋が町奉行所に訴えたため、馬琴も米助の彫刻遅滞の原因ありとして召喚・吟味を受ける。立腹した馬琴は角丸屋と縁を切る。10月、角丸屋甚助、榎本平吉とともに謝罪に訪れて『水滸伝』『園の雪』の次編の稿を要請したが、馬琴は断り続編は杜絶。



数年後、角丸屋は『園の雪』の板木を京の近江屋治助に売り渡す（『曲亭馬琴日記 別巻』（「馬琴年表」文化3年条より）。495『そのゝゆき』「第一園部薄雪姫」（早稲田大学図書館）

●読本『刈萱後傳玉櫛笥』（中本三冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。榎本屋平吉（木蘭堂）版。18.9×13.4 国文学研究資料館/東洋文庫：岩崎文庫/広島大学図書館/早稲田大学図書館蔵）

※文化3年（1806）『石童丸刈萱物語』（鶴屋金助版）の改題再刊されたもの。

●読本『遊君操連理餅花』（五冊。曲亭馬琴作。仙鶴堂（鶴屋喜衛門）版の表紙に「画狂人北斎筆」とある。大英博物館蔵）

※享和4年（文化元年：1804）1月刊読本『小説比翼文』の改題再刊本とされる（高木元著『江戸読本の研究』第三節「馬琴の中本型読本」）。

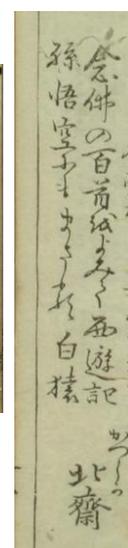
●追善狂歌集「市川白猿念仏百首追善数珠親玉」（1月。内題に「念佛百首市川寺白猿和尚述 自筆独吟」とある。烏亭焉馬撰。葛飾北斎写之。石渡利助版。早稲田大学図書館/愛知教育大学図書館蔵）

496 左：落款 中：「市川白猿念仏百首追善数珠親玉」（早稲田大学図書館）右：北斎の狂歌

※文化3年（1806）10月30日に没した市川團十郎を偲び、各狂歌師が念仏百首を書き、百首を書き北斎は、白猿の向寫隱居之像



（葛飾北斎写之）一図を描く。菱川宗理（宗二）は、白猿が「助六」で傘を振りあげて見栄を切った後ろ向きの姿を描く。他に、歌川豊国、鳥居清長、



勝川春好、柳々居辰斎、北齋らも描く。また、北齋は「かつしか北齋」号で「念仏の百首をよみて西遊記 孫悟空にもまさる白猿」の歌を詠んでいる。他に、山東京伝、石川雅望などの多くの文人も狂歌を寄せている。同書の前半には、白猿が病中に詠んだ「市川寺白猿和尚述 自筆独吟狂歌」の「念仏百首」も収める。

●肉筆画「釜に絵馬図」(絹本淡彩一幅。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。87.0×28.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

497 釜に絵馬図 (島根県立美術館)

※釜に雌雄の鶏を描いた絵馬が立て掛けてある図。図の上部に「東都滑稽作者 立川談洲楼 六十五翁焉馬」の落款のある長文の賛が記される。

談洲楼は寛保3年(1743)に生まれているので65歳は文化4年(1807)となる。但し、文化4年～10年(1813)の作と幅を持たせた解説もある。

●肉筆画「東方朔と美人図」(この頃か。文化元年<1804>、文化3年～13年<1806～16>説あり。紙本着色一幅。画狂人北斎画。印亀毛蛇足。37.1×37.5 島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※東方朔(前154頃～前93頃)は前漢の人で、武帝に仕えた学者。一つで3000年長寿を保つという西王母の桃を三個盗み食いをして命を長らえたという伝説の人。島田髻で振袖の娘が東方朔に酒を注いでいる。東方朔は額に手を当て朱塗りの杯を差し出している。盆に乗せた三個の桃も描かれる。



注)裏彩色：絵絹の裏側からも彩色する技法。
 ※酔いに苦しんで三味線箱に伏せる芸妓の図。右手でこめかみを押さえている。箱の傍らには紅色の杯。

499 酔余美人図 (氏家浮世絵コレクション)



菅原長根(芍薬亭長根)の賛「ミちとせを ミつかさねたる こゝのつのかすみにつゝむ とほ山のまゆ」が記される。

498 東方朔と美人図 (島根県立美術館)

●肉筆画「酔余美人図」(この頃か。絹本着色一幅。裏彩色注の技法を施す。26.5×32.3 葛飾北斎画。印亀毛蛇足。鎌倉国宝館内・氏家浮世絵コレクション蔵)

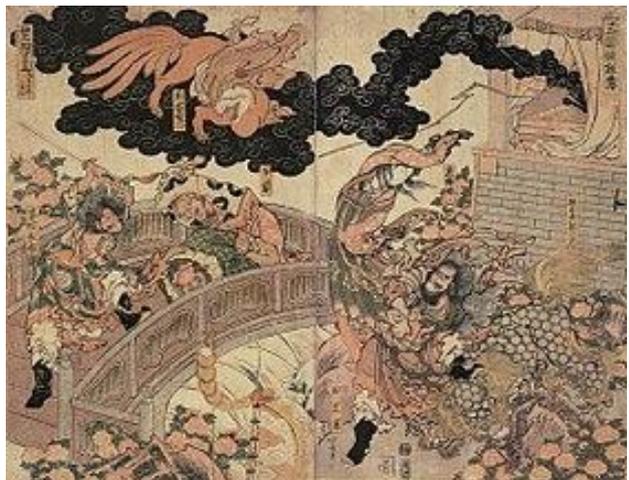


●錦絵「三国妖狐伝」（2月。大判二枚続。北斎画。鶴屋金助版。各約 37.8×24.6 東京国立博物館/すみだ北斎美術館・ピーターモース・コレクション蔵）

☆「第一斑足王後てんのだん（段）」

※天竺（インド）、唐（中国）、本朝（日本）の三国で絶世の美女になりすまし国家滅亡を謀る九尾の狐の物語。能「殺生石」に取材。市村座で高井蘭山作『三国妖婦伝』（享和3年～文化3年〈1803～06〉）にかけて刊行が文化4年6月に歌舞伎上演される。この主題がブームとなる中で直前の3月の刊行と思われる。

500 三国妖狐伝 第一斑足王後てんのだん（すみだ北斎美術館）



図は、西域インドの耶竭陀国の王子斑足の婦人となった華陽（九尾の狐の化身）が、正体を現し逃走する場面を描く。日本の伝説では、玉藻前（鳥羽上皇の寵愛を受けた伝説上の姫で、妖狐の化身）の前身とされる。

☆「第二唐土紂王館のだん（段）」

※妲己が紂王一家に残虐な行為をする場面を描く。子供を剣で刺そうとする場面。

●錦絵「江戸八景」（中判。8枚。無款）

※天保初期の「江戸八景」（小判錦絵額装。前北斎為一画。赤松屋版）とは別図。

☆〈隅田川の暮雪〉

☆〈佃のあきの月〉

●団扇絵「雨乞小町」（この頃か。色摺。無款。

22.6×24.7 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※短冊を手に行っている小野小町に長柄傘を差し出している仕丁たち。小野小町が勅命を受けて雨乞の和歌「千早ふる神もみまさば立ちさわぎ 天のとはがはの樋口あけたまへ」、または「ことはりや日のもとなればてりもせめ さりとてはまた天が下とは」を詠んで雨を降らせたという伝説に基づく。歌舞伎等の七小町のひとつ。



501 雨乞小町（島根県立美術館）

【最後の役者絵か】

●役者絵「瀬川路之助の女房こむめ」（左図）と「沢村源之助の梅のよし兵衛」（右図）の二枚組（3月。縦大判錦絵。北斎画。版元不詳。各 38.7×25.4 キヨッソーネ美術館/ボストン美術館蔵）

※文政7年(1824)正月に「色紙判五枚揃の役者絵」の摺物「(三代目)市川門之助と(七代目)市川團十郎」があるが、本格的な役者絵としては、この作品が最後と見られる。

※歌舞伎「隅田春妓女容性」に登場する侠客梅の由兵衛の女房小梅に扮した瀬川路之助(後の四世路考)を描く。この頃の町家の女の帯は既婚・未婚を問わず年増は前帯、若い娘

は後帯であつたらしい。文化4年3月頃に路之助と源之助の二人によって演じられた記録はないことから、依頼されて架空の舞台を絵画化したものともいわれる。二人が出演した市村座は3月4日からの「橘盤代曾我」の二番目狂言「住昔元吉原」かもしれないが、『歌舞伎年表』によれば、源之助は「明石志賀之助」、路之助は「芸者こずえ」となっているという(『原色浮世絵大事典』8巻)。



502 左：瀬川路之助の女房こむめ(ボストン美術館) 右：沢村源之助の梅のよし兵衛(ボストン美術館)

●摺物「子供遊び図」(この頃か。半切判。元は大奉書全紙横長判二つ折一枚。色摺。葛飾北斎画。38.5×53.2(全図) 島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵)

※俳人不易菴吾丸の古稀祝いに俳諧仲間が祝句を寄せたもの。二つ折りの下部分に天地逆に俳句を摺り、折り返して読めるようにしたもの。不易菴吾丸、雪中菴完来、神田菴小知など古稀にちなんで七人の狂歌が記される。

※家の外で、独楽を空中に回しあげる子ども。鯛の引き車の玩具を引く子ども。地面に「寿」の字を書く子ども。亀を手にして魚獲りの網を担ぐ子ども。木馬車(春駒)に跨る子ども。池で箆で魚を掬う二人の子どもたち。



503 子供遊び図(島根県立美術館)

●摺物「神楽面」(1月。「神楽面の図」「卯のはつ春」とも。色摺。かつしか北斎画。13.8×26.6 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/日本浮世絵博物館蔵)

※神楽面と面を入れる箱が画面いっぱい描かれる。「旧年の雪につけたる面影も残り

て笑ふ春は来にけり 愛樹園樽明」、^{たまこと}「玉琴のおりてと裏の組かざり ^{それ}夫にも通ふ内の^{うち}松風 茅の屋賤女」、^{こんらん}「渾沌の昔を春のうつし画や すめるお内 ^{にこ}濁るお外 庭訓舎」などの狂歌が添えられる。末尾に「卯のはつ春」とある。

●摺物「唐人笛を持つ美人」（この頃か。九ツ切判。紙本色摺。かつしか北斎画。林忠正の所蔵印がある。18.4×13.0 すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）



504 唐人笛を持つ美人（すみだ北斎美術館）

※中国風の美人がチャルメラを吹く図。賛「豊とせのしるしハ東風の吹そめて なりものゝよき春の長閑さ 悠々館街人改湖悠」が記される。悠々館街人改湖悠は翌年改名していることと、文化3年に琉球使節が来朝していることからこの年の作と推定される（リチャードレイン『伝記画集 北斎』より）

文化5 (1808) 戊辰 49 歳	北斎、葛飾北斎、北斎辰政、かつしか北斎、画狂人北斎、
俵屋宗理 印	北斎、亀毛蛇足：こと(38 歳)、(富之助：22 歳)、(阿美与：この年嫁すか) (20 歳)、(阿鉄：この年夭死か。18 歳)、阿栄 (11 歳)

- ◇2月2日、初代並木五瓶没 (62)。
- ◇8月15日、フェートン号事件。オランダ船拿捕のためイギリス海軍のフェートン号がオランダ国旗を掲げて長崎港に入り、出迎えたオランダ人2名を連行。長崎警護が手薄であることが露見した。
- ◇9月2日、加藤千蔭没 (74)。
- ◇10月、「椿説弓張月」が新浄瑠璃となり大坂で上演される。
- ◇12月4日、森羅万象没 (55)。
- ◇この年、江戸の貸本屋は650軒、顧客10万人といわれる。
- ◇この頃、合巻が流行。
- 3月、上田秋成『春雨物語』成稿。

【長女嫁ぐ】

★長女阿美与、柳川重信注に嫁ぐ (20 歳)。文化 10 年 (1813) 頃説あり (中右瑛「北斎九十年、波瀾万丈の生涯」『北斎 世界を魅了する浮世絵志と弟子たち』所収)
 注) 柳川重信：俗名、鈴木重兵衛。喜多村信節『武江年表補正略』の天保 3 年 1 月 28 日条によれば、北斎は一旦重信を養子としたが、後に絶縁する。以後、重信は独立して版下を描くも北斎は拒否する。柳亭種彦が仲介をしてから阿美与を嫁がせ婿とした。(『葛飾北斎伝』 p 307~308) 北斎は未使用の「雷斗」号を贈ったか (『増補浮世絵類考』より)。

【次女没す？】

★次女阿鉄 (阿辰) 没か。阿鉄の死亡時期は不明だが、この頃と推定する。『葛飾北斎伝』では「次女、名は、詳ならず。一説に、阿鉄、画をよくし、他へ嫁せしが、夭死す。一

説に、幕府の用達某に嫁せしと」とある（ルビは筆者による）。

一方で鈴木重三による脚注では、「他へ嫁ス。画工ニアラズ。早世。御鏡御用ノ家ニ嫁ス」と蕙斎英泉増補の『続浮世絵類考』の記事を紹介している（p 308。句読点・ルビは筆者による）。またリチャード・レイン『伝記画集 北斎』では 20 代で死亡としている（p 97）。

★5 月 23 日（文化 5 年と推定）、曲亭馬琴宛北斎の書簡朱筆貼紙（川瀬一馬編『曲亭来簡集』〈月の巻〉所収。「国立国会図書館デジタルコレクション」より）

「北斎、はじめは奇刷（版刻）をまなびしが、捨て画（売り絵か）を勝川春章にまなびて、画名を春朗といへり。後に俵屋宗理が名氏を冒し、又その名氏を弟子にゆづりて北斎に更め、又これを弟子にあたへて載斗と更む。只北斎のミ世にあらはれたり。居を転ずると名ヲかゆるとは、このをどこほどしばくなるハなし。壮年、その叔父御鏡師中嶋伊勢が養子になりしが、鏡造りのわざをせず、この子をもつて職を嗣せしが、そハ先だちて身まかれり」⇒安永 2 年条参照。

★同書簡表書「曲亭先生 机下 かつしか北斎拜」

「尚々、大坂之儀注、参上御面談にて可申上候。以上昨日は京橋へ御出之由、御空庵へ下画（筆者注：『椿説弓張月』のもの）差上申候。今日御校合相済候へば、何卒此ものへ被進可被下候。当年中出来之積りニ相認メ可申候。明朝は平林主人（筆者注：版元平林庄五郎）被参候間、其節為朝之写本三丁斗り持参被致候間、是又御差函（筆者注：馬琴の画稿上の指示）可被下候。御遠慮等、決而御無用ニ御座候。以上 二白（追伸）。御家内様へもよろしく御寄声奉願上候。以上 五月廿三日 曲亭先生 かつしか北斎拜」（「国立国会図書館デジタル・コレクション」より）。

注）「大坂之儀」：「文化五年十月に、大阪で『椿説弓張月』が興行された時に、それに関して何らかの打ち合わせに、馬琴のもとに改めて赴くという意だと思われます。その摺物が残っており、そういった類の打ち合わせと推測されます」（久保田一洋〈WEB「浮世絵文献資料館」による〉）

【亀沢町に新居をかまえ、書画会を催す】

★本所亀沢町（現東京都墨田区亀沢）に新宅を構える。現両国3丁目35・36番、4丁目30番の狭い地域で、豊後府内藩下屋敷跡辺を本所亀沢町と呼ばれていたが、現在の「亀沢」は、江戸東京博物館前の北斎通り両側1～4丁目で、大横川親水公園までをいう（Web: amebaownd.com「江戸町巡り」による）。北斎誕生地の南割下水（本所亀沢町二丁目辺。現墨田区亀沢2-15-10、両国東あられ本舗両国本店辺）近く。

※新築披露として8月24日、柳橋の河内屋半次郎の楼にて書画会を催す。

北斎新築報状（文化五年八月二十四日条）

「こたひ、やつかれとし浪の五十路ちかく、亀沢町にさゝやかなる庵をむすひ、いのちなかうせむ事をほつするの折から、ねもころにかたらひつる諸君子のさまくに風流を尽くして、新宅を賀し玉わること楽くて、露けき葉月末の四日、柳はし河内や半二郎が楼

をかりて、四方八方の名家をあつめ、終日祝ひの盃をめぐらして、恩をしやせん（謝せん）とす。乞ねかはくハ、晴雨を言す、いと賑々しく狂駕あらむ事をねこふのミ。諸名家画賛かけ物、六十。北斎自画之絹地、五ツ。画讚扇、七十。会主 葛飾北斎 補助扇面亭折主（句読点・ルビは筆者）

この会で北斎は絹本肉筆画5図を出している。

注) 河内屋半次郎：両国柳橋にあった会席料理屋。河半と呼ばれた。二階で書画会が多く催された。書画会は、書画を揮毫し希望者に販売する会。

※亀沢町には83歳、88歳にも住んだか（『和楽』2017年9月。10・11月号 p71 掲載の「嘉永 新鐫 本所絵図」による）。

★8月8日、17日、柳亭種彦と交流する。『柳亭種彦日記』文化5年8月8日条には〈北斎老人北雲（北斎の門人）会ふれにきたる〉とある。国文学研究資料館『日本古典籍総合目録』によると弟子北雲は文化13年（1817）から文政9年（1826）にかけて、絵本が一点、読本六点で、著名はすべて東南西北雲である。種彦作品に挿絵は描いていない。北斎は弟子のために画会の宣伝もしたのであろうか（WEB「浮世絵文献資料館」による）。

☆同上八月十七日条

「北斎老人の許を訪ひ、あけ巻（読本『総角物語』後編、柳亭種彦作・葛飾北斎画。文化六年刊）かんばん袋へうし（看版袋表紙）をたのむ」

●合巻『敵討身代利名号』（1月。前三冊、後三冊。全六冊。曲亭馬琴作。表紙：葛飾北斎画。絵題簽：馬琴作。北斎画。鶴屋喜右衛門（仙鶴堂）版。早稲田大学図書館蔵）

※『合巻年表』補注では北斎が馬琴の合巻に挿絵を描いた唯一のものとする（Web「浮世絵文献資料館：版年表一覧」より）。



505『敵討身代利名号』第一図（早稲田大学図書館）

●合巻『敵討報之蛇柳』（1月。角書「夫高野山是八木噉」または「高野山矢木噉」。六冊。松下井三和（唐来参和）作。北斎画。薦屋重三郎版。専修大学図書館蔵）

●読本『椿説弓張月』後編（1月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。半紙本六冊（続編六冊は12月）。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。23.1×16.0 平林堂庄五郎（平林堂）版。国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館書館/すみだ北斎美術館蔵）奥付には「文化五年戊辰正月吉日発販」とある。前年3月の序。9月の跋。

●読本『椿説弓張月』続編（12月。半紙本六冊。平林堂庄五郎版。国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館蔵）序文は6月。

●読本『頼豪阿闍梨恠鼠伝』前編（1月。半紙本五卷五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印 北斎。四谷怪談をもとにした作。宝善堂（丸屋徳造）版。大英博物館/名古屋市蓬左文庫/

早稲田大学図書館/国立国会図書館蔵



※馬琴の序文末尾には「文化丁卯（文化4年）暑月甲子」（早稲田大学図書館版）とある。奥付には「文化第五載戊辰正月」（国立国会図書館デジタルコレクション）とある。河内屋茂兵衛（群玉堂）の後摺がある。

506 頼豪阿闍梨佐鼠伝 前編見返し（大英博物館：立命館 ARC より）

●読本『頼豪阿闍梨佐鼠伝』後編（10月。四冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印北斎。仙鶴堂：鶴屋喜右衛門版）

※奥付には「文化第五載戊辰十月吉日発販」とある。序文は前年12月。

●読本『三七全伝南柯夢』（1月。半紙本六卷六冊。墨摺。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。印亀毛蛇足。榎本平吉版。東洋文庫蔵）

※奥付には「文化五年戊辰正月吉日発販」とある。前年4月の序。10月の跋「江戸出版書目」には、「板元売出須原や市兵衛」とある。「江戸作者部類」には、「戊辰三月下旬製本発販、初日は二百部のみにて板元榎本平吉色を失えど、初秋頃迄に貸本屋等に千二百部売る」とある（以上、『曲亭馬琴日記 別巻』〈p 339〉の年譜による：中央公論新社）。河内屋茂兵衛の後摺版がある。

歌舞伎と人形浄瑠璃『艶容女舞衣』の美濃屋三勝と茜屋（赤根屋）半七による大阪千日の墓所での心中事件（元禄8年〈1695〉12月7日）を題材にしたもの。『南総里見八犬伝』『椿説弓張月』と合わせて曲亭馬琴の三大奇書とされる。

【挿絵で馬琴と争う】



507 三七全伝南柯夢（早稲田大学図書館）



拡大図

☆「この本、末段三勝半七が情死に赴く所に於て、北斎、野狐の食をあさる体を画きて、寒夜の景物とす注。馬琴この板下をみて曰く、此の如く蛇足を添ふるが為に、情死の男女は、恰野狐に誑惑（人を惑わすこと）さるゝものゝごとし。速に削除すべしとて、板下をかへしければ、北斎大に憤り、彼は余が挿画によりて、著作の意を補ふを知らざるなり。強て削り去らんとすれば、前回より画きし挿画を返還せよ。余は自今馬琴が著作の挿

画には、筆を下さずといふ。版元甚迷惑し、百方奔走して、漸く和解を結びたりと」
（『浮世絵類考』別本：『葛飾北斎伝』 p 86 所収 句読点・ルビは筆者による）。

注) 初編七の十丁目の図。情死に行く二人の背後遠くの道で「みのや」と書かれた提灯を持つ男と、「寒中修行」と書かれた提灯を持つ男が行き交う。その更に遠くに、七匹の野狐が小さく描かれている。

※飯島虚心は上記のエピソードを『浮世絵類考』別本からの引用としているが、鈴木重三の脚注では、『浮世絵類考』の諸本にこの記事は見当たらないが、『只誠埃録』式百三所収「倭絵誌伝浮世絵之部」の「葛飾北斎」の項の「三七全伝南柯夢」に甚だ類似した文章があるとしている。

●芝居絵本『笠づくし』（10月。曲亭馬琴作。葛飾北斎画 榎本平吉版）

※『三七全伝南柯夢』が好評で大坂で浄瑠璃となったのを記念して刊行された。右に三味線を弾く男、左に胡弓を弾く鳥追笠の女、その足元で立膝になって頼杖をつく男の図。

●合巻『狂訓己が津衛』（五冊。十辺舎一九作。画狂人北斎画）

※『改定日本小説書目年表』（ゆまに書房 1977年）によると「Web 浮世絵文献資料館：浮世絵氏名一覧」で紹介している。

●合巻『北畠女教訓』（1月。五冊。十返舎一九作。画狂人北斎画。岩戸屋喜三郎版。国立国会図書館蔵）。序文には「文化戊辰春正月」とある。翌文化6年（1809）に改題再摺版『勇略女教訓』（五冊）が出る。

●読本『阿波之鳴門』（1月。半紙本五卷五冊。柳亭種彦作。奥付に「画工 葛飾北斎」とある。村田治郎兵衛・榎本屋惣右衛門・平吉版。文政7年（1810）に後印本が出る。島根県立美術館：永田コレクション蔵）奥付には「文化五戊辰年正月吉日」とある。

●読本『春宵奇譚 絵本壁落穂』後編（1月。五冊。小枝繁作。葛飾北斎画。見返しには「北斎辰政画」とある。印亀毛蛇足。角丸屋甚助版。立命館 ARC/広島大学図書館蔵）前編は文化3年（1806）1月刊。奥付に「文化五戊辰年春正月発行」とある。

●読本『新田義統功臣録』後編（『箭口神靈感得奇聞新田義統功臣録』とも。角書「知神靈」。五卷。小枝繁作。葛飾北斎画。衆星閣版。早稲田大学図書館蔵）

●読本『由利稚野居鷹』（1月。五冊。万亭叟馬の戯編。奥付に「画工 葛飾北斎」とある。河内屋茂兵衛・河内屋藤兵衛・榎本屋平吉の合梓。早稲田大学図書館/国文学研究資料館蔵）

※叟馬の序文は文化丁卯（4年：1807）正月。奥付には「文化戊辰正月吉日」とある。後年、『由利稚一代記』と改題再摺される。

●読本『鶴物語』（1月。角書「国字」。五冊。芍薬亭長根作。葛飾北斎画。西村宗七・柏屋忠七（柏悦堂）版。島根県立美術館蔵）

※鳥羽上皇時代の三姉妹が霊となって復讐するという話。奥付には「画人葛飾北斎 文化五戊辰年正月」とある。

●読本『霜夜星』（1月。角書「近世怪談」。半紙本五冊。柳亭種彦作。五卷末尾に「かつしか北斎画」とある。大坂の河内屋太助、江戸の山崎平八・若林清兵衛、京都の植村藤

右衛門の合梓版。22.5×15.9 国立国会図書館/早稲田大学図書館/すみだ北斎美術館：ピター・モース・コレクション/名古屋市蓬左文庫/日本浮世絵博物館蔵)

508『近世怪談 霜夜星』侍女歌次(右)と側女於花(左) (早稲田大学図書館)



※柳亭種彦の読本初作といわれる。本文は文化3年(1806)に完成していて、歌舞伎「四谷怪談」の元になったといわれる。奥付に「文化五年戊辰春正月吉日」とある。北斎は、巻一に13図、巻二に7図、巻三に7図、巻四に6図、巻五に5図を描く。

●読本『復讐快事 駅路春鈴菜物語』(前編二巻二冊。節亭琴驢注作。俵屋宗理・歌川豊広画。柏屋半蔵：柏栄堂版)

注)節亭琴驢：後に岡山鳥を名のる。弟子を取らなかった曲亭馬琴の弟子といわれる。後に式亭三馬の門に入る。見返しに「曲亭門人節亭琴驢著」とある(高木元『江戸読本の研究』「第二章 中本型の江戸読本 第二節 中本型読本書目年表稿」より)。

●読本『安褥多羅賢物語』(五冊。半紙本。振鷲亭作。北斎画。西村屋源六版)

※この年は、西村屋にトラブルがあり、文化6年1月に刊行されたという説あり(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p330)。画工が北斎かどうか不明。現在稀観本という。

●俳諧本『ひとり発句』(『独発句』とも。この頃か。二冊。とも。亀台(恵厚尼亀台)吟。安宜(高橋安宜)編。画狂老人北斎画。和泉屋五郎兵衛版。国立国会図書館/大英博物館蔵)

※多くの俳人の句と多くの絵師の絵を集めたもの。北斎は下巻の亀台の句に「落雁」(花の上に落下する雁の絵)一図のみ描く。左ページに発句、右ページに北斎の画。

●屏風図『江戸名所図』(1月。六曲一双。着色。百琳宗理画。伊勢屋喜右衛門版)

※檜崎宗重『北斎論』(p168)による。左隻に真(待)乳山、右隻に洲崎を描く。漢画風の筆法。

●肉筆画「江口の君図」(「象に乗る遊女」とも。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。26.9×21.4 島根県立美術館蔵)

※江口は、大阪府東淀川区の神崎川が淀川の本流から分れる辺りをいう。遊郭の栄えたこの地に西行法師が雨宿りをした折、普賢菩薩の化身である遊女の妙と和歌を詠み交わしたという謡曲「江口」からの取材。

509 江口の君図 (島根県立美術館)

この頃は「江口の君」とは、俗に舟饅頭(舟で春を鬻ぐ



女)を指した。一般に、白象に女性が乗る図は普賢菩薩の見立である。国宝「普賢菩薩藏」(平安時代。東京国立博物館蔵)に先駆的な絵がある。

※右下に衣冠束帯の男が座っている姿が書き加えられている本図の画稿がフリーア美術館にあるという(紙本墨絵。26.3×17.8 『2005 北斎展』図録より)。

●摺物「巳春屋」(1月。葛飾北斎画)

※図中に「初春に妙儀いのりし正直の うらべにかミの札そやどれる」とある(『年譜』による)。

●摺物「天の羽衣」(この頃か。全紙判：大奉書色摺。かつしか北斎画。18.9×52.0
ボストン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※謡曲「羽衣」に取材した図。三河国三保の松原で、松にかけられた天の羽衣を漁夫が持ち帰ろうとすると、羽衣が無いと帰れないと天女が懇願する。漁夫は羽衣を返すかわりに舞を披露してもらうという筋書き。

図は、太い松の木にかかった羽衣が優雅に靡き、その下に漁師が右手をかざして憂い顔で立っている天女を見ている。沖の方には三保の松原が続いている。図の左端に「落款」がある。図下半分に長唄の番組が逆さに書かれている。

510 天の羽衣 (部分：ボストン美術館)



●摺物「三美人の揮毫」(横大判二枚。葛飾北斎画。花押。色摺。国立国会図書館蔵)

※左の一人は筆の先を嘗め、座って扇子に文字を書こうとしている。中の一人は立って二曲一双の左面に文字を書いている。国立国会図書館の解説では、「夷」と読める次の「口」部分は「毘」を書こうとしている途中で、狂言の「夷毘沙門」を正月の祝言として書こうとしている図としている。もう一人は文机の硯に墨を摺っている。屏風の他の一面には、「日本三筆」や「葛飾北斎画」の落款が書かれている。浅遊庵夢人と浅草庵市人の狂歌が記される。

●摺物「為朝と汐汲」(大奉書色摺。全紙判。葛飾北斎燈下画。38.7×52.4 平林堂(平林庄五郎)版。すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵)

※『椿説弓張月』を大阪の佐藤太が浄瑠璃「鎮西八郎 誉弓勢」にして11月13日に興行した際に出された案内。下半分は二つ折りを顧慮して、「あづまぶり新曲弓はりつき」と題して曲亭馬琴の案内文が逆さに記されている。

「(略)余が著述の稗本弓張月に振りて、浪花中の芝居の顔見せ、今茲仲冬十三日より新に場をひらくと聞えしに贈るとて、かつしか翁の画るまゝに書肆平林堂の需に应じて曲亭馬琴のぶ並書」とある。

上半分の右側に天秤を担ぐ汐汲みの女二人の前で、剛弓を立てて、日の丸の扇を持って片膝をついて見得を切る為朝を描く。図上半分の左には「祝言 為朝の名題芝居にあくる

かな 弓はり月のいるあたにとて 簗笠隠居注」とある。とある（ルビは筆者による）。

注) 簗笠隠居：狂句亭馬琴の剃髪・隠居後の号。

511 為朝と汐汲（すみだ北斎美術館）



●摺物「神僧歌人図」（合作。色摺。画狂人北斎画）

※旅の僧侶、役者、大黒天、羅漢、僧正、比久尼、達磨などが描かれ、北斎は「達磨」を描く。歌川国芳は「羅漢」を、喜多川歌麿は「袈裟を着た僧侶」を描く。

●摺物「八はん続 辰巳の里」（紙本色摺。全 8 図 13.8×18.6 すみだ北斎美術館蔵）

※箱枕に右手を置いて体を投げ出して寛いでいる芸妓。その右にも打掛が着崩れたままの前帯の女も体を投げ出すようにして寛いでいる。「八はん」は「八番」。他 7 図あり。

文化6 (1809)	己巳	50 歳	葛飾北斎、北斎、画狂人北斎、東陽北斎、かつしか北斎
印	亀毛蛇足、花押：こと (39 歳)、	(富之助：23 歳)、	(阿美与：21 歳)、 阿栄 (12 歳)

◇2月12日（西洋暦）、ダーウィン生（～1882）。

◇6月、幕府、樺太を北蝦夷と改称する。

◇8月23日、江戸大風雨。

◇5月31日（西洋暦）、ハイドン没(78)。

○曲亭馬琴、『松染情史秋七草』（お染久松）。

○1月、式亭三馬、『浮世風呂』初編刊。

○鋏形蕙斎、俯瞰図「江戸一目図屏風」（6曲1隻）

★この頃、本所両国橋辺に住むか。翌文化7年（1810）1月刊の読本『俳詠妹背山』の奥付に「江戸本荘（本所）両国橋辺隠士」とある。尾上町と元町の境辺注（『和楽』2017年9月。10・11月号 p71掲載の「嘉永 新鐫 本所絵図」による）。

注：現東京都台東区両国1丁目辺か。

【柳亭種彦との親交】

★この頃、柳亭種彦の日記に北斎がしばしば登場、7月24日、9月4日、その他親交あり。

※以下、朝倉次彦『柳亭種彦日記』古典文庫より（ルビ、注は筆者）。

☆〈文化六年六月四日条〉

「今暁八ツ頃（注：午前2時頃）、三筋町西町（注：現東京都台東区三筋1丁目・2丁目辺）に火事あり、火事見まひに三筋町へゆく、それより北斎方へゆき、日めもす（注：一日中）あそぶ」

※種彦は下谷御徒町に住む。火元の三筋町は近い。北斎はこの頃には蔵前浅草近辺に住むか。

☆〈十二月十一日条〉

「**梭江**（注：柳川藩留守居・西原新左衛門）君子え手紙遣す、北斎主より**宝船板**（注：七福神宝船）来る」

☆〈十二月廿二日条〉

「**蝶々**（注：蝶々庵百花か）許一寸訪ひ、**桃川子**訪問にゆき、雪ふり出せしまゝ傘かり乗る（中略）北斎歳暮にきたるよし、あわず（後略）」

☆〈十二月廿四日条〉

「空はれたり、北斎子の許を許（おとな）ひ、北嵩子（筆者注：北斎門人）とともに**西村**（注：版元西村屋与八か）へよる」

★**牧墨僊**の絵本『**狂画苑**』（文化6年、東壁堂版。顔の運動、手長・足長の絵）を北斎は見ただか。

【北斎の看板絵は中評でも鳥居派に並び描く】

★『**街談文々集要**』注 p 167（石塚豊介子編・文化六年「三朝之改名」）の記事に、「（略）此節二番目**狂言招牌**（注：看版のこと）一枚、北斎画キたり、中評なり。看板は鳥居二とゞめたり。」とある。（WEB「浮世絵文献資料館」より）。

注）**街談文々集要**：文化文政期（1804～29）の巷説を集めたもの。「文々」は文化・文政の略。文化8年にも文化7年のこととして、北斎の看板絵についての記事がある。

※本年の顔見世に絵看板を一枚描くと『**我衣**』（加藤曳尾庵）に記載ありとして、『年譜』では次の記事を紹介している。

「画看板は、代々鳥居家にて画く処、文化六冬顔みせの時、葺屋町の看板、東の入口の上壹枚、葛飾の北斎画く。又当午の春（文化7年：1810）狂言には、二枚画く。鳥居は四枚画く。依之、両方共画看板に画名を筆せしは、去年より始り也」（ルビは筆者による）

この年に画看板を1枚、翌年に2枚描き、本来は鳥居派が芝居の画看板を描いていたものが、文化6年からは鳥居派と並んで北斎も描くようになったというもの。

●読本『**石堂丸刈萱物語**』（五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎画。鶴屋金助版）

※文化4年（1807）1月の読本『**刈萱後傳玉櫛笥**』の改題再摺版。題簽は勝川春亭が描く。文化3年の作品との関係については検討の要あり。

●読本『**後日之文章**』（角書「**仮名手本**」。1月。五冊。忠臣蔵の異作。鳥亭（立川談洲楼）焉馬作。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。角丸屋甚助版。立命館大学 ARC/島根県立美術館蔵）〈『**葛飾北斎伝**』 p 33 では文化5年刊としている〉奥付には「文化六年己巳正月発行」とある。

512『**仮名手本 後日之文章**』巻之一（立命館大学 ARC）

※焉馬の自序（文化5年初夏の記事）には、文化5年に土佐掾座で上演した忠臣蔵の後日譚の浄瑠璃を読本仕立てにして出版した



旨が書かれているという（『北斎クローズアップⅠ』p99 東京美術）。

また、同自序の末尾には「信友、葛飾北斎の画図にあらはし、今仮名手本後日の文章と題する而已 干時文化五年戊辰初夏 東都滑稽作者 六十五齡立川談州楼焉馬著述」とある。

●読本『新板 飛騨匠物語』(1月。半紙本。墨摺六冊。六樹園飯盛〈石川雅望・狂歌名：宿屋飯盛〉作。序文には北斎の勧めで筆をとったとある。画匠葛飾北斎画(36図：扉・口絵を含む)。亀毛蛇足。彫工：宮田吉兵衛・中藤留吉。角丸屋甚助版。22.4×15.4 早稲田大学図書館/国立国会図書館/東京都江戸東京博物館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵) 奥付には「文化六己巳年正月発兌」とある。

※六樹園の序文「かゝるふみつくり出んは、おとなげなくほいなき人まねにこそとて、たびく人のそゞのかしつれど、うけひかでやみにしを、此ごろ北斎のぬしふりはへとぶらひきて、せちにすゝめ物せらるゝに、すまひいなまんもなかくにほこらはしくや、となまじひに筆をとりつ(略)」(国書刊行会『石川雅望集』p204)

文を作るのは人真似のようで人に頼まれても久しく断っていたが、北斎が訪ねて来て、強く執筆を勧めたので、やむなく筆を執ったというのである。

※『画人読本外題作者画工書肆名目集』には、「(文化五年)閏六月七日校合本来ル 廿七日出来本来ル 八月十五日売出シ」とあり、実際には文化五年の秋には市中に出回っていた(『石川雅望集』解題p434)。



513『新板 飛騨匠物語』第五図「墨繩がつくれる木の鶏へまことにはとり来たりて蹴る所」(早稲田大学図書館)

●読本『総角物語』後編(1月。二冊。中版。柳亭種彦作。扉には北斎画。奥付には画師葛飾北斎とある。越前屋長右エ門版 国立国会図書館蔵) 奥付には「文化六己巳年正月吉日」とある。

※前編(優遊斎桃川画)は文化5年(1808)刊だが、北斎は描かず。天保14年(1843)4月に前後編合冊で『江戸紫三人同胞』として改題再刊される。

●読本『忠孝潮来府志』(1月。角書「忠孝美談」。五冊。談州楼焉馬(烏亭焉馬の戲号)作。葛飾北斎画。亀毛蛇足。衆星閣(角丸屋甚助)、桂林堂(石渡利助)合梓版。早稲田大学図書館/島根県立美術館蔵)

※1月刊とあるが、実際には前年の8月の発売。奥付には「文化六己巳年春正月発兌」とある。焉馬の序文には「干時文化四年 卯仲秋」とある。

【彫刻頗る鮮明なり】

●読本『恋夢魘』(春。角書「於陸幸助」前篇〈色之卷・声之卷・香之卷の三冊。全八

冊)。見開き墨摺半紙本。楽々庵桃英作。葛飾北斎画。篠屋徳兵衛版。見開き約 23.0×28.5 国立国会図書館蔵。彫工：菊池茂兵衛・好静堂綱之の二人)「彫刻頗る鮮明なり」(『葛飾北斎伝』p 291) 奥付には「文化六己巳春」とある。

514『恋夢舩』(国立国会図書館)



※後編は大須賀(栗杖亭)鬼卯作・一峯斎馬円画で文化11年(1814)刊。北斎は描かず。

●読本『山榊太夫栄枯物語』(1月。五冊。梅暮里谷峨作。表紙に「葛飾北斎画 楽養堂史籍堂梓」とあり、五冊奥付には「文化六己巳歳正月吉日発販 麴町平河丁二丁目 書肆 河内屋次助 村田屋次郎兵衛 大坂屋茂吉 関口平右衛門 梓」とあり、前頁に「画工 葛飾北斎 印 亀毛蛇足」と記されている(立命館大学ARC版)。

早稲田大学図書館版奥付には「画工葛飾北斎 印 亀毛蛇足 大坂心斎橋通南本町 書林 浅井龍章堂 河内屋吉兵衛」とある。島根県立美術館：永田コレクション/早稲田大学図書館/立命館ARC蔵)

●肉筆画「墨堤三美人図」(この頃か。横長判絹本着色一幅。葛飾北斎画。印 亀毛蛇足。52.9×114.7 個人蔵)

※縁台に腰を下ろす女二人。もう一人の女は手拭を被り、その端を口に加えて側の川に足首まで入り、箆を持って魚を掬おうとしている。



515 墨堤三美人図(朝日新聞デジタルより転載)

●肉筆画「猿と蟹図」(3月1日。柳塘(不明)の書画会で描く。随筆『我衣』(文政12年。加藤曳尾庵著「かとうえいびあん」とも)による。(『浮世絵八華5北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」の記事から)

●錦絵「風流源氏うたかるた」(8月。大判縦絵4枚揃。葛飾北斎画。各約38.0×26.0 野田七兵衛版。日本浮世絵博物館蔵)

※『源氏物語54帖』をカルタにしたもの。縦大判一枚に30枚の札を描き、四枚目の大判には、20枚の札と、下8枚分のスペースに、硯を乗せた文机に肘を乗せている貴女を描く。実際に厚紙に貼って使用した。和泉屋市兵衛の後摺版がある。

●看板絵「芝居看板絵」(11月。顔見世の芝居看板を描く。随筆『我衣』による。『浮世絵八華5北斎』所収、永田生慈「北斎の生涯」の記事から)

●扇面画「時鳥図」(紙本墨絵淡彩。扇面一面。東陽北斎画。下弦22.8×17.8 上弦50.4) ※扇右に時鳥図。扇左の川面に狂歌が記される。

●扇面画「禅機図注」(この頃か。紙本墨絵淡彩。扇面一面。北斎。十面の扇面画帖の一。上弦46.2、下弦19.8×18.1)

注) 禪機図：禅の悟りの契機や、禅僧応答の機微を象徴的に表現した禅宗独特の絵画をいう。

※白梅の枝を燃やす僧の図。傍らに斧が置かれている。

●摺物「鞠と玩具」（「鞠と蛇の玩具」とも。九切判色摺。葛飾北斎画。13.3×18.4
すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション蔵）

※鞠に正月を示す羽つきの羽根、今年の干支を示す蛇の玩具が重なるように描かれる。「風の香ハゑふた礼者の跡おふて となりへはひるわかやとの梅 浅雨庵疎喜」、「草や木のかそいろのミか玉ミその花も珍しはるさめのやと 浅湖庵照景」、「めをふけは青大しやうの垂柳 かぜにそうねる枝も長むし 浅倉庵 巳巳（己巳か）」とある。他に、浅雨庵疎喜・浅湖庵照景の狂歌が記される。



516 鞠と玩具（すみだ北斎美術館）

●摺物「遠眼鏡」（九切判色摺。葛飾北斎画。14.0×18.7 北斎館蔵）

※遠眼鏡の形と覗いた風景を同時に描いている。覗いた景色は、橋を渡る人々や洞窟が描かれる。「巳巳の初春」とある。「長閑なる春をみまちの滝の川 つちのとひらく岩屋弁天 秋風涼」の狂歌が記される。瀧の川（瀧野川）と岩屋弁天が記されているので、その辺りの景色か。岩屋弁天は、現在の真言宗金剛寺（現東京都北区滝野川3-88-17）で、紅葉の名所であった。



517 遠眼鏡（北斎館）

●摺物「羽二枚」（1月。「二枚の羽根図」とも。

春興狂歌摺物。横六つ切り〈大奉書を縦に二つ、横に三つに裁断したもの〉。葛飾北斎画。花押。ベルリン美術館蔵）。

※庭訓舎（綾人）の狂歌の後に「巳のはつ春」とある。図は、根元を飾り紐でくくった花羽根が二枚、交差するように置かれている。三首の狂歌の末尾に、それぞれ「つるのもと白」「鶴の羽」「鷺の羽」とあるので、鶴と鷺の羽を描いたものか。

●摺物「七福人図」（1月。「七福神の正月準備」とも。横中判色摺。かつしか北斎画。島根県立美術館：永田コレクション/ベルギー王立美術歴史博物館蔵）

※画中左に「つちのと己」（文化6年）とある。恵比寿が盆に鯛を乗せ、弁財天が紙を手を持ち思案げな顔をし、大黒天が盆に餅を乗せて立っている。毘沙門天は床の間の像を整え、福祿寿と寿老人と布袋は三宝に乗せた祝い物を物色している。床の間には桑楊庵（頭光）、浅草庵（市人）、浅倉（朝倉）庵（三笑）の狂歌がそれぞれ幅装されて掛けられている。

※辺仁之元子（浅草側の三河擣衣連の領袖朝倉庵三笑の妻）が軒白梅に改名する際の改名披露の春興狂歌摺物。擣衣連は享和4年(1804)の『狂歌入東海道』（『春興五十三

駄之内』)と文化2年(1805)の「狂歌百人一首」の作画を依頼している。

●摺物「還城楽図」(中判。色摺。葛飾北斎写。20.8×13.8 島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※「還城楽」とは、雅楽の中の唐楽(唐朝の宮廷の娯楽音楽や中国を経て渡来した東南アジアの音楽など)の曲名。蛇を好んで食べた西域の人が、蛇を見付けて喜び勇んで持ち帰るといふ舞。己巳の年を念頭に置いた摺物。裯襠(平安中期以降の武家の女子の正装。打掛とも)とよばれる装束に朱色の奇怪な面を付け、椀と金色の蛇を持つ(「デジタル大辞泉」による)。図は、奇怪な面を付けて、椀ととぐろを巻いた蛇の作り物を持ち、幅広の裯襠を纏って踊る姿を描く。桃の屋漫歳の狂歌が書かれる。

●摺物「幟を縫う女たち」(「幟織りぬい」とも。横長判色摺。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵)

※座敷で六人の女たちが長い幟旗を縫っている。ふすまには富士山の絵が描かれ、その前には傘が開いて置かれている。図左の床の間に「文化六年己巳」と書かれている。『年譜』に記載されている「奉納幟作りの図」(画工名なし。幟に「芸者中」とあり)と同図。

●摺物「開帳の支度」(横長判色摺。画狂人北斎画。東京国立博物館蔵)

※この年の江の島開帳に合わせて摺られたか。享和3年(1803)にも開帳されているので、その頃に制作されたともいわれる。

●摺物「茶屋の図」(1月。葛飾北斎画。『年譜』による)図中に「文化六」とある。

●摺物『三弁天』(この頃か。一図未見。横小判色摺。揃物。北斎画)

☆〈洲崎〉(12.8×17.9 太田記念美術館:長瀬コレクション/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/ヴァクトリア・アルバート博物館蔵)

※弁天社に続く海辺の道で、立っている女と腰をかがめている年増の図。明石亭浦人の狂歌「鶯を芸者になして三味せんの さつさすきにいさむ弁天」が記される。狂歌のないものもある。洲崎弁天は洲崎神社の通称(現東京都江東区木場6-13-13)。

☆〈はねた〉(12.8×18.7 すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵)

※羽田弁天(現東京都大田区羽田 6-13-8)の鳥居の前で、箒で掃除をする寺男。遠くに帆かけ船が数隻見える。羽田弁天は、要島弁天・玉川弁天とも称される。

●摺物「冠と檜扇」(色摺。北斎画。13.4×18.1 すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション蔵)

※檜扇に巻纏が描かれている。狂歌「ふゑんりよ(不遠慮)な女せたい(世帯)の青柳へ とまりに来ぬる春の燕 上毛富岡温古亭文通」、「酒呑みてゆつくり引ん千代ふると おもへはさきの長い小松を 浅草庵 己巳」が記される。

●素描「半裸の女」(この頃か。墨絵。井上和雄『北斎』による)

518 半裸の女



※簪を挿し、顔のふくよかな女が、襦袢を解き、上半身裸で立っている図。

●絵暦「花魁」(12.7×8.5 すみだ北斎美術館蔵)

●絵暦「琵琶と折り鶴」(6.8×8.8 すみだ北斎美術館蔵)

文化7 (1810) 庚午 51 歳 葛飾北斎、葛飾北斎辰政、両国橋辺隠士葛飾北斎、
式部源蔵門人涎繰、北斎、画狂人北斎、かつしか北斎、江都画狂人北斎 印 亀毛蛇足、
の印：こと(40 歳)、(富之助：24 歳)、(阿美与：22 歳)、(孫：1 歳)、阿栄(13 歳)

◇4 月 1 日、曲亭馬琴、日暮里の青雲寺(現東京都荒川区西日暮里 3-6)に自分の筆塚を建てる。

◇11 月 30 日、歌川国政没(38?)。

◇オランダ商館江戸参府。

◇烏亭馬琴の狂歌碑が牛島神社(東京都墨田区向島1-4-5)に建てられる。

○式亭三馬、『浮世風呂』(第二編)。

○曲亭馬琴、『常夏草紙』(お夏清十郎)、『椿説弓張月』拾遺(8 月)。

★この年、葛飾(どこを指すか不明)にも住むか。翌年 1 月刊『蘭菊の幣帛尾花の幣帛勢田橋竜女の本地』の見返しに「新武蔵国葛飾住藤北斎戴斗画」とあるところから推察。注)藤：藤原氏の意。北斎は弘化 4 年(1847)頃から藤原為一などと名乗り、藤原姓を意識している。

★正月 16 日、曲亭馬琴宅を訪れたか(『森銑三著作集 第 4 巻 p 468』中央公論社 昭和 45 年)。同日、両国三河屋で曲亭馬琴が催した書画会に出席する。

【馬琴・北斎、文化七年に団円す】

※文化 5 年(1808)、読本『三七全伝南柯夢』の挿絵で馬琴と争っていたが和解した。

「(略)文化七年に至て結局団円す。八年の春、板元平林庄五郎、作者に報ふに潤筆の外に金十両注 1 を以す。且北斎に為朝の像注 2 を画かせ、曲亭に賛を乞ふて、これを懸幅にして祭り。その贏余(利潤)多きをもて徳とする所也」(曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』岩波文庫版 p 216 による。ルビは筆者による)。

注 1) 金十両：この頃としては割高の金十両(筆者注：約 1,250,000 万円～1,500,000 万円。1 両=5000～6000 文、1 文=25 円で換算)の稿料であつたらしい(大正 2 年成光館出版部『趣味研究 大江戸 全』所収、饗庭篁村「作者の作料及び出版部数」)。

注 2) 為朝の像：文化 8 年(1811)「為朝図」を指す。

★この頃より次第に読本挿絵から遠ざかり絵手本の作成に移る。「独流開祖」の印を使い始める(『芸術新潮』1989 年 3 月号特集「北斎」初輯・永田生慈「北斎の才能」)。

★この年も柳亭種彦との交流が盛ん。

※『柳亭種彦日記』

☆〈正月十日条〉

「北斎年初ニきたる。種彦道ニてあふ、来年の大小(暦)もらふ、北嵩子(北斎の弟子)

晴山子（不明）夜五ツ半時（午後9時頃）迄物語ル」

☆〈正月十二日条〉

「一昨日北齋主来、辛未年（文化8年）大小（暦）もらふ、なくしそふなる故かきつけおく 大 二四六七九十二 小 正二（閏）五八十一 凡三百八十四日也」

☆〈正月十六日〉曲亭馬琴『滝沢家訪問往来人名簿』に「正月十六日 両国三河や 北齋」とあり、この日の両国三河屋での書画会に北齋が出席したことが分かる。

【北齋子へゆきおらんだの十露盤けいこなす】

☆〈二月朔日条〉

「廻状来ル、石井氏え順達、昼前北嵩子の家へ行、北齋子へゆきおらんだの十露盤（注：単なる算盤ではなく洋風の計算器か）けいこなす、夜こりう子とひ留守、玉冢子（柏庵）とふるす、晴山子これもふるす、ついに縄人許ニ而晴山子ニあふ」

☆〈二月十二日条〉

「北齋子八代条蔵殿より使来ル。石原へ刀をかへす、少し風たつ 今日もしやくけにて筆をかます 夜石原酔水亭へ行、駒人乗ル」

☆〈二月廿六日条〉

「南江子政吉飯島氏来ル、種彦北齋主知道（筆耕石原知道）ぬし訪ふ、知道ぬし留守にてあわず」

☆〈三月廿六日条〉

「種彦屋頃より北齋子知道子の許をとふ、（中略）書画および三味線花の会、なにゝもあれ会となのつきたるハ、ミな法度となるよしきく、又北齋之弟子北周名をあらためて雷周とかよぶ者、祖母孝行にて銀三枚一せう一人ふち、御ほうびにくだしおかれし由きく、いまにはじめぬことながらありがたき御代なり、雷周住居ハしんばざいもく丁とをり（注：新場材木町通り）松屋橋とかいふかたハラ也」

☆〈四月朔日条〉

「此頃北齋門人北周改名して雷周といふ者、祖母ぎんに孝行ゆへ、白銀三枚注ぎんへ一人ぶちくださる、住居ハ本材木町七丁目なり、此孝行之次第北齋かたよりたのミ乗り、梅塙（注：如実道人。荻野梅塙）主人とゝもにさくをなしけるが、北齋かたよりとりに着たらず、一九がさくにて先へねがひにいでたる由、これらの故ニヤ」

注）白銀：銀 43 匁（約 161 g）を長円形の紙一枚に包んだものが白銀一枚とされる。褒美・儀礼・贈答用に用いられた。ちなみに一両は銀 60 匁とされたので、白銀一枚は約 0.72 両。三枚で約 2.15 両相当と考えられる。一両は現在の約 12～13 万円程といわれるが、時代背景で変化するので特定することはできない。2.15 両×13 万円で 28 万円ほどであったか。

※北齋が依頼した雷周の孝行次第は、その計画を取りに来ないので十辺舎一九の原稿が先になったということ。

☆〈四月廿六日条〉

「北齋子とふ」

【どら孫誕生】

★長女阿美与に息子生（この頃か。後、放蕩となって北齋を悩ます）。幼名不明。

【看板絵は苦手】

★春、狂言の看板絵二枚描く（随筆『我衣』（文政12年。加藤曳尾庵著「かとうえいびあん」とも）による。永田生慈『北齋の絵手本 二』所収）。

★11月、市村座顔見世（翌一年演ずる予定の役者の顔見世）狂言『四天王 櫓 礎』の看板を描くも、人物は痩せて見苦しく、人々も歌舞伎の画看板は鳥居風に限るとの評判であった。北齋も悔いる。（『浮世絵類考別本』の記事を飯島虚心『葛飾北齋伝』で紹介 p88～89）。但し、鈴木重三の補注では、『浮世絵類考』の諸本には見当たらないとしているが、『歌舞伎年表』文化八年十一月の項に大田南畝の日記を引いて「去年、市村座、顔見世の看板一枚、北齋がかきしと共に珍し云々」とあることを紹介して、看板絵を描いたことは事実としている。

※『近世庶民生活史料 街談文々集要』（石塚豊介子著 鈴木棠三校訂 三一書房）の文化八年「天民翁書幕」（p243）には、北齋が市村座の看板絵一枚を描いたが、本来、看板絵は鳥居派が描いてきたもので、時の流れか近頃は色々な者が看板絵を描くと記している。この記事が、鈴木重三のいう『歌舞伎年表』の記事と一致するのは明らかだが、『我衣』の記事との関係は不明。

「（略）去年注も当座（筆者注：市村座）の顔ミセに看板壺枚ハ、葛飾北齋が画し也、是も昔より鳥居家にて画き乗りしに、時うつりかハれば、いろくさまくになりゆくものなり、末々にハ二人そばや・煮うりミセのかんばんなども、諸家某が書て、奸坊の印など押すやうにもなりゆくべし（略）」とある（WEB「浮世絵文献資料館」による。ルビは筆者による）。

注）去年：文化8年の記事なので文化7年を指す。

※本来、芝居看板は鳥居家が描いていたものだが、北齋などの他派の者も描くようになったのは時の流れなのか、そのうち二八蕎麦屋や煮物売りの店の看板をそれらしい人が描いて適当な印を押すようになるのではないかと皮肉っている。

●合巻『勇略女教訓』（文化6年『北畠女教訓』の改題再刊版。十返舎一九作。画狂人葛飾北齋画。国立国会図書館/西尾市岩瀬文庫蔵）

●読本『椿説弓張月 拾遺』（8月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。五冊。半紙本六冊。曲亭馬琴作。葛飾北齋図画。印 亀毛蛇足。平林堂庄五郎版。23.0×13.2 国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館蔵）

※奥付には「文化七年庚午八月発販」とある。序文は前年5月。

●読本『双蛺蝶白糸冊子』（『雙蛺蝶白糸冊子』とも。正月。角書「梅川忠兵衛赤繩奇縁伝」。五冊。芍薬亭長根作。奥付に「出像注 葛飾北齋辰政 文化七載庚午正月吉日

発販 角丸屋甚助・河内屋太助・伏見屋作兵衛」
とある。早稲田大学図書館/酒田市立光丘文庫蔵) 519『雙蛭蝶白糸冊子』(出像:早稲田大学図書館注)出像:繡像に同じ。登場人物の絵。本文の前に描かれる。



●読本『臥臥妹背山』(角書『婦女庭訓』。『陰陽妹背山』とも。1月。六冊。六卷。振鷺亭作。表紙に「葛飾北斎画」。内表紙には「江都浅草金龍山下隠士 著述士 振鷺亭主人/縦画生 江都本荘(本所)両国橋辺隠士 葛飾北斎 印亀毛蛇足」とある。石渡利助版。15.6×22.4 早稲田大学図書館/オランダ国立民族学博物館/メトロポリタン美術館蔵)奥付には「文化七庚午正月発販」とある。

【絵手本の初作。この頃より戴斗号を用いるか】

●絵手本『己痴羣夢多字画尽』(1月。中本二冊。前編33図、後編36図。武部源蔵注門人涎操(北斎の偽名)著。葛飾北斎戯画。二代目蔦谷重三郎版。島根県立美術館:永田コレクション蔵)題簽に「庚午」とある。題名は、言葉遊びの達人とされる小野篁のもじりという見方もある(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』(p115)。

注)武部源蔵:生身天満宮(現京都府南丹市園部町美園町1-67)の始祖。菅原道真の別荘跡地の京都園部で代官を務め、道真を祀る生祠として天満宮の礎石を創始した。道真没後は生祠を霊廟として祀った。武部源三は、歌舞伎『菅原伝授手習鑑』第四段「寺子屋の段」にも登場する。北斎が武部源三を持ち出した理由は不明。

※北斎の絵手本の初作。脇に添えられている狂歌に従って、文字を数字の順で書いていくと自然に絵が完成するという文字絵の趣向の本。「布袋の宝珠の上に鼠を描く」や「蝙蝠を描く」などがある。『古典籍総合目録』では滑稽本に分類している。

※前編巻末に「葛飾北斎戴斗画本目録」があり、『己痴羣夢多字画尽/同 後編』の書き込みに続き、「略画早字引 此道にこゝろざしある幼童のその意を得やすからしむのさうしなり」とある。ここで「戴斗」号が記されているので、この頃から「戴斗」を用いたか。但し、「戴斗」改名は文化11年に「北斎」号を門人に譲った翌年の文化12年からとする説もある。

※後編は『己痴羣夢多字画尽』(文化7年:1810)の改題再摺判として同年に『略画早学後編』(一冊。鶴屋金助版)と題して刊行されたとされる(永田生慈『北斎の絵手本』p271)。

※二代蔦屋重三郎による前編序文。

「書画は曆支の羽異にして、書につくさざる処、其かたちを函して、是をたすけ、画注1に及ばざる所、書をくわえて、是を補ふ。書は入やすく学びがたし。画は入易きより引入て、まなびやすきに至らしめんとす。一時の戯れといへども此道に志ある幼童の助にせむと乞得て、桜木に花さかする事(筆者注:桜に花が咲くことと、桜木板に字画を彫って出版する事を掛ける)とはなりぬ。文化庚午孟春 耕書堂蔦唐丸注2誌」

注 1) 画：この字は本稿では単独で用いられた場では「え」と読んでいるが、当該序文のルビでは「が」と読んでいるので、それに従う。

注 2) 鳶唐丸：^{つたやじゆうぶがろう} 鳶屋重三郎の狂歌号。

※柳亭種彦による後編序文。

「(略) ^{このしよひとりこどもしよ} 此書独幼稚の為に益あるのみにあらず、^{あまのうた} 狂歌俳諧を翫ふ人々席上需に^{いぢじよ} 応ずるの一助にして^{まこと} 実^{りやくがういまげ} に略画初学の^{かほし} 楷梯^{もいふべし} ともいふべし」(句読点・ルビは筆者)



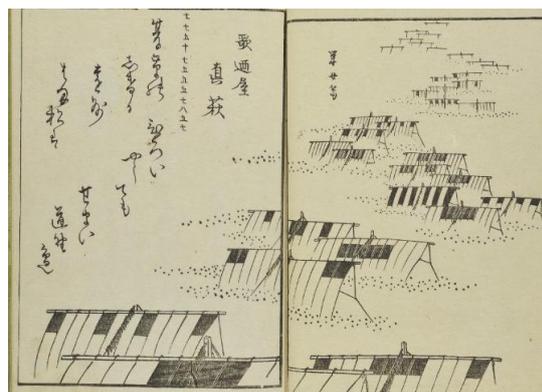
520 『己痴羣夢多字画尽』 (島根県立美術館)

【娘阿栄が初めて挿絵を描く】

●狂歌絵本『狂歌国尽』(この頃か。半紙本 1 冊。墨摺。巴泉堂：瀬川路蝶編。見開きに「画工北斎先生」とある。印之印。島根県立美術館：永田コレクション/大英博物館蔵)

※娘の阿栄が帆掛船の挿絵(無数の帆掛船の帆だけを、図の手前から後方に向かって、遠近法で描く)を描いた。「栄女筆」の落款がある。これが、阿栄の初筆といわれる。表紙には「初会催主 瀬川路蝶」とある。浅草側が中心になって刊行された。

狂歌のみ記された 15 丁と狂歌と絵の入った 16 丁で構成される。



521 栄女：帆掛船 (大英博物館)

北斎は最初の 1 丁の絵(貴人が鏡を見ながらお歯黒を塗っている図)のみ描く。他は北



斎の葛飾派の弟子 15 人(雷川・北溟・雷洲・北岱・斗雷・北政雷英・北斗改戴雅・北恵・北鳴・栄女・震索・竹紫戴輔・北専・寸松 改北輝・酔月壺龍)が一枚ずつ描いている。

522 北斎：貴人鏡見図 (大英博物館)

●狂歌絵本『富士見十三景 狂歌登遠眼可彌』(この頃か。一冊。宿屋飯盛(石川雅望)・鈍々亭・千桜亭撰)

※画狂人北斎他 12 名の画(『年譜』による)。

●錦絵『東海道五十三次絵尽』(1 月。「東海道五十三次」物の一。角型小判(ほぼ正方形)の色摺折帖判。全 57 図 6 冊。その内 3 図(〈日本橋〉〈鳶田〉〈京〉)は二枚続き。

表紙に「葛飾北斎画 鶴屋金助梓」とある。〈吉田〉〈御油〉に鶴屋金助の商標がある。「袋」に「東海道五十三次絵尽」の画題と「文化七年新春板 葛飾北斎画」とある。鶴屋金助版。各約 12.1×11.4 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵

※人物中心に描かれ、ほとんど名所絵の面影はない。

☆〈日本橋〉

※見開き二枚続き。手前に橋を渡る大名行列。図左には材木場。遠景に富士山。

523 日本橋（すみだ北斎美術館）



☆〈品川〉



※△の下に二を書いた紋が染められた布で覆われた旅の駕籠が乗りつけた遊女屋。その店先に遊女が二人座っている。

524 品川（すみだ北斎美術館）

☆〈川崎〉

※六郷から川崎への多摩川の渡し舟に男女五人の旅人が乗っている。船頭が力いっぱい竿をさしている。

525 川崎（すみだ北斎美術館）



☆〈神奈川〉



※笠を被り合羽を着た旅人二人。上半身裸で天秤棒の荷物を担いでついて行く供の男。その脇に石段が描かれる。

526 神奈川（すみだ北斎美術館）

☆〈程ヶ谷〉

※「右 かまくらみち」と刻まれた石の道標の前で、馬の荷を直している馬丁と、その前で笠の紐を調べている旅の男。

527 保土ヶ谷（すみだ北斎美術館）



☆〈戸塚〉

※宿の風呂に入っている男と、火吹き竹で火をおこしている宿の女。側の部屋では風呂上りの男が上半身裸で団扇で涼んでいる。

☆〈藤沢〉 ※荷物運びの人足が箱を下ろして休む様子を描く。長持ちの前で、上半身裸の男が二人煙管をくわえてお互いに火をつけようとしている。箱の上に乗って疲れた足をさすっている男とそれを見ている男もいる。



☆ 〈平塚〉

※橋の所ですれ違いざまに振り向き合う虚無僧と柴木を背負った農婦。側を旅姿の男が通る。

☆ 〈大磯〉

※松ノ木の側の「虎が石」と書かれた立札の前で、旅人が上半身裸で石を持ち上げようとしている。それを見ているもう一人の旅人。



529 大磯 (すみだ北斎美術館)

☆ 〈小田原〉

※宿でくつろぐ二人の男。その客に茶を差し出す宿の女。

☆ 〈箱根〉

※右手に芦ノ湖が見える山道を、駕籠に乗って行く女と上半身裸の駕籠かき。

☆ 〈三嶋〉

※独鈷の杖を持って箱を背負い、深編笠を被った修験者に出会い、杖を放り出し驚いて腰を落としている旅人。図の左には三島城が見える。



530 三嶋 (すみだ北斎美術館)

☆ 〈沼津〉

※男女の旅人が堰に流れる水流を眺めている。

☆ 〈原〉

※海辺の街道の民家の前を行く旅人たち。絵の中央に赤いすやり霞がかかる。

☆ 〈吉原〉

※富士の裾野を行く旅人たち。馬には大吉と染め抜いた背当てと腹当てがある。

☆ 〈神原〉

※富士川の急流を行く三艘の渡し舟。

☆ 〈由井〉

※駿河湾沿いの街道を行く旅人たちと民家が鳥瞰で描かれる。絵の中央に赤くすやり霞が描かれる。

☆ 〈沖津〉

※海辺の山道を行く旅人たち。街道の崖下には波が打ち寄せている。

☆ 〈江尻〉

※馬子の牽く馬に乗る旅人と、すれ違う大小の二本差しの男。遠くに山並みがみえる。

☆ 〈府中〉

※川で布を晒している男女。晒した布を干している男。

☆ 〈鞠子〉

※宿の部屋でとろろ汁を食べている二人の旅人。おかわりに応じるためにお盆を差し出す宿の女。

531 鞠子 (すみだ北斎美術館)



☆ 〈岡部〉



※松などの木々のある急な宇津ノ谷峠を往来する旅人。天秤の荷物を担ぐ男もいる。

532 岡部 (すみだ北斎美術館)

☆ 〈藤枝〉

※茶屋で休む旅人と、茶を飲んでいる行商の男。店の外には天秤棒



の荷物が置かれている。

533 藤枝 (すみだ北斎美術館)

☆ 〈寫田〉

※見開き 2 枚続きの図。大井川の急流の中を荷物や人を渡す川越人足。肩車で渡したり、荷物を持ちあげている。遠くにも侍の長棒の駕籠を数名の男が担いで渡している。

☆ 〈金谷〉

※二つの長持を下に置いて休む上半身裸の三人の足。側にはお供の三人が片膝をついて控えている。刀を腰にした二人が何かを話している。

☆ 〈西坂〉

※一般に「日坂」と表記される。大道で羯鼓踊りのように、腰に鉦を多く括りつけ、叩きながら踊る女芸人と、座って太鼓を叩いて調子をとる男。それを見ている男たち。



534 西坂 (すみだ北斎美術館)

☆ 〈掛川〉

※山の湧水を汲もうとしている旅の男と、側に立っているもう一人の男。

535 掛川 (すみだ北斎美術館)



☆ 〈袋井〉

※朱色の鳥居の足元で馬の背から荷物を下ろそうとする馬子。馬の顔先に道中笠が転がっている。近くの秋葉山に秋葉権現社があり、その鳥居であろうか。

☆ 〈秋葉〉

※尻はしよりして二瀬川を渡る旅人たち。天秤の荷物を担いで渡る男もいる。遠景の山は秋葉権現社のある秋葉山か。

☆ 〈鳳来寺〉

※笠を手にして山道を行く三人の男。図の左に鳳来寺の屋根が見える。

☆〈見付〉

※天秤棒を担ぐ男と何かを話す旅の男。荷物のない空馬の側に立つ馬子もいる。

☆〈浜松〉

※松の巨木に覆われるように茶屋が鳥瞰で描かれる。茶屋の前には馬が休み、旅人が数人行き来している。巨木は、足利義教（1394～1441）がこの松のもとで、「浜松の音はざざんざ」と謡ったといわれ「ざざんざの松」と呼ばれる浜松名物の松の群生を思わせる。

☆〈舞坂〉

※荒井宿までの浜名湖の「今切の渡し」船に旅人たちと荷物が乗り、船尾で船頭が力一杯竿をさしている。

☆〈荒井〉

※新居宿関所（今切関所）。「御関所」の書き込みがある。役人が証文を読みあげ、その前で三人の旅人が正座して畏まっている。

☆〈白須賀〉

※上半身裸で駕籠を担ぐ駕籠かき。眼下に遠州灘が広がる。

☆〈二夕川〉

※岩穴に賽銭箱が置かれた祠を見ている三人の旅人と天秤棒を担ぐ男。

☆〈吉田〉

※松林の道筋で、馬に乗った旅人。その脇で熊手で落ち葉を集めた籠を背負う女。その傍に僧衣の旅人が一人いる。馬の腹掛けに版元の鶴屋金助の商標がある。

☆〈御油〉宿の前で荷物を下ろした馬の世話をする馬丁。その前の縁側で客を待つ様子の遊女二人。馬の腹掛けに鶴屋金助の商標がある。

☆〈赤坂〉

※「庚申供養」と彫られた石碑の前で、旅人二人が荷物を置いて話している。

☆〈藤川〉

※外に莫座を敷いた休み処で、煙管を銜えて休む男や饅頭を食べている男に茶を差し出している女。その前には茶を沸かす竈に薪がくべられている。

536 藤川（すみだ北斎美術館）



☆〈岡崎〉



※城へ向かうのであろうか、矢作橋を渡る侍たちの行列。合羽や蓑を着た侍たちの先では長槍を持つ男が振り向いている。

537 岡崎（すみだ北斎美術館）

☆〈池鯉鮒〉

※松並木の道にしゃがんで草鞋の紐を整える馬子と、側に立っている二人の馬子。この地では馬市が多く開催されたというが、馬は描かれない。

☆ 〈鳴海〉

※絞り染用の白い反物を畳んでいる男や、それを運んで積み上げる女たち。部屋には染めた反物が吊るされている。この地では「有松絞」や「鳴海絞」と呼ばれる藍に染めた布が有名。



☆ 〈宮〉

※熱田神宮の門前町。ここから桑名に向けて海上を渡る。七里先、約2時間余りの船旅で、旅人を乗せた帆船を描く。

☆ 〈桑名〉

※荷物を脇に置いて、茶店の縁台に座って名物の焼蛤^{やきはまぐり}を食べている二人の旅人。縁台の下では、店の女が団扇で仰ぎながら蛤を焼いている。

☆ 〈四日市〉

※石灯笼と鳥居の前で旅人が筒から水を飲んでいる。もう一人の男が柄杓を差し出して水をもらおうとしている。天秤棒を担ぐ男もいる。四日市は伊勢神宮への参詣路の分岐点。

☆ 〈石薬師〉

※石薬師寺の屋根の向こうに街道を往来する旅人たちが俯瞰で描かれる。

☆ 〈庄野〉

※宿で上半身裸で、酒と肴を囲みながらくつろぐ三人の男。

☆ 〈亀山〉

※亀山城から出掛ける、長持ちを担ぐ従者を連れた侍たちの一行。

☆ 〈関〉

※戸外で箱状の道具を使って縄状のものを作っている親子。桶作りが有名なので箍^{たが}だろうか。

☆ 〈坂の下〉

※「水あめ卸^{みずあめおろし}」の看板のある店先で、大釜の水あめを描き回している男。大きな盆を台に腰掛けている男と、水飴の受け渡しの作業をしている女房。

☆ 〈土山〉

※鈴鹿峠の西北山麓^{すずかづか}にあり、鈴鹿越の宿駅。「いちぜんめし」「どちやう汁」と書いた箱看板の下で寝ている犬の脇を通る男二人を描く。

☆ 〈水口〉

※「そばきり うどん」の看板のある店先の床几に腰掛け休んでいる旅人二人。一人はどんぶりからうどんをすすっている。





540 水口 (すみだ北斎美術館)

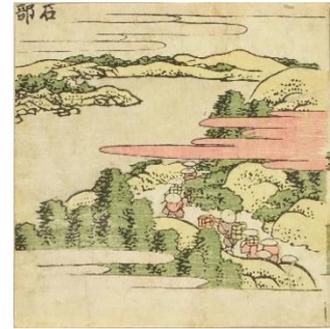
☆ 〈石部〉

※山間の街道を行く旅人たちを鳥瞰で描く。図の中央には朱色のすやり霞が描かれる

541 石部 (すみだ北斎美術館)

☆ 〈草津〉

※琵琶湖沿いの松の老木のある街道を往来する旅人。琵琶湖には湖面を渡る帆かけ舟が二艘描かれる。



☆ 〈大津〉

※走り井と呼ばれる湧水の前に来た三人の旅人。

☆ 〈京〉

※見開き二枚続き。左頁には、石段に向かう垂干を被る二人の貴人の姿。後ろに矢を背負った武人が控えている。右図には、折烏帽子の男と赤衣着物の少年や、地べたに腰を下ろしている仕丁たちを描く。

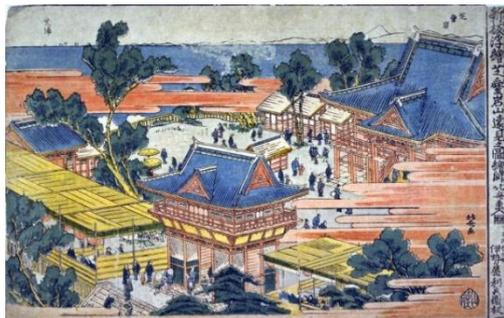
●錦絵『伊勢屋利兵衛横大判新板浮絵シリーズ』（この頃か。横大判揃物。13 図。北斎画。伊勢屋利兵衛版）

※江戸名所図。全図、紅色のすやり霞をかけた鳥瞰図画法。

☆ 〈新板浮絵浅草金龍山之図〉 (24.2×37.8 図右に「金龍山」、図左に「浅草観世音」の書入れがある。すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※五重塔を背景に描く。本殿と仁王門の提灯には「卍」の字が書かれている。

☆ 〈新板浮絵愛宕(岩)山遠見之図〉 (図右に「芝愛宕(岩)」、図左に「芝浦」の書込みがある。26.5×38.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/東洋文庫：岩崎文庫蔵)



542 新板浮絵愛宕山遠見之図 (すみだ北斎美術館)

※境内には多くの参詣の人々。図の左下には、出世階段が描かれる。図左上には「芝浦」と書かれ、遠くには帆かけ船が数隻描かれる。遠くに富士山が見える。

☆ 〈新板浮絵八ツ山花盛群集之図〉 (図右に「八ツ山」、図左に「羽根田」の書入れ。25.9×38.1。ホノルル美術館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※桜見物の人々と、羽田沖に浮かぶ数隻の船。

☆ 〈新板浮絵亀井戸天満宮之図〉 (図右に「梅屋敷」、図左に「亀井戸」の書入れがある。25.0×37.4。島根県立美術館：永田コレクション/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵)

※梅屋敷には梅の花が咲き、亀戸天神の太鼓橋には参詣の人々が渡っている。

☆〈新板浮絵三芝居顔見世大入之図〉（図右上に「堺町 ふきや町」、図左下に「木ひ

き町」の書入れがある。24.7×37.2。太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館・ピーター・モース・コレクション蔵

※「下谷池の端仲町 伊勢利板」の大看板を掲げた芝居小屋の前の雑踏。版元の伊勢屋利兵衛の出版広告をさりげなく書きいれている。

543 新板浮絵三芝居顔見世大入之図（すみだ北斎美術館）

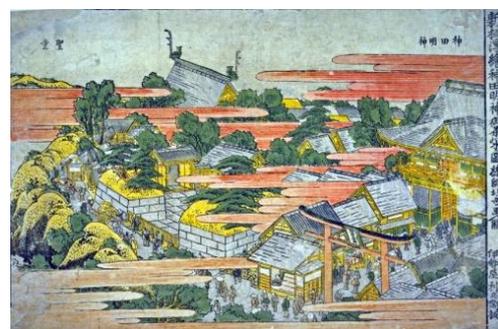


☆〈新板浮絵神田明神お茶の水ノ図〉（図右

に「神田明神」、図左に「聖堂」の書入れがある。24.7×38.0。島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵

※神田明神の鳥居をくぐる参詣人たち。図の左の湯島聖堂につながる道を往来する人々。

544 新板浮絵神田明神お茶の水ノ図（すみだ北斎美術館）



☆〈新板浮絵王子稲荷飛鳥山之図〉（図右に「飛鳥山」、図左に「王子」の書入れがある。25.2×38.6 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション）

※桜の花咲く王子稲荷前の飛鳥山の賑わい。

☆〈新板浮絵三囲神社牛御前両社之図〉（図右に「三囲」、図左に「牛御前」の書入れがある。23.6×36.3 太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション蔵）

※三囲神社と牛御前に通じる道を往来する人々。三囲神社（現東京都墨田区向島2-5-17）は、弘法大師が祀ったといわれる田中稲荷が始まりという。当時は現在地より北の田圃の中にあった。文和年間（1352～56）に、近江の三井寺の僧・源慶が改築した際、土中から白狐にまたがる老翁の像を発見、その像の周りをどこからともなく現れた白狐が三度回って消えたという縁起から「三囲」の名がつけられた（「三囲神社」案内より）。

545 新板浮絵三囲神社牛御前両社之図（すみだ北斎美術館）



牛御前は、現在の牛島神社（現東京都墨田区向島1-4-5）のこと。もとは、本所区向島須崎町（現東京都墨田区小梅3丁目、向島2丁目から3丁目辺）にあった。貞観2年（860）に創建されたとされ、天文7年（1538）に後奈良院より「牛御前社」との勅号を賜ったと案内にある。北斎の頃はこのように呼ばれていた。この辺りの旧本所一帯を牛島と呼んでいたため、明治初年から牛島神社と称するようになった。

☆〈新板浮絵富賀岡八幡宮之図〉（24.6×37.2。島根県立美術館：永田コレクション/太田記念美術館：ヒーターモース・コレクション）

※深川の富岡八幡宮（現東京都江東区富岡1-20-3）を描いているが、本来、富賀岡八幡宮といえ、現東京都江東区南砂7-14-18にある八幡宮を指し、深川（富岡）八幡宮より古く、元宮とも元八幡と呼ばれる神社であるので、そこと混同した名称になっている。石の鳥居の下に大勢の参詣者があり、深川八幡宮と海の側の洲崎弁天のある地が霞の向こうに描かれる。

※洲崎（現東京都江東区東陽1丁目一帯）は、元禄年間に埋め立てられ、深川洲崎十万坪と呼ばれた景勝地で、東京湾を一望できた。現在「洲崎」名は「洲崎郵便局」「江東信用組合洲崎支店」名に残すのみ。歌川広重も「名所江戸百景」〈洲崎十万坪〉に描いている。



546 新板浮絵富賀岡八幡宮之図（島根県立美術館）

☆〈新板浮絵新吉原大門口之図〉（図右に「新吉原」、図左に「仲の町」の書入れがある。25.7×38.1。日本浮世絵博物館/江戸東京博物館/すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/バウアー・コレクション蔵）

※新吉原の大門口をめぐり仲の町に行く人々の雑踏を俯瞰して描く。図の右上に「新吉原」の字があり、門を挟んで図の左上には「仲の町」の字が記されている。図の右には狩野屋の暖簾が描かれる。



547 新板浮絵新吉原大門口之図（すみだ北斎美術館）

☆〈新板浮絵日本橋肴市繁昌之図〉（図右に「日本橋肴市」、図左に「江戸橋 四日市」の書込みがある。24.4×36.3。北斎館/太田記念美術館：長瀬コレクション/島根県立美術館蔵）

※図の手前に江戸橋を渡る人々を描き、図の中央に日本橋を渡る群衆を描く。橋の北詰の東に位置する魚河岸の賑わいを図の右側に描く。



548 新板浮絵日本橋肴市繁昌之図（太田記念美術館）

☆〈新板浮絵東叡山花盛之図〉（図右に「東叡山」、図左に「不忍弁天」の書込みがある。26.2×38.5。すみだ北斎美術館：ヒーターモース・コレクション/江戸東京博物館蔵）

注) 東叡山：東叡山寛永寺。関東の天台宗本山。

※蓮の葉が一面に生えた池に舟が浮かび、太鼓橋を渡って弁天に参詣する人々。遠く東叡山の屋根が見える。

☆〈新板浮絵両国橋夕涼夜見世之図〉（図右に「両国橋」、図左に「両国広小路」の書入れがある。25.7×37.8 太田記念美術館：長瀬コレクション/日本浮世絵博物館蔵）

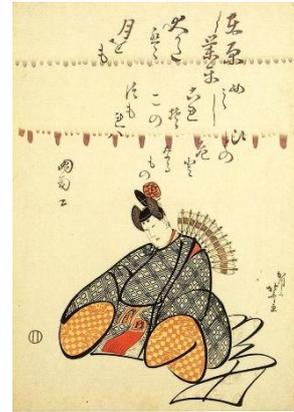
※両国橋を往来する人々。対岸は両国広小路。

●錦絵『文字絵 六歌仙』（この頃か。文化6年～10年〈1809～13〉説あり。縦大判揃物。かつしか北斎画。江崎屋吉兵衛版。各平均38.8×26.2）

※全図とも、歌仙の輪郭線がその人物の名前となっている文字絵として描かれる。図の上部に各歌人の歌が記される。文化中期にも『六歌仙』あり。

☆「在原業平」（太田記念美術館：長瀬コレクション/山口県立萩美術館：浦上記念館/洛東遺芳館/平木浮世絵美術館蔵）

※ 築の矢を背負い、巻纏で両脇に綏のある冠を被っている。「在ハラのなり平」の文字で構成。 549 在原業平（平木浮世絵美術館）



☆〈僧正遍照〉（中右コレクション/島根県立美術館蔵）



※赤い法衣を着て、袂で口を覆いこちらを向いて座っている図。

550 僧正遍照（島根県立美術館）

☆〈喜撰法師〉（島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※墨染の法衣を着て扇子を持ちこちらを振り返る法師。「きせんほう志」で構成。



551 喜撰法師（島根県立美術館）

☆〈大伴黒主〉（島根県立美術館：永田コレクション/山口県立萩美術館：浦上記念館蔵）



※垂纏を被り、坐って前を向いている図。

552 大友黒主（島根県立美術館）

☆〈文屋康秀〉（山口県立萩美術館：浦上記念館蔵）

553 文屋康秀（山口県立萩美術館）

※烏帽子を被り、髭を蓄えた康秀が座って前方を見ている図。「ふんやのやすひで」で構成。



☆〈小野小町〉（太田記念美術館：長瀬コレクション/中右コレクション/リッカー美術館/落東遺芳館/平木浮世絵財団/ケンブリッジ・フィッツウィリアム美術館/島根県立美術館蔵）

※長い髪を束ね、桧扇を持ってこちらを振り向いている図。

554 小野小町（島根県立美術館）

●肉筆画「夏の朝



鏡見美人図」（この頃か。文化10年説あり。絹本着色一幅。葛飾北斎。印 亀毛蛇足。

86.1×32.4 岡田美術館蔵）

※夏の朝、鏡に向かって髪を整えながら顔を映す立ち姿の女の図。足元には鏡の蓋の上に朝顔を入れた茶碗と、歯磨き用の房楊枝に歯磨きの袋が置かれている。女の左には藻草と金魚が泳ぐ金魚鉢がある。吊るされた衣桁には男物の着物が掛けられている。

本図には同じ構図の弟子の北鼎と北溪の絵がある。

555 夏の朝（岡田美術館）



●肉筆画「七福神図」（合筆。絹本着色一幅。「文化庚午歳 甲子夜」とある。北斎は「布袋図」を描く。北斎画。印 亀毛蛇足。67.7×81.2 西村屋与八（永寿堂）版 エトアルト・キョウツネ記念ジェヴァア東洋美術館蔵）



※外に、鳥居清長（毘沙門天）、歌川国貞（弁財天）、歌川豊春（寿老人）、歌川豊国（大黒天）、勝川春英（福祿寿）、歌川豊広（恵比寿）が描く。

絵上部の賛に「一幅に千両箱を七ツまでよあつまりし江戸の名筆 応永寿堂主人需山東京伝 印 山東京山書」とある。三東京山は、山東京伝の弟。

556 七福神図（『2005年北斎展図録』より転載）

●肉筆画「朝日に鳥」（この頃か。紙本淡彩一幅。北斎。25.0×36.0）

※画面いっぱいに鳥の図。その背後に朝日が描かれる。

●肉筆画「鯉図」（着色一幅。江都画狂人北斎画。印 亀毛蛇足 101.9×44.0 群馬県立近代美術館蔵）

※水中に立っているように泳ぐ鯉。水底に水草が揺らいでいる。図上部は水面に近く、明るい色彩となっている。 557 鯉図（群馬県立近代美術館）



●絵暦「注連縄に馬の絵馬」（1月。北斎画。『年譜』による）

●絵暦「春駒と鞆」（9.2×8.8 すみだ北斎美術館蔵）

●摺物「梅の鉢と扇」（1月。色摺。北斎画。18.3×17.2 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※鉢植えの梅と本年の干支を示す馬の絵柄の扇が描かれる。図左の浅紅園の狂歌の左に

「午初春」とある。「いとけなき春の霞にこもりうた あ山こえて来なくうくいす みちのく音羽瀧子」、「諸人のこゝろもいさむうまの春 ひんからよりそまつかすみひく狂歌庵 四方白壁倉持 別称 山中鹿住」、「初夢に見えしはうつゝうつゝには ゆめのやうにそかすむ不二の根 浅紅庵」の狂歌が記される。

●摺物「日本式筆」（1月。葛飾北斎画）

※画中の屏風に表題と干支がある（『年譜』による）。三筆とは、平安時代、能筆の空海、嵯峨天皇、橘逸勢をいうが、その後、時代により他の三筆が称せられた。

●摺物「福寿草に短冊と筆箱」（「硯箱に福寿草」とも。春。色紙判色摺。かつしか北斎画。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※「午春」とある。筆箱に硯と墨と筆が置かれ、開いた蓋の側に、福寿草と松の小枝を活けた鉢と短冊が置かれている。図の上部に狂歌が書かれる。

文化8 (1811) 辛未 52 歳 時太郎、葛飾北斎、新武蔵国葛飾住藤北斎戴斗、かつしか北斎、北斎、葛飾北斎戴斗、北斎燈下、前俵屋宗理北斎注 印 亀毛蛇足、雷辰、北、斎、
花押：こと (41 歳)、富之助：25 歳、(阿美与：23 歳)、(孫：2 歳)、阿栄 (14 歳)

【戴斗期】

◇この年より文化 11 年 (1814) まで極印と行司印（版元で出版物の行司役の印）の併用となる。

◇ゴローニン事件（「ゴローニン事件」とも）。国後島で測量中のロシア人ゴローニンを松前藩の役人が捕らえ、2年3ヶ月幽閉する。

◇最後の朝鮮通信使来貢（12回目）。

◇江戸大火（2月11日。一ヶ谷谷町より出火。四谷・赤坂辺、一里半の類焼。大名屋敷約三十箇所、寺社その他を焼く（文化8年「御上屋敷 御中屋敷。御下屋敷 るいせう道しるべ 上」東京大学情報学環図書蔵）。

◇2月13日、村田春海没（66）。

◇幕府天文方に「蛮書和解御用」（蘭学研究機関）設置。

◇刺青禁止令。

◇大田南畝の碑が牛嶋神社に建てられる。

◇この頃、歌川広重が歌川豊広に入門。

○式亭三馬、『浮世風呂』（第三編）。

○司馬江漢、随筆『春波楼筆記』（『伊曾保物語』の紹介）。

○烏亭焉馬、『花江戸歌舞伎年代記』刊行始まる。

【辰政ト云シ頃ノ門人】

この年まで「北斎・可候・辰政期」とし、同時に前年より戴斗期が始まる。

★辰政ト云シ頃ノ門人（『浮世絵類考：補遺』岩波文庫版 p 221 より）

注：無印または「増」は『増補浮世絵類考』、「新」は『新增補浮世絵類考』を示す。

（ ）内は割書を示す、ルビは筆者による。

※辰齋一雷斗（柳川重信ト云）一雷洲（青山ニ住ス、ヨミ本アリ 銅板ノ紅毛画ヲヨクス）
一重山（「新」二世重信）

【北齋と号してからの門人】

★北齋と号してからの門人（『浮世絵類考：補遺』岩波文庫版 p 221 より）

※北馬（「新」有坂氏俗称五郎八 「増」狂歌摺物多シ、別記アリ、画入ヨミ本数十冊ヲカケリ、後一家ノ画風ヲナス、蹄齋ト云、「新」浅草「増」下谷三スジ町ニ住ス）

※昇亭北寿（両国ヤゲンボリに住ス、錦絵山水ノ遠景多シ）

※拱齋北溪（別記アリ赤坂ニ住ス、スリ物ヨミ本多シ一岳山）

※北岱（浅草ニ住ス、スリ物ヨミ本多シ 「新」盈齋ト号ス）

※北鷺（スリ物ヨミ本アリ、「新」抱亭ト号ス）

※蘭齋北嵩（「新」島氏 閑々楼ト号ス「増」本郷ニ住ス、ヨミ本草双紙多シ、後唐画師トナル「新」東巨ト号ス、名重宣）

※東南西北雲（大工久五郎トアリ、スリ物錦絵アリ、画本アリ）

※戴岳北泉（別記ス、ヨミ本、画本多シ、二代目戴斗「編年史」）

※北口注（広「編年史」 大坂ノ人、別記アリ、後画狂人「編年史」）注）北口：北広。

※斗図楼墨僊（名古屋ノ産画本ヲ出ス）

※北洲（大坂ノ産、錦絵ヨミ本アリ）

★この年より戴斗号を用いる。但し副号としての使用で、主号は「北齋」とする説もある。

★この頃より挿絵減少、錦絵が多くなる。

★甲州へ旅するか（井上和雄『浮世絵師伝』〈渡辺版画店 昭和6年不詳〉を『年譜』で紹介）。

★3月、秩父長泉院の絵馬「桜花の図」を描く（『浮世絵八華5北齋』所収、永田生慈「北齋の生涯」より）。

●読本『椿説弓張月』残編(3月。角書「鎮西八郎為朝外伝」。六冊。曲亭馬琴作。葛飾北齋図画。印)亀毛蛇足。全28巻29冊完結記念に平林庄五郎(平林堂)が依頼した版。23/0×13.1 国立国会図書館/京都大学文学研究科図書館蔵)

※奥付に「文化八年辛未三月発販」とある。序文は前年12月。

●狂歌絵本『瀬川仙女追善集 露の淵』（12月頃。色摺一冊。遠桜山人(太田蜀山人)序。四方歌垣跋。瀬川路蝶撰。北齋筆。花押。西村屋与八版か。『江戸の絵本』所収・マテイ・フォラー「葛飾北齋と初期門人たち p 292」より。国立国会図書館/大阪大学附属図書館/西尾市瀬川文庫蔵)

※文化7年(1810)12月4日に没した三世瀬川菊之丞(仙女路考)一周忌追善本。北齋は一図のみ描く。他に、歌川豊国、鳥居清長、勝川春亭、蹄齋北馬、昇亭北寿、柳々居辰齋、

抱亭五清、勝川春英、ちよ菊などが描く。

558『瀬川仙女追善集 露の淵』（北斎筆：大阪大学附属図書館）

●合巻『新編月熊坂』（1月。前篇三冊。後編は刊行されず。時太郎画作。表紙は歌川国丸画。蔦屋重三郎版。ボストン美術館蔵）



※北斎自画作のため「時太郎」名を使用したか。

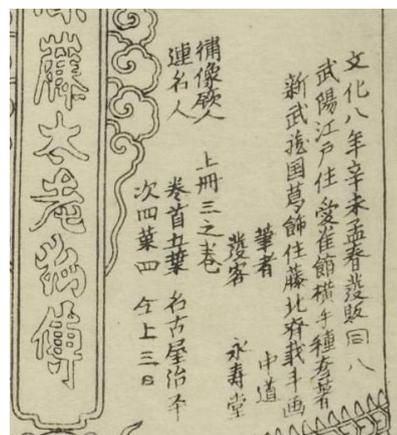
559『新編月熊坂』（ボストン美術館）

●読本『勢田橋竜女本地』（1月。角書「蘭菊の幣帛尾花の幣帛」。墨摺半紙本。三冊。柳亭種彦作。葛飾北斎。印雷震。見返しには、三井寺の釣鐘に「新武蔵国葛飾住藤北斎載斗画」とある。西村屋与八版。22.6×15.6 北斎館/島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※浄瑠璃本と読本の折衷的な本。『日本小説年表』（朝倉無声）では「こは読本と浄瑠璃本を折衷せんとせしもの新式浄瑠璃読本ともいふべきものなり」（p36）と評されている。文化10年（1813）、文政6年（1823）にも再刊される。



560 勢田橋竜女本地 見返し（大英博物館：立命館 ARC）



●滑稽本『串戯二日酔』（1月。内題『滑稽二日酔』。文政8年（1825）に再刊される。二冊。十辺舎一九作。葛飾北斎画。北斎は後編に挿絵を描く。前編は弟子の北高が挿絵を描く。西村屋与八版。国立国会図書館蔵）

※十返舎一九の序文に「文化八

年辛未猛春」とある。

●滑稽本『宮島参詣 続膝栗毛』（1月。二冊。十辺舎一九作。北斎画。口絵一枚を描く。村田屋次郎兵衛（栄邑堂）版か。国立国会図書館/早稲田大学図書館蔵）

●艶本『東にしき』（大判着色12枚組み折本。各平均36.0×25.0）

女好軒主人（溪斎英泉）序は付文とともに『絵本つひの雛形』と同じ。

※「北斎が最初に制作したこうした「折本」は、たぶん、今回新見の1810年代初期の『東にしき』であろう」（『縁結出雲杉』定本『浮世絵春画名品集成①』「北斎 中判

錦絵秘画帖」所収、リチャード・レイン「北斎の春画、そして『縁結出雲杉』より）。この『東にしき』が『つひの雛形』（文化11年）に継承されたとしている。

※『つひの雛形』は、現在では、溪齋英泉の絵とされている。

●錦絵「吉原大籬の図」（「扇屋の新年」「吉原妓楼の図」「遊郭座敷内部」とも。この頃か。縦大判五枚続き。北斎唯一の五枚続き。かつしか北斎画。伊勢屋利兵衛版。各38.7×25.5（全38.7×127.5） 静嘉堂文庫/洛東遺芳館/山口県立萩美術館・浦上記念館/メトロポリタン美術館/日本浮世絵博物館蔵）



561 吉原大籬の図（日本浮世絵博物館） 562 下図（拡大図：神戸市立博物館「浮世絵名品展」より）



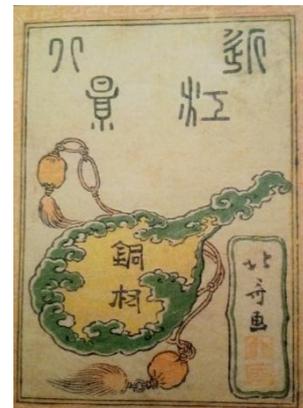
※新吉原の大見世「扇屋」の一階内部を描いた図。大籬は、吉原で最上級の店（大見世・総籬とも）をいう。図右から、「火の用心」の貼り紙のある台所。竈には絵馬があり、火吹きで火をおこす男や料理人がいる。階段の側に数人の花魁や禿。部屋の中央奥には張り見世があり、楼主とその女房の前には数人の花魁が座っている。楼主の背後の神棚の横に大福帳が四冊ぶら下がっている。図左には、版元伊勢屋の定紋（商標）が記された酒樽が積み重ねられ、その側に階段があり、小上がりの上と下にも数人の花魁がいる。

●錦絵『銅板近江八景』（この頃か。文化元年～文化13年〈1804～18〉と幅を持たせた説もある。横小判八枚揃物。北斎画。印北印齋〈落款は袋のみ〉。総州屋与兵衛版。袋以外は各8.5×11.3 埼玉県立博物館/神戸市立博物館/アムステルダム国立美術館蔵）
 ※袋には「近江八景 銅版 北斎画」とあるが、実際は木版の摺物。全図遠近画法を用いる。

我が国における八景図は中国の伝統的な山水画「瀟湘八景」の画題を引き継いでいる。湖南省長沙市の洞庭湖と流入する瀟水と湘江の合流するあたりの風景を北宋の宋迪が描いたのに始まるとされる。瀟湘夜雨・平沙落雁・煙寺晚鐘・山市晴嵐・江天暮雪・漁村夕照・洞庭秋月・遠浦帰帆など（ウキペディアによる）。

☆〈袋〉18.5×19.9

※縦長。軍配を緑色の波で縁取り、中に「銅板」と書き込む。右に「北斎 印北印齋」とある。 563 袋（アムステルダム国立美術館）



☆〈あはづのせいらん〉

※粟津は大津市の南部。京阪電鉄石山坂本線粟津駅近くの海岸線。粟津原の松並木は晴れた日の強風にざわつくので「晴嵐」と称され名所として描かれる。図の前方に城（膳所城か）の見える海岸線を行く旅人たちが小さく描かれる。



564 あはづせいらん（アムステルダム国立美術館）

琵琶湖大橋の南側。

565 かただのらくがん（アムステルダム国立美術館）

☆〈かたゝのらくがん〉

※水面に突き出した堅田にある浮御堂（満月寺浮御堂。現滋賀県大津市堅田1-16-18）から飛び出したような一連の雁の様子。JR 琵琶湖線堅田駅近く。



566 やばせのキハン（アムステルダム国立美術館）

☆〈やばせのキハン〉



※矢橋（現滋賀県草津市矢橋町に帰帆島がある）の広がる遠くの水面に、これから帰る帆船が数隻浮かぶ。矢橋帰帆公園がある。JR 琵琶湖線

南草津駅からバス。

☆〈せたのせきしやう〉

※瀬田の唐橋（現滋賀県大津市瀬田2丁目）の夕照。唐橋の向こうには白雲が靡く。唐橋は勢田川に架かる全長260メートルの橋。京都の宇治橋、山崎橋と並び日本三名橋と呼ばれる。京阪電鉄唐端前駅近く。

567 せたのせきしやう（アムステルダム国立美術館）



☆〈石山の秋月〉

※山上の石山寺（現滋賀県大津市石山寺1-1-1）の向こうに、秋の夕空に出ている月が描かれる。遙か向こうには白雲が立ちあがっている。JR琵琶湖線石山駅からバス。

568 石山の秋月（アムステルダム国立美術館）



☆〈からさきのよるのあめ〉

※唐崎神社（現滋賀県大津市唐崎1-7-1）と松の老木に夜の雨が降り注いでいる。JR湖西線唐崎駅近く。



569 からさきのよるのあめ（アムステルダム国立美術館）

☆〈ひらのぼせつ〉

※比良山系（滋賀県の琵琶湖西岸に連なる山地）に雪が積もり、図の右には夕暮れに坂道を往来する人々。JR琵琶湖線比良駅と北小松駅の間辺りか。

570 ひらのぼせつ（アムステルダム国立美術館）



☆〈三井のばんせう〉



※三井寺、別名園城寺（現滋賀大津市園城寺町246）前の往来を行く人々。晩方の鐘の音が聞こえるか。京阪電鉄石山坂本線別所駅近く。

571 三井のばんせう（アムステルダム国立美術館）

●額絵「桜花の図」（3月。秩父の長泉院注のための板絵額。着色。北斎燈下筆。印雷震。62.0×200.0）

※長泉院による見解（令和元年10月18日「当院では当時の記録が残っておりませんので正確なことはわかりかねます。言い伝えでは、秩父札所寺院が江戸の出開帳した際におられたものと思われる」

注）長泉院：現埼玉県秩父市荒川上田野557。曹洞宗・秩父札所29番。本堂正面の法楽

和歌（紙に奉納する和歌）の板額に、江戸で描かれた北斎の絵が掲げられている。垂れ桜で有名な寺。

572 桜花の図（秩父市HPより）

●肉筆画「蛸図」（紙本着色一幅。葛飾北斎筆。

印雷震。102・5×29・2 氏家浮世絵コレクション

（鎌倉国宝館内）蔵

※正面を向く蛸のみを描いて背景はない。図の上辺に空間があるので、賛が書かれる予定であったと考えられている。蛸の肌には点苔と呼ばれる、細かい点が無数に描かれ、皮膚の質感が強調される。



573 蛸図（鎌倉国宝館：氏家コレクション）

●肉筆画「鍾馗図」（文化八年辛未五月五日天水点筆前俵屋宗理北斎画 印雷震。縦長着色一幅。

ボストン美術館蔵）

574 鍾馗図（ボストン美術館）

【前～は「さきの～」】

※この頃の「前宗理」や、文化12年頃からの「前北斎」など、号の前に「前」をつけることが多くなる。

文政6年『今様櫛撿雛形』の柳亭種彦の序文に「前北斎為一」とルビが振ってあり、文政4年の団扇絵『梅と鶯』（有田屋清右衛門版）では印影に「さきのほくさゐ」を用いているので、本稿でも「前」は「まえ」「ぜん」とは読まず「さきの」と読む。他に「先ノ北斎」という表記もある。



【戴斗号登場】

●肉筆画「鎮西八郎為朝図」（「為朝図」とも。曲亭馬琴の賛により12月大晦日の作。絹本金砂子地一幅。葛飾北斎戴斗画。印雷震。平林庄五郎版。59.3×81.9 大英博物館蔵）

※為朝の剛弓を一人が弓を押さえ、二人が弦を引くが、引ききれない。側で鬼が見ている図。図中に七言絶句の後に続けて「雲のまどふ 心の鬼か罵 はれて弓はり月の影あふくなり 文化辛未隆冬除夜 曲亭馬琴題」とある。

575 鎮西八郎為朝図（大英博物館）

※文化8年に完成した『椿説弓張月』を祝い、版元の平林庄五郎は文中の名場面を北斎に描かせ馬琴に賛を依頼したという。「八年の春、版元平林庄五郎、作者に報ふに潤筆注¹の外に金十両注²を以てす。且北斎に為朝の像を描かせ、曲亭に賛を乞ふて、これを懸幅にして祭れり。その贏余多きをもて徳とする所也」



(^{きよくてい ぼんきん きんせいのものほんえい どきくしやぶるい} 曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』天保5年(1834)1月6日条 岩波文庫版。p216)
注1)潤筆：書や絵を書くこと。

注2) 金十両：約100万円～150万円。

図は『椿説弓張月』後編卷之二、第十八回の一場面である(2005『北斎展図録』)。同図と同じ場面を『椿説弓張月』前編卷之一の口絵にも描いている。但し、為朝と鬼の位置が左右逆転している。

●肉筆画「日蓮上人像」(「日蓮上人図」とも。紙本着色一幅。葛飾北斎戴斗拝画。花押。40.6×20.3 光ミュージアム蔵)

※日蓮が坐して経典を広げている図。

※画中右上に「南妙法蓮華経 日蓮大菩薩」とあり、下に「安立山日羊(「羊」は、二点しんにゆうに羊)〈花押〉」とある。安立山は長遠寺(現東京都台東区元浅草2-2-3)のことで日蓮はこの寺の僧でもあった。北斎は日蓮宗を信仰していた。飯島虚心の『葛飾北斎伝』の草稿には、長遠寺にかつて北斎筆の奉納した額絵「日蓮上人小松原御難の図」があったと記されているという(2005『北斎展図録解説』p336)。



576 日蓮上人像 (光ミュージアム)

●肉筆画「杣人春秋山水図」(この頃か。絹本着色三幅対。葛飾北斎戴斗。印 亀毛蛇足。各約99.0×38.9 福井県立美術館蔵)

※中国絵画や南蘋派(「なんぴんは」とも)注から学んだことを思わせる作品。

注)南蘋派：沈南蘋(康熙21年(1682年?)は、中国清代の画家。1731年(享保16年)



来朝、長崎に2年間弱滞在し写生的な花鳥画の技法を伝えた。弟子の熊代熊斐が南蘋派を形成。円山応挙、伊藤若冲など江戸中期の画家に多大な影響を及ぼした(ウイペディアによる)。

577 杣人春秋山水図 (福井県立美術館)

〈右図〉春景の図。雲の上まで伸びる山岳の道に沿うように家が立ち並び、その前の道を多くの人が往来している。山岳の先には更に峨々たる岩山が真直ぐ聳え立つ。

図上部の岩山は、弘化4年(1847)の「渡船山水図」にも描かれている。雲下には白鳥が連なるように飛んでいる。

〈中図〉薪と子どもを背負った杣人(樵夫)が、斧を杖にして山道を行く。子どもは何か

を指差している。空には五羽の雀が飛んでいる。

〈左図〉秋景の図。山岳の村里や山肌や遠景の村里に紅葉が咲き、白屋根の家並みの前の道には多くの人が往来している。

文化9 (1812) 壬申 53 歳 葛飾北斎辰政、葛飾北斎雷震、北斎老人、鏡裏菴梅年、 葛飾北斎、北斎、紫色鷹高 印 亀毛蛇足、雷震、勝しか：(こと：42 歳)、(富之助： 26 歳)、(阿美与：24 歳)、(孫：3 歳)、阿栄 (15 歳)
--

【絵手本の時代】

- ◇4月6日、松平定信、隠居して楽翁と号す。
- ◇8月14日、商人高田屋嘉兵衛が樺太でロシア船に捕らえられカムチャッカに連行される。
- ◇10月28日、勝川春好没(70)。
- ◇安藤広重、歌川姓を名乗る。
- ◇清元延寿太夫により浄瑠璃の清元節始まる。
- 曲亭馬琴、柳橋たもとの料亭万八楼で書画会を催す。

【長男没し、後妻と別居か】

★長男、富之助没(26歳)。これにより富之助の養子先の中島家からの北斎への資金援助がなくなるとする説あり(リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p96)。

★富之助の没後、中島家は別の養子を入れ、その養子に北斎の次女阿鉄が嫁し、間もなく没したとされる(田崎暘之助『浮世絵の謎』p183)。

この説に従えば、阿鉄はこの年22歳で没したことになる。文化5年(1808)に18歳で没したともされる。

★「五十三歳の頃より、独居して、婦人を近づけざりしと。」(『葛飾北斎伝 p306』)とあり、この頃より後妻ことは、妹の家に住み北斎と別居したともいわれる。

【第一次関西旅行、『北斎漫画』の下絵を描く】

★第一次関西旅行。名古屋、伊勢、吉野、紀州、大坂など。大坂では弟子の春好斎北洲(生没年不詳)、その弟子春梅斎北英(生没年不詳)らが活躍中。

★秋頃、門人牧墨僊(月光亭)(1775~1824。元尾張藩士)注の南鍛冶屋町下新道北西角(現愛知県名古屋市中区栄一丁目)宅に招かれ、約半年滞在し『北斎漫画』の下絵300余図を画く。墨僊が北斎を知り合いの名古屋の東壁堂(永楽屋東四郎)に紹介する。文化6年墨僊の戯画本『狂画』『狂画苑』刊を北斎も見て影響されたか。

注) 牧墨僊：初め喜多川歌麿の弟子であったが、文化3年(1806)、師の没後に北斎の弟子を希望していたといわれる。文化14年(1817)条参照。

【名古屋滞在の様子】

永田生慈『葛飾北斎』(吉川弘文館 p161~162)では、永楽屋佐助(本名、中川佐助。明治に永楽屋東明堂という書肆を名古屋末広町で営む)の、北斎の名古屋滞在の思い出話を記録した武田醉霞の「葛飾北斎尾張名古屋の生活」(『浮世絵』10号 大正5

年：1916 浮世絵社）を紹介している。

「(略) 又北斎の名古屋へ行しは、文化年間の頃とか、此地に臻(至)りし節は、鍛冶屋町、牧墨遷の家に行て草鞋の紐を解きたるとぞ、其後の事でもありましたか、同所花屋町に住居せしといふ、此事は北斎伝にはなし、私がまだ青年の頃、弊屋へ出入せし、未広町の書肆永楽屋佐助といふは、彼北斎漫画同画譜等の出版元、永楽屋東四郎方の、子僧上りの別家にて此佐助の咄しに、わたくしの未だ子僧の時分に、北斎さんの花屋町(割書：花屋町は本町通り、元大久保見町と未広町の境界の町にて、至て幅狭き町なり)住吉町寄りの南側中程、元は誰かの隠居所にてもありましたか、奥の間が六畳敷、次が四畳半、上り口が二畳、表の壁が円窓でありましたが、私が知人が少しの間住居せし故、度々此家へ行たればよく存じて居ましたが、小闇く日当りのよくない、いかにも陰気な家でありましたが、佐助のいふには、調度此節は漫画其他画本類の出来る時分で、版下の画や、又下画直しを取に行たり持て行たりお使にゆきて、北斎さんとは近付にてよく知て居りましたが、奥の六畳に寝所は不断敷ばなしで、其儘終に夜具蒲団はたゝみたることなく、土鍋で飯は煮捨て、茶碗皿小鉢はつひに洗ひたることなく、衣類とても、垢染たる、ぼろぐしたるものを着て、男世帯の独居ではありますが、私は子供心にも、いかにも穢ひ家きたなひ先生と思ひました。(略) 又ある時に私が、先生はいつごろ江戸へお帰りですかと尋ねましたれば、己はもふ江戸へは帰らぬよ、此名古屋は洵によひ所で、己の身体には時候も飲食物もよくかなつて居るから、名古屋は死場所などゝいはれましたれば、私もなんとなく心嬉しく思ひましたが、其内俄に伊勢とか京大阪へ、旅立たれたと跡で聞まして、大きに落胆いたしましたと、佐助がいひました咄を、私は覚えて居りました故に、今茲に記しておきます。(略)」(一部ルビ：筆者による)

【谷文晁 北斎の先触れとなる】

★北斎の関西旅行は文化9年(1812)と文化14年(1817)の2回。そのどちらかは特定できないが、北斎関西行きに先駆けての谷文晁注¹のエピソードを香雨楼主人が「北馬と文晁と北斎」(『浮世絵 19号』p27所収 酒井好古堂 大正5年11月の記事を、更に『日本浮世絵博物館所蔵 大揃え北斎』〈読売新聞社〉所収p125~126で転載)で紹介している。

「(略)また嘗て文晁、北馬を介して、尺五の絹本に三十両といふ大金を添えて、龍図の揮毫を北斎に囑したる事あり。当時三十両といへば方外の潤筆なり。殊に文晁からの注文とあれば、北斎も一生懸命にて健腕を揮ひたるなれば、其の画頗る見事なり。文晁もひそかに其妙技に感じたるも、一切人に示さず。直に之を美麗なる装を加へ、携えて京師に赴き、其途すがら旅宿につけば、必ず先づ此幅を床にかけてうちながめ、訪ひ来る人毎に之を示して、北斎が雄腕絶世の妙技なる所以を吹聴したり。

而して後、北斎が名古屋より大坂に往きし時は、既に文晁が海道筋に先触せしこととて、北斎の名、直に聞えて、到る処で持囃されしと云ふ。此事蓋し北斎が文晁の希望を容れて北馬を借したる寛量大度に注²、文晁大に感ずる処ありて、聊か之に酬めんと志した

るに依るなるべし。当時文晁は田安家の御絵師、北斎は板下書きの町絵師なれば、格式は雲泥霄壤の差異あるなかにして、かかる美談の伝はるは、いささか英雄同志の狂言めきたるに似たるあり。又文晁が自ら下って浮世絵師たる北斎を担ぎたるは、文晁が敵本主義注3のポリシイなるなからんかも知られども、兎に角共に一代の大家たる風を漂はしたる佳譚と称すべし。（以上、前田香雪翁の談話に拠りて記す）」（ルビは筆者による）。

注1) 谷文晁：1763～1841。江戸下谷根岸の生まれ。江戸時代後期の画家。別号は写山楼。30歳になるまで日本全国を旅し、文化9年（1812）に『日本名山図絵』を刊行した。

注2) 北斎が文晁の希望を容れて北馬を借したる寛量大度に：文晁が北斎の弟子北馬の才能を見出し、自分の弟子になるよう勧めたところ、北斎に許しを得るために文晁から手紙を出して欲しいと言われ、早速手紙を出したところ、北斎は快く承諾したというエピソードを指す（『日本浮世絵博物館所蔵 大揃え北斎』p125）。

注3) 敵本主義：目的が他にあるように見せかけて、途中から急に本来の目的に向かうやり方。「敵は本能寺にあり」の故事から（『大辞泉』より）。

※同内容を『葛飾北斎伝』（p132）では次のように記している。

「（略）彫刻家勝友の話に、嘗て聞く北斎翁京師に到りし時、佐伯岸駒脚注の画、盛に行はれて、画を翁に請うふ者、一人もなし。頃しも写山楼文晁、松平越中侯の命を奉じ、畿内の神社仏閣にある古画を検閲し、京師にあり。窃に翁を招きて、先づ竜を画かしめ、美麗なる袈装をなし、翁を促し、江戸に帰らしめ、しかして文晁かの竜の一軸を、おのが旅宿の床の間にかけておき、人あり来れば、翁が筆力の非凡なるを賞譽せり。これより北斎の名、大に京師に顕はれ、人々争ひて画を購ひしとぞ」（ルビは筆者による）。

脚注：江戸後期の画家。宝暦六一天保九年（1756－1838）。金沢の人。岸派の祖。独学で絵を習得。有栖川家、のち朝廷に仕え、越前守に進む。沈南蘋や円山派の影響の見られる画風。

★この頃より絵本出版に情熱を注ぐ。

【またまた馬琴と口論・絶交か】

※文化5年（1808）の口論、文化七年（1810）の団円に続き、再び曲亭馬琴と挿絵のことで口論、絶交する。あるいは文化8年（1811）のことか。

「曩に馬琴著作、北斎挿画の『南柯夢』、大に世に行はれ志をもて、書肆其の続編を著作せむ事を請ふ。かの『南柯夢』は、既に全く局を結びたる（筆者注：完結した）ものなれど、強て請ふにより、編を続きたるなり。北斎又この挿画をかきしが、再び挿画のことより馬琴と議論を生じ、二人終に交りを絶ちしといふ。一説に、後記巻一、六丁裏刀屋同樹が、立廻りの所に於きて、馬琴同樹をして、口に草履を含み、裳を裹ぐるのさまを画かんを請ふ。北斎笑て曰く、此の汚穢物、誰かこれを口にすべき、若し然らずとせば、君先づこれを口にせよ。馬琴大に怒る。これ二人が交りを絶ちし原因なりと」（『絵画叢誌』20巻〈明治21・11・29〉所収「画家畸談」。『葛飾北斎伝』p93～94で紹介）

※飯島虚心は、『竈将軍勘略之巻』(寛政12年:1800)の巻末に「あしき所は、曲亭馬琴先生へ御直し被下候云々」とあることや文化3年(1806)に北斎が馬琴宅に食客となっていたこと、馬琴自身が謹厳な人柄であることなどから「又按ずるに、北斎馬琴と交りを絶ちしといふは、甚疑ふべし」(ルビは筆者による)としている(p97~98)。

この争いについては、鈴木重三の『三七全傳南柯夢』の校合本調査(『人間北斎』(緑園書房 昭和38年:1963)により事実ではないとされる(永田生慈『葛飾北斎』p112 吉川弘文館)。

●読本『占夢南柯後記』(1月。角書『三七全傳南柯夢 第二編』。『三七全傳南柯夢』〈文化5年〉の続編。四巻〈三編四巻と合わせ八巻十冊〉。曲亭馬琴作。葛飾北斎辰政画。印雷震。榎本惣右衛門・榎本平吉(木蘭堂)版。国立国会図書館/早稲田大学図書館/国文学研究資料館/八戸市図書館蔵)。

※奥付には「文化九年壬申春正月良節発販大吉利市」とある。序文は前年7月。



578 占夢南柯後記 第二編 卷一 (早稲田大学図書館デジタル版より)

●読本『占夢南柯後記』(2月。角書『三七全傳南柯夢 第三編』八冊。『三七全傳南柯夢』〈文化5年〉の続編。曲亭馬琴作。葛飾北斎辰政画。印雷震。榎本惣右衛門・榎本屋平吉(木蘭堂)版。国立国会図書館/国文学研究資料館/早稲田大学図書館蔵)

●読本『青砥藤網模稜案 前集』(1月。半紙本五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎雷震絵画。平林堂庄五郎・鶴屋金助合版。立命館大学 ARC/早稲田大学図書館蔵)奥付には「文化九年壬申春正月吉日発販」とある。序文は前年10月。

●読本『青砥藤網模稜案 後集』(9月。半紙本五冊。曲亭馬琴作。葛飾北斎。平林堂庄五郎版。立命館大学 ARC/早稲田大学図書館蔵)奥付には「画工 葛飾北斎 文化九年壬申冬十二月吉日発販」とある。序文は6月。

●絵手本『略画早指南 前編』(1月。題簽には「前編」の文字はなし。中本墨摺一冊。全26丁。北斎老人。葛屋重三郎・越前屋吉兵衛版。鶴屋金助・河内屋茂兵衛の後摺版がある。すみだ北斎美術館:ピーターモース・コレクション/島根県立美術館/国文学研究資料館/フリーア美術館:プルヴェーア・コレクション/大英博物館蔵)『略画早学』(文山堂)としても大坂で刊行。

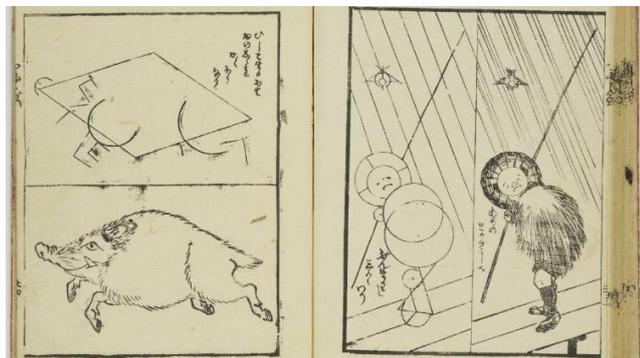
※絵手本の広告が薦屋の出版物に見られる。ここで、あらゆる物の形状は定規とぶんまわし（コンパス）による方と円という基本的形態に還元されるという「規矩方円説」を説く。後編は文化11年（1814）刊。

※「フレデリック・デ・ヴィト『絵画の光明』（1600年）が森島中良の『紅毛雑話』に引用され、そこから円と四角で顔などを描く方法を北斎流にいつそう発展させてできたものと思われる」（安村敏信「北斎の生涯と画業」〈『北斎 視覚のマジック』p6 2019年 平凡社）

【規矩方円説】

※序文「丈山尺樹寸馬豆人なぞいへる画に、儘く其法あり。ざれど起る処は方円を出ず。

今北斎老人是を基として規矩（「ぶんまわしひでうぎ」注1のルビあり）の二つを以諸の画をなすの定位を教ふ。かの焼筆を用て形をとるに同じ。是を見是を学びて、よく規矩の二つに自在ならバ細密の画といふとも、此工夫をもてなる可しと。略画指南の巻首に贅す。鏡裏菴梅年 文化壬申春 鏡裏菴梅年注」（句読点は筆者）



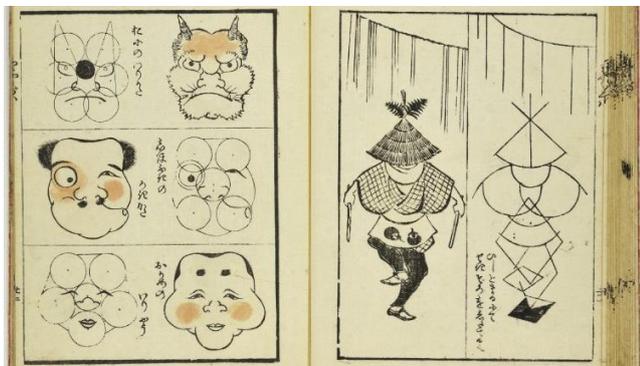
579「略画早指南」前編（すみだ北斎美術館）左：ひしとまるにて あめのとまりさし也 右：ぶんまわし三かくわり あめのとまりさし也

〈附言〉「一 此書ハひでうぎ（極定規）とぶんまわしをもつて、絵をかくの法にして、是より入るときハ、絵のわり谷をはやくしりて、かつかうつり谷おのづから出来る也。一 此外に、略画の一筆書、又、筆意、筆あたり等を早く教へて直に絵のかける書ハ、来西の春差出申候」（句読点は筆者）と来春に続編を予告している。

注1）「ぶんまわしひでうぎ」：コンパスと極定規をいう。

注2）鏡裏菴梅年：北斎の戯号。

※〈ぶんまわしにて子犬を画くの法〉〈三角と四角と丸と三つを重ねて猿の暫くを画く法〉〈四角にて鶏を画く法〉などで、○と□に分解された下書きと、それをもとにした完成図がともに示される。



580 左：おにのわりかた しほふきのかきかた おかめのわりやう

右：ひしとまるにて せきざろをしたてる

●読本『松王物語』（1月。角書「経嶋履歴」。半紙本六冊。小枝繁作。見開き表紙に葛

飾北齋画とある。印亀毛蛇足。河内屋嘉七(文栄堂)・角丸屋甚助(衆星閣)版。すみだ北齋美術館/国立国会図書館/国文学研究資料館蔵) 奥付には「文化壬申年春正月発行」とある。

平清盛が福原に移り住み、人工島経が島(現神戸市兵庫区築島)を造成するに当たり人柱となった少年松王丸の物語。

●説話集『北越奇談』(9月。六冊。橘崑崙(橘茂世)作。葛飾北齋補画。印雷震。柳亭種彦校合。西村屋与八版 22.2×15.3 早稲田大学図書館/島根県立美術館:永田コレクション/浦上蒼穹堂/すみだ北齋美術館蔵)

※読本に分類されるが、橘茂世が越後の寺泊生まれであるので、北陸地方(おもに越後)に伝わる奇談や珍奇な物産などを紹介した随筆。中に橘茂世の自画像も挿入する。凡例の末尾に「画は北齋翁の筆なれど画翁の盤多をたすけんと崑崙子のした絵のまゝに彫するもの四枚 かたわらに茂世の印をおしたり 印なき悉く北齋翁の画なり 辛未秋注」とある。

注) 辛未秋:文化8年の秋。前年に書かれたもの。北齋の版下が多いのを助けるために、茂世の下絵をそのまま彫ったものが四枚あり脇に茂世の印を押してある。印のない画はすべて北齋の描いたものだというのである。

※口絵に〈雪中の旅人たち〉を描く。雪道の街道を馬に乗って行く人、荷物を担いで行く人。遠景にも多くの旅人が行く。人々は皆、笠を被り俯いて行く。



581『北越奇談』口絵「雪中の旅人」(早稲田大学図書館)

●地誌『勝鹿図志 手操舟』(8月。勝鹿図志 てくりふね』とも。二冊。薄墨摺 一部彩色摺挿画入り。北齋筆。印葛飾(2019「新北齋展」解説 p 326 による)。22.0×15.0 行徳金堤(鈴木清兵衛)著。島根県立美術館:永田コレクション/大英博物館/西尾市岩瀬文庫蔵) 卷末に「文化年秋八月壬申」とある。文化(1813)説あり。

※葛飾浦(現千葉県船橋・市川・行徳辺り)の名所記。後半は諸国俳人発句集となっていて、夏目成美・谷川護物・鈴木道彦・其堂・鶴田卓池・井上士朗・小林一茶・建部巢兆・岩間乙二等が発句を寄せている。

北齋は「行徳金堤」編に挿絵一図のみ描く。他に三世堤等琳、鈴木金堤・長塩雪山・谷文晁・鈴木南嶺・建部巢兆等が描く。編者は行徳の人で新井の里正(村長)にして俳人。

●艶本『絵本つひの雛形』(1月。色摺大判折帖一冊。12図1丁の組物。落款:紫色鴈高。「つひ」は「つび」で「女陰」の意味だという。27.0×39.0 国際日本研究センター/浦上満蔵(折本))

※「文化八辛未稔晩冬中旬飯田書林藤倉より価百疋注にて調之」の書入れ本があるという(『年譜』による)。これによれば前年の暮れの制作で文化九年1月頃の刊行となるか。注) 金百疋:1疋=25文。100疋=2500文。1文=約25円で換算すると、約62,500円位

か。

※隠号は「雁高」「鷹高」とも表記されるが、本稿では「鷹高」で統一する。

※序文は『東にしき』（文化8年・1812）に同じ（『浮世絵春画名品集成』13所収）。序文末に「女好軒主人しるす」（制作年は白倉敬彦『絵入春画艶本目録』平凡社2007による）とある。「女好軒」は、溪斎英泉の隠号。

一方、娘の阿栄の手が入っている説がある。表紙に「陰陽和合玉門榮（改行）紫色鷹高作・女性陰水書」とあり、「陰陽和合」は男性と女性の交合を示し、「玉門榮」は阿栄を指すとする。「女性陰水書」の「書」は「画」の誤記あるいは誤刻であり、女性も描いたとする。

また「紫色鷹高」は、この名を北斎から譲り受けた溪斎英泉（二代目紫色鷹高）の号であり、阿栄と英泉によるものとする説もある（林美一「春画を描いた女浮世絵師 葛飾應為と「陰陽和合玉門榮」『プリンツ 21』1993年10月号所収。Wikipedia「葛飾北斎」より）。

同様の説は、第6図の画中の炬燵布団に投げ出された和本の題簽に同様の書き込みが「紫色鷹高作 女悦淫水書 陰陽和合玉門榮 太郎助兵衛板」とあり、「榮」が阿栄の隠号であるところから阿栄が関わった書であると、『芸術新潮』1989年3月号所収「北斎艶本への挑戦」（p43）でも述べている。また、北斎工房と阿栄と溪斎英泉の関わりがあるともいわれる。

582『絵本つひの雛形』（部分：国際日本研究センター）



●狂歌絵本『狂歌一会大相撲』（北斎）

※リチャード・レイン『伝記画集 北斎』（p331）による。

●狂歌絵本『堀河太郎 百首題狂歌集』（この頃か。文化8年説あり。二冊。六樹園飯盛撰。葛飾北斎補画。印雷震。他に北尾重政、窪俊満らが描く。蔦屋重三郎版。後摺に鶴屋金助版がある。22.1×15.8 島根県立美術館：永田コレクション/藤女子大学図書館蔵）

※平安時代後期の『堀河院太郎百首』（『堀河院百首』とも）や寛文11年（1671）『狂歌本『堀河太郎百首』を意識して「堀河太郎」としたか。100の題で1821首を掲載。挿絵は北斎を含む8名による9図。北斎は「桜花」（桜の老木の画）を描く。

●絵暦「神猿の鹿島踊り図」（1月。北斎画）猿の着物に文化9年を示す「壬」の文字と、輪郭線に大小月が示される（『年譜』による）。

●仕掛春画「絵暦の内」

☆〈猿廻し〉（仮題。春画絵暦。仕掛付。小判。無款。12.3×8.8）

583 猿廻し（部分：『伝記画集 北斎』より転載）



※猿回しがいる背後の部屋での情交を描く。左下の風呂敷にこの年の「壬」が描かれている。仕掛とは、伏せられた紙（この絵では枕屏風）を開くと隠された春画部分が現れるように細工されたもの。

☆〈屋形船〉（仮題。春画絵暦。仕掛付。小判色摺。無款）

※船の屋根に乗って手をかざして遠くを見る船頭。川の向こうに初日の出。船頭の半纏と船の中の提灯に「申」の字が描かれている。女の足元の布を剥がすと、船の中での情交が現れる。



584 屋形船（部分：『伝記画集 北斎』より転載）

☆〈無題〉（春画絵暦。仕掛付。小判。無款）

※大きな荷物箱の上に仰向けになった女の側にいる男。

文化10 (1813)	癸酉	54 歳	かつしか北斎、葛飾北斎、北斎辰政、北斎、印 臥遊、亀
毛蛇足、雷震：こと(43 歳)、(阿美与：25 歳)、(孫：4 歳)、阿栄(16 歳)			

◇相撲興行（浅草寺場所）

※正月 28 日初日から 3 月 18 日の千秋楽まで 47 日かかる。晴天 10 日間興業だが、雨と社寺の行事で中止もあったため。

◇6 月、イギリス船、オランダ商館乗っ取りのため長崎に来航。

○式亭三馬、『浮世床』（初編）。『浮世風呂』（第四編で完）。

○山東京伝、『双蝶記』。

★2 月、名古屋から江戸に戻る。すぐに墨僊へ礼状を出す。

「新春之御吉慶萬々御目出度ふ奉存升。御両所様益々御機けんよう御越年被遊恐悦至極に存升。御縁者様方は申に不及、御地に罷有候節、御馳走に罷成候、諸君子へも乍憚宜敷御伝声可然被下様、偏に奉願上升。当地家内不残無事に加年仕、只々其節々々御高情のみ御噂申上升。へいへいへい、エゝゝ亦永日（筆者注：いずれの意）上り升と恐々謹言 二月六日 かつしか北斎(印) 月光亭墨僊 様 人々参る」（安田剛蔵『画狂北斎』p 85）

★2 月刊行の「作者画工見立番付」で、北斎は行事の部に載り、門人では、小結に北馬、前頭に柳川重信、その他、北岱、北嵩、辰斎、北寿、北溪、雷川、北鷲などの名が見えるという（『年譜』による）。

★この頃より読本の挿絵から遠ざかり絵手本に向かい、葛飾派を広める。

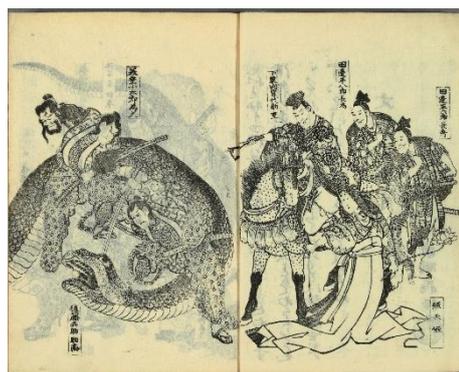
★文化元年からこの年まで 38 編 192 冊 1100 図の読本の挿絵を描いたとされる。

●読本『小栗外伝』初編（角書「寒燈夜話」正月。六冊。内 6 図は安田雷洲画。北斎辰政画。印 臥遊注。絳山（小枝繁）作。角丸屋甚助版。早稲田大学図書館/後摺版：国立国会図書館蔵）奥付には「文化十 癸酉年猛春新板」とある。

※『世界を魅了した鬼才葛飾北斎』（河出書房新社）では、文栄堂版（河内屋嘉七）としている。

※小栗判官の物語をもとに創作された伝奇物語。二編は、文化12年（1815）1月出版。全三編十五冊）注）臥遊：永田生慈『北斎の絵手本 五』（岩崎美術）年譜による（p276）。

585『小栗外伝』初編四丁（早稲田大学図書館）



【印・亀毛蛇足を譲る】

●肉筆画「鯉魚図」（4月25日作。「鯉亀図」とも。横長紙本着色一幅。北斎。印）亀毛蛇足。27.6×92.4 埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵

※鯉が二匹と亀が二匹、水中で泳ぐ図。水草が透けて見える。

※左端の直筆添書に「年来持伝候亀毛蛇足之印御譲り申上候 御出精可致候以上 文化癸酉年四月廿五日」（ルビは筆者）とある。文化10年4月25日に亀毛蛇足の印を門人・葛飾北明注に与えたのである。北明は文政7年（1824）『月桂神話』奥付に「東都葛飾北明」の落款と「亀毛蛇足」の印を用いている。



586 鯉魚図（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

注）葛飾北明：生没年不詳。北斎の用いた九々屋や画狂人の号も用いる。女流絵師と目されるが不明。『浮世絵類考』（故法室本。岩波文庫版 p181）には「北斎門人なり。氏俗称共に未詳。画狂人と号する読本を画けるもの多く有」とあり、その脚注に「『北明子画品』（文化十三年版）に『井上氏女北明子筆』とあり」と記されている。「女」は「娘」の意。

●肉筆画「扇を持つ立美人図」（この頃か。絹本着色一幅。葛飾北斎画。印）雷震。82.4×30.5 フリーア美術館蔵

※扇を持ち、黒の夏着に兵児帯風の赤い帯を大きく巻いて後ろに結んでいる姿。

587 扇を持つ立美人図（フリーア美術館）

●摺物「手紙を読む乙福」（1月。歳旦狂歌。葛飾北斎画）「酉の春」とある（『年譜』による）。

●絵暦「雪の送り」1月。（「雪の朝」とも。葛飾北斎筆。14.0×18.5 すみだ北斎美術館蔵）



※雪の朝に頭巾を被った男が訪ねると門前に手灯りを持って娘が迎えに出ている。娘の帯に大小月が示される。春待の狂歌「しつほりと雪のはたへの梅が香を くたひれるほと西の初春」が記される。

文化11 (1814) 甲戌 55 歳 葛飾北斎、戴斗、山水天狗末弟天狗堂熱鉄、鉄棒ぬらぬら、 北斎改戴斗、北斎改たいと、北斎 印 雷辰、臥遊、辰、政、一人人形：こと(44 歳)、 (阿美与：26 歳)、(孫：5 歳)、阿栄 (17 歳)

◇この年諸国が早魃で飢饉となる。

◇1月12日、歌川豊春没(80)。

◇10月4日(西洋暦)、ジャン・フランソワ・ミレー生(～1875)。

◇伊能忠敬、「日本沿海実測全図」完成。

◇長崎オランダ商館江戸参府。

◇富士講禁止令。

◇蕎麦屋「砂場」、大坂より麴町七丁目に進出(砂場藤吉)。

○式亭三馬、『浮世床』(第二編)。

○曲亭馬琴(48 歳)の長男鎮五郎、宗伯と称す(後に医師となる)。この年より生薬屋を家業とし、自作の本に広告を出す。

○曲亭馬琴、『南総里見八犬伝』第一輯(柳川重信画。天保13年：1842 まで刊行)。

○烏亭焉馬の咄の会禁止令。

【北斎号を門人に譲り翌年より戴斗号を使用】

★12 月、「北斎」号を門人の亀屋喜三郎(吉原の引手茶屋「亀屋」主人)に譲り、北斎は翌年より「戴斗」号を使用したか(安田剛三『画狂北斎』p115)

【尾上梅幸に媚びず、おじぎ無用・みやげ無用】

★「この頃注俳優尾上梅幸(筆者注：三世菊五郎の俳名)技芸、世に名高し。最幽霊に扮するに巧にして、殊に賞せらる。梅幸嘗て北斎を招き、幽霊を画かしめ、其の凶果して真に逼らば、これにならひ、扮装をなし、愈其の技を巧にせんとす。北斎来らず。梅幸一日輿に乗り、北斎の家を訪ふ。其の家もとより貧しければ、茶、煙草盆の設もなく、室内あれはて、管掃除せしことなければ、不潔いはんかたなし。梅幸このありさまに驚き、再び戸外に出で、輿丁を呼び、輿中の毛氈を出だし、これを室内に敷かしめ、さて室内入りて座し、一札を述べんとせしが、北斎其の挙動の不敬に亘れるを憤り、机によりて顧みず。梅幸亦憤然、一語を交へずして立ちさりたり。北斎意を枉げ、世に媚びることなき此のごとし。されど平常は、謙遜辞讓にして、門には、百姓八右衛門とかきたる名刺を貼り、室には、おじぎ無用、みやげ無用の壁書をかゝぐ。関根氏の話 按ずるに、北斎が、幽霊の面に妙なるは、当時の人既にこれを知る。故に梅幸其面を請ひしなり。(略)後に梅幸不敬の罪を謝す。夫より相交はること甚深し」(『葛飾北斎伝』p89～91 ルビは筆者による)

後に仲直り、親交を結ぶ。弘化4年(1847)には蚊帳を売った金で梅幸(梅寿)の舞台を見に行っている。

注)この頃:「本所石原の家」(現東京都墨田区石原町1丁目から4丁目)に住んでいた頃には間違いない。文化5年頃に、亀沢町(現東京都墨田区亀沢町)に新居を構え、文化6年頃には、本所両国橋辺に住み、文化7年には、葛飾に住むとも思われるが、本所石原町も「葛飾」一帯と称されるので、このエピソードがいつかは明確には不明。『葛飾北斎伝』(p89)では文化7年の記事の後に「この頃」と記されているが、「梅幸」名は、文化11年~12年に名のっているので、文化11年頃の話とした。

【北斎はとかく人の真似をなす】

★『武江年表』(国立国会図書館デジタルコレクションp173)では次のエピソードを紹介している。

「(政美注は)語りて云、北斎はとかく人の真似をなす、何でも己が始めたることなしといへり、これは略画式を蕙斎(筆者注:鋏形蕙斎・寛政9年<1797>の『鳥獣略画式』、寛政11年<1799>の『人物略画式』など)が著して後、北斎漫画をかき、又紹眞(筆者注:更に改名して蕙斎のこと)が江戸一覽図(享和3年<1803>)を工夫せしかば、東海道一覽図の図を錦絵にしたりしなどいへるなり」(斎藤月岑『武江年表』巻七 寛政年間記事。ルビは筆者による)。

注)政美:北尾政美(1764~1824)。浮世絵師。狩野派に転じた後、鋏形蕙斎と名乗る。

「北斎嫌いの蕙斎」の評判があったという。

【この頃の弟子230名以上】

※この頃には、孫弟子まで含めると230人以上が北斎門下にあったという(『江戸の絵本画像とテキストの綾なせる世界』所収、永田生慈『北斎漫画』考(三) p258)。

※鋏形蕙斎(北尾政美)の「略画式」の真似か(斎藤月岑『武江年表』の寛政年間の記事による)。

【北斎漫画初編刊行】

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 初編』(1月。半紙本。一冊。「伝神開手」は絵の神髓を学ぶ者の手本の意。同本は全15編まで刊行(平均60頁)される。初編は239図。図版総数は3600余。鈴木重三によれば3911図。平均22.8×15.8の寸法は15編までほぼ同じ。島根県立美術館:永田コレクション/すみだ北斎美術館:ピーター・モース・コレクション/東京国立博物館/山口県立萩美術館:浦上記念館/日本浮世絵博物館/ホノルル美術館/フリーア美術館:ブルヴェー・コレクション蔵)。

※文政12年(1829)春に再刻版あり(『年譜』)。

注)所蔵館等の『北斎漫画』図版は、初摺・後摺を限定していない。

※1月(孟春)刊行の初編の奥付には、「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋交門人:北亭墨僊、東南西北雲。文化十一甲戌孟春。書林:永楽屋東四郎(尾州名古屋本町七丁目)」初摺本には、各丁の折り目部分に「初版」を示す版心書名がない。

※これ以降、北斎と関わる永楽屋東四郎は、二代目である。初代は寛政7年10月23日に没している（55歳）。

☆半洲散人注の序文「(略) 今秋、翁たまく西遊して我府下に留り、月光亭墨遷と一見相得て、驩はなはだしく、頃、亭中に於て品物三百余図をうつす。仙仏仕女より鳥獸草木にいたるまで、そはなさざることなく、筆はぶいて神なせり。夫近世の画家、真をうつす者は必ず風致に乏しく、意を画く者は檢格なし。その図する所、疎淡にして明整式あり、韻あり。物々佐生動せむと欲す。喜ぶべく楽しむべし。嗚呼、たれかよくこれに加へ、翁真に画を学ぶものの開手となすべきかな。如夫題するに漫画を以てせるは、翁のみづからいへるなり 文化壬申（文化9年：1812）陽月 尾府下 半洲散人題」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による）

注) 半洲散人：1772～1853。神野世猷。字は文徽。号松篁軒。尾張藩士（『葛飾北斎伝』脚注 p 128）。

墨遷の家に逗留しながら、絵の手本として下絵を描いたというのである。「漫画」の語は北斎自らつけた名称で、気ままに書いた絵というほどの意味。

※この年発刊された『北斎漫画』には「初編」の記載がないが、これを十編までのシリーズ化する計画を角丸屋甚助が立て、他の版元と合梓の形で、以後角丸屋から出版された。

※「初編のカテゴリーと数」（若松謙二「『北斎漫画』で江戸時代を読む」より〈平成28年3月葛飾区教育委員会『平成27年度かつしか区民大学ゼミ 調べて書く葛飾』第6集所収）

「神祇」7「釈教」7「鬼神」0「靈獸」1「怪異」2「公家神官」2「武士」5「文人」5「中国人物」8「庶民」29「仕事」45「武芸兵馬」1「芸能」9「子供」9「遊び」3「風俗」2「鳥類」7「獸類」15「蟲類」19「水棲類」17「草木」31「山水」0「名所」1「社寺」2「家屋」2「建造物」1「交通」1「道具」0「岩石」0「物語」8「里謡」0「群像」0 計 239 図

※ライデン（オランダ）国際博物館には『北斎漫画』全 15 編が所蔵されているが、そのうち初編から 10 編までは、シーボルトが持ち帰ったものという（浦上満『北斎漫画入門』p 33 文藝春秋社 2017 年）。



588 初編（島根県立美術館）

【『北斎漫画』一冊 銀二匁八分】

※版元の永楽屋に一冊「銀二匁八分」という記録が残っていて、今の3000円から5000円くらいという（浦上満『北斎漫画入門』p30 2017年 文藝春秋社）。

●絵手本『北斎写真画譜』（3月頃。折本大本淡彩摺一帖。序文平由豆流。15図全て見開き図。無款。各平均25.7×17.0 近江屋与兵衛・鴨伊兵衛合梓版。刊記のない版も多くある。大英博物館/メトロポリタン美術館/東洋文庫/すみだ北斎美術館/島根県立美術館：永田コレクション/フリーア美術館/アーサー・M・サックラー美術図書館/チェスター・ビティ図書館/フリーア美術館：プルヴェア・コレクション/国立国会図書館蔵）

※序文の末に「文化とせあまりひととせやよひついたちの日」（文化11年3月1日）とある。「文政二年己卯年 東都書林 通油町 鶴屋喜衛門」とある後摺版が文政2年（1819）に刊行された。北斎存命中に後摺本をシーボルトがオランダのライデンに持ち帰る。

※「写真」は、実物からのスケッチの意味だという（リチャード・レイン『伝記画集 北斎』p145）。

※序文を書いた国学者・平由豆流（岸本由豆流。号：やまぶき〈木扁に在〉園1789～1846 村田春海の門人）が私家版として刊行したといわれる豪華出版物。風景、人物、動植物などを見開きで収める。

※（ ）の表題は、国立国会図書館デジタル・コレクションに付けられたもの。

☆〈布袋〉（布袋）

※長煙管で一服する布袋の脇に大きな袋。足元には包丁とまな板がある。

589 布袋（大英博物館）



☆〈脇息による公卿〉（好士蝶を詠す）

※脇息に両肘をつき、頬杖をして二匹の蝶を眺める公卿。

590 脇息による公卿（大英博物館）



☆〈塗師〉（侍丁）

※寺社の柱に刷毛で色を塗る職人。

591 塗師（大英博物館）



☆〈龍に乗る観世音〉（龍頭観音）

※縦判。龍に乗っている観世音菩薩。

592 龍に乗る観世音（大英博物館）



☆〈雪景山水〉「山水雪景」
とも（雪景）。

593 雪景山水（大英博物館）



※背景に小高い山。手前の海には数隻の船。家と松にも雪が被っている。見開き一丁の図。

☆〈梅樹の蕾〉（梅小月）



※梅の枝につく蕾の図を墨絵風に描く。国立国会図書館デジタル・コレクションでは、月の明かりの中に小枝が描かれる。

594 梅樹の蕾（大英博物館）

☆〈桜樹〉「桜花」とも（白桃）。

※開いた桜花を枝の数か所にバランスよく配している。

595 桜樹（大英博物館）

☆〈油菜に蜂〉（薔薇の花小虻）※油菜の花に飛んで近づく蜂。



596 油菜に蜂（大英博物館）



※大きく開いた牡丹花が二輪切りとられて笊に置かれている。

597 牡丹（大英博物館）

☆〈牡丹（牡丹）



☆〈燕子花〉「菖蒲」「杜若」「あやめ」とも。

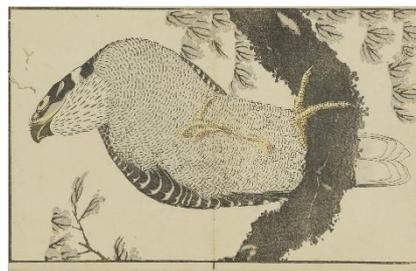


※赤と思われるかきつばたが生き生きと咲いている様子。

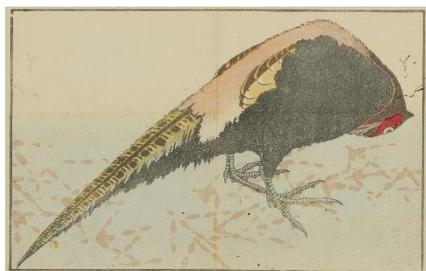
598 燕子花（大英博物館）

☆〈鷹〉

※縦見開き図。木にとまり首を上突き出し、ものを狙うような鷹。国立国会図書館蔵にはなし。599 鷹（大英博物館）



☆〈雉子〉「山鳥」とも（雉子）。



600 雉子（大英博物館）

※尾長を突き出して目を見開いて蹲る山鳥。周囲には足跡が楓の落葉のように乱れて描かれる。国立国会図書館デジタル・コレクションでは足跡が消されている。

☆〈鴛鴦〉（つかひ鴛）

※二羽の鴛鴦が曲線を描くように寄り添っている。同年の摺物「鴛鴦図」を転用したもの。

601 鴛鴦（大英博物館）



☆〈狸〉（月小狸）



※空中を飛んでいるような狸。

国立国会図書館デジタル・コレクションでは背景に月が描かれる。

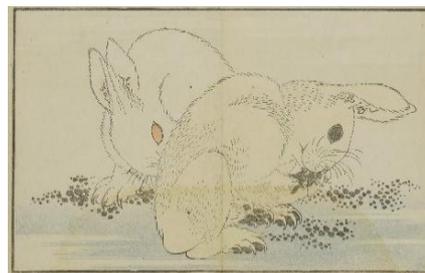
602 狸（大英博物館）

☆〈二疋のうさぎ〉

603 二疋のうさぎ（大英博物館）

※二匹の兎が寄り添っている。

※文政2年（1819）に鶴屋喜右衛門版の後摺本がある（オランダ（ライデン）国立民族学博物館：シーボルト・コレクション蔵）。初摺判とは図の配列が異なる（『北斎の絵手本 四』p269）。



※国立国会図書館（明治24年。目黒伊三郎・目黒十郎版）のデジタル・コレクションは画の配置や表題が大きくことなり、〈鷹〉〈燕子花〉が削られ、新たな図（※印）が他の絵師により加えられている。「目録」に示された表題と順序を参考のために以下に示す。

〈好士蝶を詠す〉 〈梅小月〉 〈※小鷺〉 〈龍頭観音〉 〈蘿蔔の花小虻〉 〈侍丁〉 〈雉子〉 〈白桃〉 〈布袋〉 〈二疋のうさぎ〉 〈つかひ鴛〉 〈※獅舞〉 〈雪景〉 〈月小狸〉 〈※蝶々とまれ売〉 〈※鯉〉 〈※雪中の獅子〉 〈※大津絵の鬼〉 〈※七福神の戯〉 〈※同つつき〉

〔新たに加えられた図〕

☆〈小鷺〉老木にとまる一羽の鷺。

☆〈獅舞〉扇子と御幣を持って右足を挙げて踊る獅子。

☆〈蝶々とまれ売〉子供たちの前で、棒につけた紐で結わえたおもちゃの蝶を揺らしながら売り歩く男。

☆〈鯉〉水の中を悠然と泳ぐ鯉。水面には光が反射している。

☆〈雪中の獅子〉雪の中でうずくまってこちらを見ている獅子。

☆〈大津絵の鬼〉一升徳利を下げ、傘をさした赤鬼が中空をまなざしている。

☆〈七福神の戯〉布袋が大きな袋に肘を掛け、その横で大黒天と弁財天がこちらを向いている。

☆〈同つつき〉前図の続き。恵比寿と寿老人が碁を打ち、その周りで福祿寿、毘沙門天が碁を見ている。

●絵手本『略画早指南』後編（8月。中本一冊。全28丁。無款。蔦屋重三郎（二代目）版。

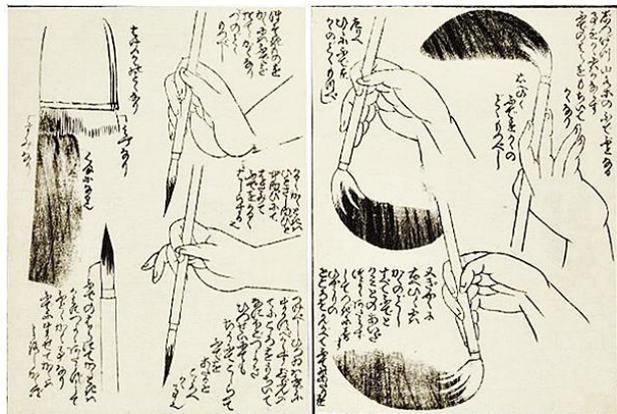
すみだ北斎美術館：檜崎宗重コレクション/島根県立美術館/大英博物館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション）。

※『葛飾北斎伝』（p 263）によれば後編の自序に「文化十一戌の中秋、山水天狗末弟、天狗堂熱鉄述」とある「天狗堂熱鉄」は「翁戯れに自号けたるなり」としている。また、「山水天狗」も偽名だが、実際に用いたものではない。

※前編（文化9年：1812）の奥付の広告に「此書ハ人物山水鳥獸虫魚草木のたぐひを一筆書にして早く筆意を教ゆるの法なり」とある。

※前編序文に続く附言には「一 此外に略画の一筆書、又、筆意、筆あたり等を早く教へて直に絵のかける書は来酉の春差出申候」とあり、略画の一筆書を続けて刊行する意図が述べられている。文化10年春に刊行の予定だった。

※巻末では、筆の持ち方、動かし方を図解している。花魁の絵では、書込みの「けいせい」のすがたはゆふべくにつくって千人の心をミンとかくなり（傾城の姿は『夕、可、作、千人、心、ミン』と描くなり）に従って、「夕」「可」「作」「千人」「心」「ミン」の変わり文字が配置され、それを迎れば「花魁」の絵が完成する仕組み。



604 『略画早指南』後編（すみだ北斎美術館）

※二代目葛屋重三郎は、文化10年か11年に『己痴羣夢多字画尽』（文化7年）と『略画早指南』の版木を売却した形跡があるので、『略画早指南』が二代目葛屋重三郎から刊行されたかは不明であるとする説がある（永田生慈『葛飾北斎の本懐』角川選書p 84）。

●読本『小粟外傳』二編（角書「寒燈夜話」1月。四冊。小枝繁作。葛飾北斎画。印臥遊。衆星閣（角丸屋甚助版）、文金堂（河内屋金助）合梓。奥付には「文化十一甲戌年猛春辰板」とある。初編は文化10年1月刊。早稲田大学図書館/国立国会図書館（後摺版）蔵）

【艶本名作『喜能会之故真通』】

●艶本『喜能会之故真通』（1月頃。半紙本色摺三冊。隠号：鉄棒ぬらぬら。22.1×15.7日本浮世絵博物館/国際日本文化研究センター/浦上満氏/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）

※題名は「甲子子祭」の文字変え。「甲子子祭」は、甲子の夜、大豆と黒豆と二股大根を供え、子の刻（23:00～1:00）まで起きて語り合い、大黒天を祀る行事。大黒天は子孫繁栄・男女和合の神。

※序文に「紫雲庵鴈高」とある。また「つるんでぬけぬ戌のはつ春」とある。北斎から隠号を譲り受けた溪斎英泉（紫雲庵鴈高）が序文を、本文は北斎、絵は、娘の阿栄ないし北斎一門の誰か、もしくは北斎と阿栄との合作とする説が有力。あるいは、上巻は北斎、

中・下巻は阿栄（応為）等の作とする説もある（『美術手帳』「葛飾北斎」特集。2016年12月増刊号）

☆〈上巻〉1、口絵（恥じらう女の顔） 2、殿様と新参の腰元 3、後家と養子 4、昼の情事 5、男の浮気封じ 6、人妻の浮気 7、餅つき屋と町娘 8、婚前交渉 9、女陰図

☆〈中巻〉1、口絵（恍惚境の女の顔） 2、船頭と若い女との情事 3、夫婦 4、児のできた妾との性交 5、中国人の男女 6、奥女中と供 7、人妻との情事 8、不破伴左衛門と阿国御前 9、女陰図

☆〈下巻〉1、口絵（行為の後の女の顔） 2、炬燵に入った夫婦 3、湯治先での人妻と供 4、蛸と海女 5、男と遊女 6、屋形船のなかの情事 7、男と遊女 8、女陰図

※北尾重政『謡曲色番組』（天明元年：1781）下巻の挿図「海土」に描かれた海女と大蛸の絡みの図を、北斎も見たか。



605 蛸と海女（日本浮世絵博物館）

606 北尾重政『謡曲色番組：海土（ARC 古典籍ポータルデータベースより）

※「蛸と海女」図は、パブロ・ピカソ「性愛の描画：女と頭足類」（1903 13.2×8.9 個人蔵）やオーギュスト・ロダン「蛸」（32.6×24.9 ロダン美術館蔵）などに影響している。

●扇面図「敗荷に蛙図」（文化12年：1815 説あり。紙本墨画淡彩扇面一面。北斎改たいと筆。印辰印政。扇面貼交屏風中の四面の一。上弦48.4 下弦20.9×17.5）

※敗荷は、「やれはす」とも言い、強風に吹かれて破れた蓮の葉をいう。敗荷にへばりつく蛙の図。

●摺物「山姥と金太郎」（この頃か。色紙判。色摺。北斎改戴斗筆。20.0×18.3 島根県立美術館蔵：永田コレクション蔵）

※金太郎と家来の猿が御幣の付いた烏万度注1を肩にし、猿・兎とともに、鹿島踊り注2をしている。金太郎の母の山姥は鉞に手をつき笑っている。背後に大きな朝日が霧の中から現れている。狂歌の賛は「宝船ハさみてなみは踊れども かしまうらにはなんなかり けり 秩廼屋楯成」とある。

注1) 万度：万度祓のことで、神の前で祓の詞を何度でも読んで穢をはらうことをいう。図では、その際に用いる神具を担いでいるが、鳥の絵が描かれているので烏万度といい、

金摺となっている。

注 2) 鹿島踊：鹿島神宮（茨城県鹿嶋市宮中2306-1）より発して関東沿岸部に流布した踊り。主に成人男子たちによる集団の踊りで疫病払い、五穀豊穰を願う。

●摺物「鴛鴦図」（全紙判色摺。北斎改戴斗。島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※『北斎写真画譜』の「鴛鴦」に転用された画。雌雄の鴛鴦が、梅の蕾を付けた木に見える土手の上に止まっているように描かれる。二代目北斎の句が先頭に記され、丙子、高長、斗石、戴雅堂、戴財の句に続き、八句目に「北斎改戴斗」の署名の句が記されている。更に、對斗、斗文の句が続く。北斎画号を亀屋喜三郎（二代目北斎）に譲った記念の摺物。



607 鴛鴦図（島根県立美術館）

●絵暦「雪玉遊び」（1月。「雪遊びの母子」とも。色摺。北斎画。9.3×12.6 すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション蔵）

※大きな雪玉を作る三人の子どもたちと、赤子を抱きながらそれを見ている女。赤子は雪玉を指差している。雪について子供たちの高下駄の跡の「二・四・五・六・八・十一」が小の月を表している。



●絵暦「目黒詣」（「目黒まゐり」とも。1月。中判色摺。北斎改戴斗筆。21.3×14.2 太田記念美術館蔵）

※『年譜』では文化10年（1813）としているが、落款から文化11年が妥当か。「正月屋」などと寄進者の名を記した大提灯の掛かる前で参詣する娘と婦人。ほおずきを手にした小奴が大提灯を指さしている。提灯に大小月が示される。殖生庵侘住の狂歌が記される。

608 目黒詣（2012 大阪市立美術館「北斎展図録」より転載）

文化12 (1815)	乙亥	56 歳	葛飾北斎、東都画工葛飾北斎、葛飾北斎翁、北斎辰政、前
北斎載（戴）斗、北斎改葛飾戴斗、葛飾前北斎翁、かつしかおやぢ、東都画工北斎改葛			
飾戴斗、画狂人北斎、葛飾親父戴斗	印	雷震、臥遊、亀毛蛇足、ふしのやま、北斎：こ	
と(45 歳)、(阿美与：27 歳)、(孫：6 歳)、			
阿栄 (18 歳)			

◇1月15日、歌川豊広没（65）。

◇3月19日、狩野融川没（38）服毒自殺か。

◇5月21日、鳥居清長没（64）。

◇幕府、落語を禁止とする。

○4月、杉田玄白『蘭学事始』成稿。

○5月21日、鳥居清長没(64)。

○6月6日、鹿都部真顔(鹿津部真顔・四方真顔・四方歌壇)没(77)。

○牧墨僊『写真学筆 墨僊叢画』(『北斎漫画』風絵手本)。

○柳亭種彦『修紫田舎源氏』初編。

★この頃、蛇山(本所中之郷原庭町。現東京都墨田区吾妻橋1丁目、東駒形2・3丁目辺)に住むか。この年夏刊行の『踊独稽古』の市川団十郎の序文に「(略)蛇山の主人、葛飾の癡老が筆を借て(略)」とあるところからの推測。

※本所中之郷原庭町は、牛島地区の中心地で、竹藪が多く『四谷怪談』の舞台となった蛇山がある。

●絵本『絵本浄瑠璃絶句』(1月。墨摺。半紙本墨摺一冊。元『絵本長生殿』(文化11年:1814頃。色摺本二冊)の改題改修して薄墨本にしたもの。表紙に「葛飾北斎画」とあり、版元の松屋善兵衛の住所「本町拾丁目」と書かれた傘を持つ男が描かれる。序文は月光亭墨遷。表紙には「東都葛飾北斎先生筆」、奥付には「東都画工葛飾北斎筆」とある。

印雷震。校合門人北亭(牧墨僊)。名古屋・松屋善兵衛版(薄墨摺本。墨僊の序文あり)と萬屋東平(名古屋本町1丁目)の後摺版(墨摺本)がある。江戸の角丸屋甚助(墨摺大本)も連版。浄瑠璃名場面集。後編は予告あるが未刊。15.5×22.3 メトロポリタン美術館/大英博物館/島根県立美術館:永田コレクション/名古屋市蓬左文庫/すみだ北斎美術館:ヒーターモース・コレクション(後摺版)蔵)

※各頁に人形浄瑠璃の54題の場面を描く。上部には浄瑠璃のさわり文句が書かれ、図中にはそれを五言の漢詩にしたものが書かれる。



609『絵本浄瑠璃絶句』(最終丁:メトロポリタン美術館 ARC 古典席ボーターバスより)

●読本『小栗外伝』三編(角書「寒燈夜話」)1月。五冊。小枝繁作。葛飾北斎翁画図。印臥遊。見返しには「北斎辰政画」とある。烽山翁(小枝繁の別号)の序文。角丸屋甚助版。早稲田大学図書館/国立国会図書館(後摺)蔵)奥付には「文化十二乙亥年猛春発行」とある。

●読本『橋供養』(1月。角書「文覚上人発心之記」)。五冊。北斎は初めの三図を描き、「右三葉前北斎画」と記す。葛飾前北斎翁画。他は門人の安田雷洲の筆。烽山翁(小枝繁の別号)戯編。角丸屋甚助版。国立国会図書館蔵)

【馬琴との連携終わる】

●読本『^{べいべいきやうだん}皿々郷談』(1月。半紙本六冊。^{きやくてい ぼ ぎん}曲亭馬琴作。前北齋^マ載斗筆。印^{いん}亀毛蛇足。朝倉伊八彫刻。榎本平吉版。^{きやくてい ぼ ぎん}曲亭馬琴との連携最後の作品。15.8×22.5 国立国会図書館/早稲田大学図書館/高知県立高知城歴史博物館/オランダ国立民族学博物館蔵)

※序文は文化10年(1813)10月の稿のため、その年まで使われていた印「亀毛蛇足」が使われている。文政12年(1829)の大火で、版木が焼失し、文政5年(1822)に再刻再刊されている。

※^{きやくてい ぼ ぎん}曲亭馬琴は『^{さんしちぜんなんかのゆめ}三七全伝南呵夢』(文化5年:1808)の稿本を^{とのむらしやうさい}殿村篠齋に譲渡した。^{しやうさい}篠齋は版本と稿本を比較し、人物の位置や数が違うことを指摘し、北齋の作為に猜疑心を抱き、その旨書簡を送った。馬琴も北齋の作為を計算に入れ、右に配置したい人物を予め左に置いて稿本を描いていたのである。画工任せにできない馬琴と、作者の意を汲まず我が道を行く北齋が並び立つことは難しく、文化十年(1813)注の「^{べいべいきやうだん}皿々郷談」が最後の共作となったのもやむを得ないという(WEB「浮世絵文献資料館」から)。

注)文化十年:実際は文化12年(1816)刊行である。



610『^{べいべいきやうだん}皿々郷談』坂戸の神前人身御供の図(巻2)(オランダ国立民族学博物館)

※^{きやくてい ぼ ぎん}曲亭馬琴との連携は、読本に限れば享和4年(1804)正月の『^{しやうせつひやくもん}小説比翼文』を初めとして、文化12年1月(1815)の『^{べいべいきやうだん}皿々郷談』までの11年間となるが、寛政6年1月(1794)の黄表紙『^{ふくじゆかいわりやうのしなだま}福寿海无量品玉』(春朗画)からの連携とすれば21年間となる。

【北さいも筆自由ニ候へ共、己が画ニして作者ニ随ハじ】

※上記の馬琴の書簡。

『^{ぼ ぎん}馬琴書翰集成』天保十一年八月二十一日 ^{とのむらしやうさいあて}殿村篠齋宛(第五巻・書翰番号56)

「文化五年^{こうほん}稿本といん本(印本)と御^{おひき}引くらべ被^{なら}成^{ごらん}御覽候^{ところ}処、ほく齋さし画^え稿本とは同様ニハ候へども、人物之右に有^あヲバ左^{ひだり}リニ直^{ただ}し、或ハ添^そもし、へらしも致^{いた}候。此心じつヲ以^も云々被^お仰^{おほ}示^{しめ}候御^ご猜^さ之^ご趣^す、少^{すこ}しも無^な違^{ちが}、流^{りゅう}石^{せき}ニ是^こハ君^{きみ}なるかなと甚^{はな}堪^だ心^{かん}仕^{しん}候。小^{しょう}生^{せい}稿^{こう}本^{ほん}之^の通^{とお}りニ少^{すこ}しも違^{ちが}ず画^えがき候^ご者^{もの}ハ、古^こ人^{じん}北^{きた}尾^び并^{なら}ニ豊^{とよ}国^{くに}、今^{いま}之^の国^{くに}貞^{まこと}のミに御^ござ^ら候。筆^{ふで}の自由^{じゆう}成^{なる}故^ゆニ御^ご座^ざ候。北^{きた}さいも筆^{ふで}自由^{じゆう}ニ候^ごへ共^{ども}、己^{おのれ}が画^えニして作者^{さくしや}ニ随^{したが}ハじと存^{ぞん}候^ごゆへニふり替^か候^ごひキ。依^よ之^の、北^{きた}さいニ画^えが^せ候^ごさし画^え之^の稿^{こう}本^{ほん}に、右^{みぎ}ニあらせんと思^{おも}ふ人物^{じんぶつ}ハ、左^{ひだり}リ絵^えがき(ママ)遺^{のこ}し候^ごへバ、必^{かなら}ず右^{みぎ}ニ致^{いた}候。実^{じつ}ニ御^ご推^{おほ}りやうニ相^あ違^{ちが}御^ご座^ざ無^な候」(ルビは筆者による)。

刊本の挿絵は先ず作者が下絵を書き(筆者注:それを稿本という)、それを画工が挿絵図にするのだが、北齋は馬琴の下絵のように描かないというのである。

【主号としての戴斗号現る】

※戴斗号は文化7年(1810)の絵手本『^{おのれがぼがむらむらどまじえつくし}己痴羣夢多字画尽』に「^{かつしかたいと}葛飾戴斗画」の落款があ

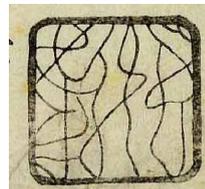
り、既に用いられていたが、これは副号であり、『北斎漫画 二編』の落款「北斎改葛飾戴斗」と「改」の字が入ってから「戴斗」が主号と認められるとする説を『画狂北斎』（安田剛蔵）で展開している（p114）。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 二編』（孟夏：4月。半紙本一冊。22.7×15.7 東京国立博物館/ホノルル美術館/すみだ北斎美術館/山口県立美術館/早稲田大学図書館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）

※序文には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。序文：六樹園主人（石川雅望）。奥付には「葛飾北斎筆 書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、校合門人：魚屋北溪、斗田北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十二年 孟夏」と記されている。

※二編より十編まで印影「ふしのやま」が用いられる。同印影は「よしのやま」と誤読されたこともある。

印影：ふしのやま



※初編の版元永楽屋東四郎に名を連ねた角丸屋甚助の企画で、『北斎漫画』を全十巻とし、相合版（共同出版）の形をとりながら、二編以降は実質角丸屋甚助によって刊行された。

※後摺版奥付には、「葛飾北斎。印雷震。校合：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉、竹川藤兵衛、角丸屋甚助、永楽屋東四郎」となっていて、刊行年は記されていない。

一般的には実質の版元は、奥付の版元並記の最後に表記される。

☆序文「おのれことさらに物めでするくせはあらねど、此さうし（草紙）の絵をうち見るより、てうちたゝきて（手打ち叩きて）、ふしあふぎ（ふし仰ぎ）、あさみおどろくこと、おほかたならず。さるは野山をかけるけだもの、鳥、むし、樹草のたぐひ、すべてこゝろゆくばかり、きはごとにかきなしたる、げにになき（二無き）上手のしわざとぞ見えたる。（略）この絵師をたれぞととふに（問ふに）、此ころの上手にすめる北斎の翁なり。（略）六樹園主人注」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による）〈（ ）の語句は筆者〉。注）六樹園主人：宿屋飯盛（石川雅望）。



611 『伝神開手 北斎漫画 二編』（すみだ北斎美術館）

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 三編』（4月。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北斎美

術館/島根県立美術館/山口県立萩美術館/ホノルル美術館/ライデン国立民族学博物館/フリーア美術館：フルヴェラー・コレクション蔵)

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合門人：魚屋北溪、斗田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十二年孟夏。書林：竹川藤兵衛(江戸日本橋四日市)、英屋平吉(江戸本石町十軒店)、永楽屋東四郎(名古屋本町)、角丸屋甚助(江戸麹町平川二丁目)」と記されている。

後摺版の奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 交 門人：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉(江戸本石町十軒店)、竹川藤兵衛(同日本橋四日市)、角丸屋甚助(同糴町平川町)、永楽屋東四郎(尾州名古屋本町七丁目)」とあり、刊行年の記載なし。

☆序文「(略)こゝに葛飾の北斎翁、目に見、心に思ふところ、筆を下してかたちをなさざる事なく、筆のいたる所、かたちと心を尽さざる事なし。これ人々の日用にして、偽を在るゝ事あたはざるもの、目前にあらはれ、意表にうかぶ。しかれば、馬遠郭熙注1が山水も、のぞきからくりの三景をとり(劣り)、千枝つねのり注2が源氏絵も、吾妻錦の紅画に閉口せり。見るもの、今の世の人の世智がしこきをしり、古の人のうす鈍なるを思ふべし。蜀山人注3」(『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による)

注1) 馬遠は、生没年未詳。中国南宋の画家。郭熙は、中国北宋の画家。

注2) 千枝つねのり：千枝と飛鳥部常則。ともに平安時代の宮廷画家。『源氏物語』などに絵の名手として取り上げられる。「この頃の上手にすめる千枝、常則などを召して、作り絵仕うまつらせばや」(須磨)とある。

注3) 蜀山人：大田南畝。



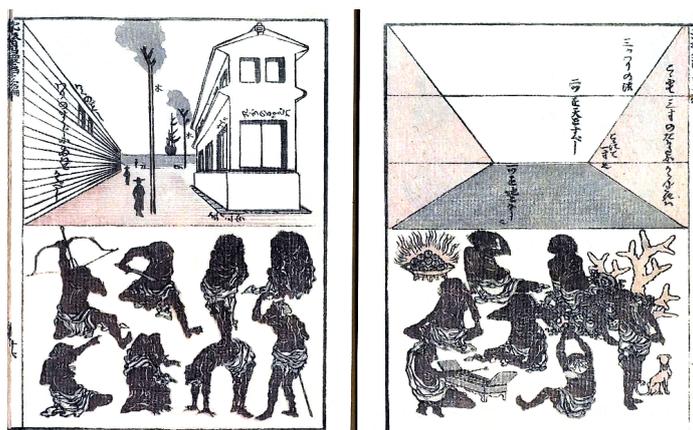
612『北斎漫画』三編(島根県立美術館)

【三つ割の法を説く】

※この巻で「三つわりの法(遠近法の構図)」を説く。右絵中の書き込みに「こゝにて三寸のたかさにかゝるときは」「こゝにて一寸也」「三つわりの法」「二つを天とすべし」「一つを地となす也」とある。左絵中には「九分のまどは」「三分」「木」「わりのすじにあはせかくべし」「かくのごとし」とあり、洋風の家と和蘭陀船と和蘭陀人が立っている図が描かれている。

※地面の部分を1、空の部分を2にして、地平線を低くしたり、近くのを大きく、遠くのはその3分の1に小さくするよう、建物や木、人の立ち姿を例にしている（小林忠『浮世絵ギャラリー2 北斎の美人』）。

613『北斎漫画』三編 頁の上半分が三つ割の説明（島根県立美術館）



【北斎翁、割出しに精しかりし】

※いつの頃の記事か不明だが、幾何の術による「割り出し」という画法で絵草紙屋依頼の「きりこ灯籠」注1の絵を描いたエピソードが、『葛飾北斎伝』に記されている。「三つ割」とも関係あるものと思われる。

「或画工談『浮世絵の専門語に、割出し、一に割物といふあり。即角物と丸物の割合にして、幾何の術によらざるを得ざるものをいふ。これは名手にても、腕と筆との工合のみにては、画き難きものなり。北斎翁は、よくこの割出しに精しかりし。絵草紙問屋某が、或人の囑托にて、一世豊国注2の許に至り、絹地へきりこ灯籠を画かんと請ふ。豊国諾して直に画き始めしが、暫くありて筆を投じて曰く、容易に似て、容易にあらず、緊急の需に応じ難しと。某止むを得ず、去りて北斎の許に行き、画かんと請ふ。翁直に答へて、割物なれば、明日来るべしといひ、約の如く画きたり。後に豊国これを聞き、嘆じて曰く、北斎に及ばざること遠しと。又翁嘗一商某の家に来り、紙鳶を画くべしといひ、大なる鯰、大なる瓢箪など、筆にまかせて画き出だし、これを切り抜き、骨を貼付し、糸目をつけてあげるべしといふ。某其の言の如くしてあげたるに、中心其の所を得て、左右に傾くことなかりしと。これ割物に精しきにあらざれば、なす能はざる業なりと」（p 218 ルビは筆者による）。

注 1) きりこ灯籠：立方体の各かどを切りそいだ形に枠を組み、紙や布を飾り垂らした燈籠。盃蘭盆会などに用いる（鈴木重三：脚注）

注 2) 豊国：初代豊国（1769～1825）。一陽斎。本名：倉橋熊吉。後：熊右衛門。役者絵に優れる。

●絵本『踊独稽古』（夏。中本一冊。序文：三升（七代目市川團十郎。定紋は「みます」）と秀佳（三代目坂東三津五郎）。最終丁に、かつしかおやぢ筆。歌舞伎舞踏の振付師・藤間新三郎補正。鶴屋金助版。18.5×12.3 島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/名古屋市蓬佐文庫/国立国会図書館：フーリア美術館：プリヴェア・コレクション/オランダ国立民族学博物館蔵）

※踊りの独習書。〈登り夜舟〉 〈気やぼうすどん〉 〈あくだまおどり〉 〈団十郎冷水売〉

の四曲の振り付け。天保6年(1835)夏に『おとり独稽古』(大島屋伝右衛門版)題で改彫・再摺本が刊行される。



614「踊独稽古」団十郎冷水売(島根県立美術館) 最終丁左下の署名 悪玉踊り(大英博物館)

※番号順の振り付けで踊るようにコマの連続で描かれる。〈あくだまおどり〉では(悪)と書いた面をつけて踊る。「悪玉踊り」は歌舞伎舞踊の一つで、文化8年(1811)に初演され、坂東三津五郎も踊ったという(棚橋正博校駐『江戸戯作草紙』小学館(P210))。

〈団十郎冷水売〉では、団十郎の格好をした男が、両天秤の桶に水を入れて担ぎ、見栄を切りながら踊る格好などが描かれる。

●絵手本『画道独稽古』(『己痴羣夢多字画』(文化7年:1810)を改題。三巻一冊。北斎画。蔦屋重三郎版)落款「北斎」は文化7年当時のものを用いている。

※後に『略画早指南』の第三編『略画早指南三編画道独稽古』としてシリーズ化した。

●狂歌本『東都勝景一覽』(9月。色摺。乾と坤の二冊。北斎辰政画(袋)。印北斎。寛政12年(1800)刊の『東都名所一覽』再摺版。菱屋金兵衛版。26.4×17.3 すみだ北斎美術館:ヒーターモース・コレクション/オランダ国立民族博物館/東北大学付属図書館/島根県立美術館:永田コレクション蔵)

※天保11年(1840)9月、河内屋茂兵衛の後摺版が出る。

※『東都名所一覽』と同時期に既に二つの題名で売りだしていたらしいとの説もある(『シーボルトと日本』展図録。p174。東京国立博物館編・朝日新聞社。昭和63年:1988)。

●摺物「六歌仙」(この頃か。色摺。一枚絵合作。葛飾親父戴斗筆。20.5×27.1 日本浮世絵博物館蔵)

※北斎は喜撰法師を描く。他に北溪(僧正遍照)、勝川春英(大友黒主)、岳亭春信(文屋康秀)、歌川豊国(小野小町)、歌川豊広(在原業平)が描く。

文化13(1816) 丙子 57歳 北斎改葛飾戴斗、東都画工葛飾北斎、東都画工北斎改戴斗、前北斎戴斗 印雷震、ふしのやま、辰、政:こと(46歳)、(阿美与:28歳)、(孫:7歳)、阿栄(19歳)

◇2月3日、河竹黙阿弥生(~1893)

◇2月、幕府、落語を昔物語・忠孝を説く事を条件に許可する。

◇烏亭焉馬「咄の会」が制限付きで解除される。

◇4月、江戸に疫病流行。8月まで続き多数の死者が出る。

◇9月7日、山東京伝（北尾政演）没（56）。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 四編』（夏。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北斎美術館：ピーター・モース・コレクション/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：ブルジェナー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗田楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十三年 子夏 書林として、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）」と記されている。

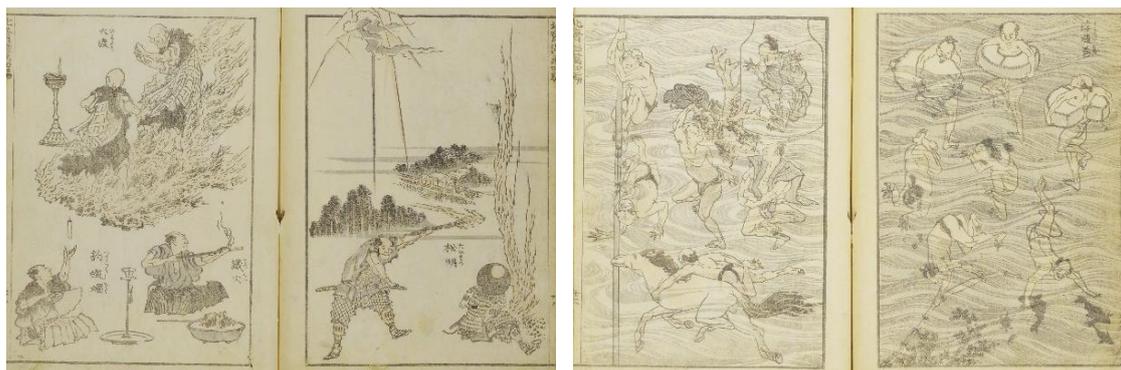
※後摺版の奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 門人：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（同日本橋四日市）、角丸屋甚助（同糀町平川町）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町七丁目）」と記されている。

☆序文：「（略）古人の風姿、古物の雅品、今知るものは、図画の妙也 今や葛飾戴斗先生、画に堪能にして其名高く、其画を乞ふもの多く、都下の紙これが為に貴し。爾れば、閣筆に違なく 門人臨本に乏しきを患ふ 先生これを憐みて、邂逅閑ある毎に山水人物をはじめ、動物器財に至るまで、随筆してこれを写 梓（筆者注：板木）彫て以門人に授 初学の梯楷（マ）注1たらしむ。（略）縫（之繞がない字）山漁翁注2識」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎による。ルビは筆者）

注1) 梯楷：階段の誤り。手本のこと。

注2) 縫山漁翁：未詳。

615 北斎漫画 四編（島根県立美術館）



★四編巻末にある広告

初編：興に乗じ心にまかせてさまぐの図を写す編を続で全部に充ことすミヤかなり

二編：初編におさめざる人物草木山川鳥獸魚鱉（魚とすっぽん）虫に至るまでことごとくあつむ

三編：二編にのせ洩れたるを拾ひ新羅万象のおとしをのせざるハなし

四編：草筆を加へ席上の臨本にしからしむることを要とす

五編：花表堂塔伽藍月卿雲客館齋房舎を委しく写して尚つきざるハ編々に洩すもらすことなし

六編：劍法槍法弓馬炮術等けいこの像を写して詳也もつとも武徳の尊きを表せる一書といふべし

七編：国々名勝の地風雨霜雪のけいしよくをうつす

八編：前編に洩れたるを補ひ且錦繡養蚕の業をゑがく

九編：和漢の武者および貞婦烈女のたぐひを載す

十編：神仏並に貴僧高僧幻術外風流の人物等を紀す



616『北齋漫画』四編卷末広告（ARC 古典籍ポータルデータベースより。筆者による編集）

●絵手本『伝神開手 北齋漫画 五編』（夏。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北齋美術館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：プルヴェラー・コレクション蔵）



617 北齋漫画 五編（島根県立美術館）

※奥付には「東都画工 北齋改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合門人：魚屋北溪、斗円楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十三年子夏 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺の奥付には「東都画工 葛飾北齋筆。印雷震。尾陽名古屋 校 門人：北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（同日本橋四日市）、永楽屋東四郎（尾州名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（同糴町平川町）」とある。

☆序文「梅の屋のうめ、すだづみ（隅田堤）のさくら、かめど（亀戸）のふぢ、やなぎしま（柳島）の萩、てらしま（寺島）のきく、此いつところ（五所）は、かつしか（葛飾）のなごころ（名所）にて、春秋のさかりのころは人ゆきつどひて、みちもさりあへぬまで、見のゝしるめり。北斎のおきなは、はやうより、このわたりにすめる人にて、その名たかく聞えぬことは、猶このいつところ（五所）の花のほひにもまさりぬべし。ちかごろ、漫画となづけしふみ、木にゑりて（彫りて）物せられたるが、人のもてはやすまゝに、こぞ、ことしと数そひて、終にいつゝ（五つ）の巻となりて、かのかつしか（葛飾）にかぞふめる花どものありどころと、かず（数）ひとしくぞなりにたる。げにたくみことなるふでつかひには、さかりあらそう木草の花も、おもてをやふせ（伏せ）つべからむ。そは、ひらきたるとちふみの花々しきを、見たらん人ぞ、こよなきいろかは、しりぬらんかし。

六樹園注（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎による。ルビ、補注は筆者）
注）六樹園：宿屋飯盛（石川雅望）。

☆表紙：「五編 規矩準繩（物事の基準となるもの。手本）」と書かれた背景に、雲型の屋根らしき所に麒麟が描かれる。

●絵手本『三体画譜』（春。墨摺。大本一冊 30 丁（序文と扉を含まず）。大田南畝〈蜀山人〉の序文では『三体画法』とある。奥付に「東都画工 北斎改葛飾戴斗画。印ふしのやま 同校合門人・魚屋北溪・斗田楼北泉・尾陽名古屋校合門人・月光亭墨遷・東南西北雲 文化十三年 子春 江戸日本橋四日市 竹川藤兵衛 同本石町十軒店 英屋平吉 同麴町平川二丁目 角丸屋甚助」とある。15.4×18.8 島根県立美術館：永田コレクション/浦上蒼穹堂/すみだ北斎美術館蔵）菱屋久兵衛の後摺版がある。

※大田南畝の私家集『七々集』（文化十二年十一月記）に「戴斗子三体画法序 書に真行草の三体あり。画も又しかり。（略）文化乙亥のとし雪のあした 蜀山人」とあり。

注）文化乙亥は、文化 12 年であり、序文は前年に書かれたもの。

「袋」には「前北斎戴斗先生筆 三体画譜 文化乙亥新彫 東都衆星閣（角丸屋甚助）」とあるので、当初は文化 12 年の刊行予定であったと思われる。

※図中、同一画材を、真は■、行は▼▲を上下に組み合わせた記号、草は●の記号を付けて描き分ける。



618 三体画譜（すみだ北斎美術館）

●摺物「節分豆煎り図」（色紙判色摺。前北斎戴斗筆。19.8×18.2 日本浮世絵博物館蔵）

※図は、長火鉢の縁に両腕を乗せている子どもと、右手に灰ならしのようなものを持って火鉢の上にかざして豆を煎っている女。その脇で湯を入れる鉄瓶を持って火鉢を見ている



女。背後には梅の木と三河万歳みかわまんざいの絵が描かれた屏風びょうぶが立て掛けてある。

「東隣亭徳馬 きのふまででない手桶ておけのあけほのに ひとよこし茶もけふの若水」、「六歳亭宝馬 神垣かんがきや朝日のうつる亀井戸かめいどのそこまで匂ふふかき梅うめか香」、「七十四翁 談洲楼焉馬 かはらずに福茶ふくちやのなかの寿老人じゆろうじん まめにさんせう梅干うめぼしおやち」の狂歌が記される。(掲載図は東隣亭徳馬と談洲楼焉馬の狂歌が削られている)。

619 節分豆煎り図 (日本浮世絵博物館)

●摺物「寿老人図」(「寿老と唐子」「寿老図」とも。全紙判。色摺。前北斎戴斗筆。京橋の星野寿徳の米寿祝の摺物。38.3×52.0 日本浮世絵博物館/島根県立美術館：永田コレクション蔵)

※寿老人が衝立に朝日と鶴の絵とともに、大きく「寿」の字を書き入れたところの図。寿老人は鹿皮を背に巻き付け、前に硯と筆洗いが置かれている。背後に団扇と巻物を括りつけた棒を捧げ持つ童子が座っている。図左に「八十八歳翁 寿徳」の落款と印が捺されている。図左に狂歌堂真顔きやうかどうまがお(鹿津部真顔しかつべまがお。別号：四方歌垣・四方真顔)の賛には、寿徳の米寿祝いによることが記されている。



620 寿老人図 (日本浮世絵博物館)

文化14 (1817) 丁丑 58 歳	北斎戴斗、東都ノ旅客北斎戴斗、東都画工葛飾北斎、東都画工北斎改 葛飾戴斗、葛飾前北斎戴斗老人、東陽画狂人北斎戴斗、前北斎戴斗、屁クサイ
印	画狂人、雷震、ふしはやま、ふもとのさと、花押：こと(47 歳)、(阿美与：29 歳)、(孫：8 歳)、(阿栄：20 歳)

◇4月17日、杉田玄白没(85)。

◇5月～7月、諸国旱魃。

◇9月、イギリス船、浦賀に来航。

◇11月3日、オランダ商館長ズーフ (Hendrik Doeff 享和3年：1803着任) 離日。

【阿栄嫁ぐか】

★この頃、阿栄、南沢等明みなみさわとうめいに嫁ぐ。嫁ぐ前は栄女えいじよ(阿栄)と号し、嫁ぎ後は、辰女たつじよと号す。北斎が用いた落款「北斎辰政ときまさ」や印影「辰政」「辰」「政」に因んだか。

※文政7年(1824)頃に嫁いだとも言われるが(鈴木由紀子『浮世絵の女たち』p188。幻冬舎)、その時阿栄は27歳、婚期としては遅い印象がある。

注) 南沢等明：堤等明。生没年不詳。東神田橋本町二丁目、水油屋庄兵衛ひがしかなだへしちちやうの息子。幼名

：吉之助。長じて北斎と交流のあった画師・三代堤等淋の門に入り等明と号す。北斎工房の弟子。

★この頃、石原片町に住む（『諸家人名 江戸方角分 〈本所〉 〈画家・浮世絵〉』瀬川富三郎著〈文化14年～15年成立〉に「戴斗 先北斎 石原片町 中島鉄蔵」とある。現墨田区石原1・2丁目辺）

※『北本所大川ヨリ横川辺石原北割下水迄』「天保十一年八月ノ形」に「石原片町」とある（国立国会図書館デジタルコレクション）。

★この年正月の角丸屋甚助版『千紅萬紫』の巻末広告に「略画早指南 初編」（『略画早指南 前編』に該当。文化9年：1812に刊行済）、「同二編 早稽古」（『略画早指南』の後編に該当。文化9年：1812に刊行済）、「同三編 早稽古」（『略画早指南 独学』に該当。文化11年1814刊行済）、「同四編 早引」（『絵本早引 前編』に該当。この年刊行）「同五編 早引」（『絵本早引 後編』に該当。文政2年：1819に刊行）とある。新たな企画があったか（『年譜』による）。

【第二次関西旅行】

★第二次関西旅行。途中、再び名古屋の墨僊住宅に半年滞在。暮れには更に大坂・紀伊・吉野へ旅をする。

注）墨僊：安政4～文政7（1775～1824）。門人。尾州名古屋鍛冶町下新道北西角（現名古屋市中区鍛冶屋町）に住む。通称：牧助右衛門、名：信盈。知行百五十石の尾張藩士。江戸詰のとき喜多川歌麿に入門。歌政と号す。後、文化9年（1812）秋、名古屋を訪れた北斎の門に入る。

【二度目の大達磨を描く】

※10月5日、名古屋西掛所（本願寺別院〈西別院〉）。現名古屋市中区門前町1-23の東庭境内において120畳（厚紙1880枚を繋ぐ）の達磨半身像を描く。米俵5個文の藁を使った大筆を用いる。翌日6日、作品は櫓から吊り下げて披露する。『北斎漫画』刊行中「小さな絵しか描けないやつ」の風評が立ったのに対して、取り巻きが北斎をけしかけたためのパフォーマンスといわれる。

621 大達磨引札（『北斎大画即書細図』：名古屋博物館）

※文化14年、高力猿猴庵（1756～1831、種信。名古屋の浮世絵師）の『北斎大画即書細図』（合本一冊。名古屋博物館蔵）により北斎のその時の様子が画・文で再現された。それによれば、北斎パフォーマンス事前の引札（配布宣伝ポスター。木版墨摺り。47.2×35.3 永楽屋東四郎版）には「文化十四丁丑年十月五日大画席上 東都ノ旅客 北斎 戴斗筆 印画狂人」「尾州名護屋本町通り 門前町大地に於て来ル 十月五日席画 たゞみ百二十畳敷 達磨大師の尊像を画ク 目六尺 はな九尺 口七尺 みみ老丈二尺



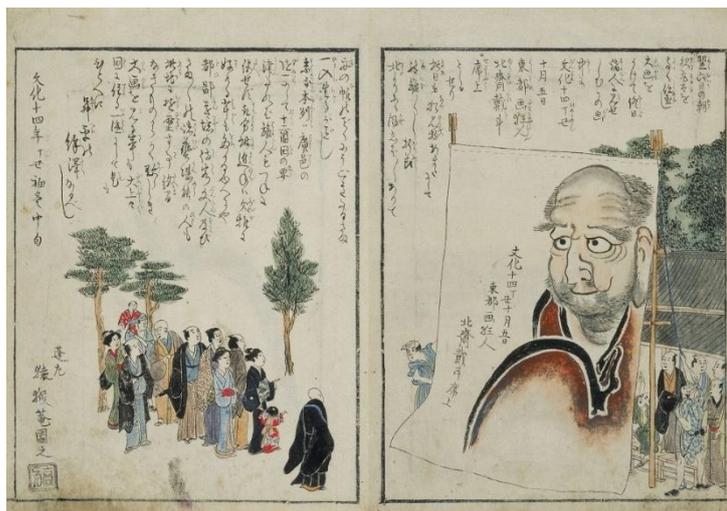
面テ三丈二尺 ふで米俵 五ひやう 同志ゆるはうき 同竹はうき」とある。

※『北斎大画即書細図』の頁に従って見ると、先ず、書店の店頭に引き札が掲げられ、それを見た人々が門前に多く並び、これからのパフォーマンスを見ようとしている。門前には、引き札が掲げられている。次に、境内で敷地を箒で掃いている男がいる。正面には既に大達磨図を掲げる木桁が組まれている。120 畳の周りは柵がめぐらされ、その周りには観客が詰めかけている。

622 高力猿猴庵『北斎大画即書細図』

一図 (名古屋市博物館)

次に、墨を入れた入れ物を持つ男の脇で、紋付き袴姿で襷をした北斎が大筆で描き始める。顔の輪郭を二人の弟子とともに描く。次に、弟子とともに大筆を二本持って次の作業に取り掛かろうとしてる。側には墨を入れた大樽が置かれている。



623 北斎大画即書細図 二図 (名古屋市博物館)

次に、手桶から柄杓で赤絵の具を汲み、黒の輪郭線に沿って流していく。側では、跳ねた絵の具を拭いている男がいる。夕方には絵が完成。木桁に架けた絵を群衆が見ている。

「追加」として「書林より配り出せし板行之写 代物十二銭」と記されている。コピーを 12 銭で売ったのだろうか。

※本図は、昭和 20 年の名古屋大空襲で、西掛所本堂とともに焼失したという (『年譜』による)。

【屁くさいの芝居がかった借金申し込み状】

★大達磨絵を描いた 12 日後の 10 月 16 日、北斎は永楽屋東四郎に借金を申し出ている。二両二分の借金を、奉行所に申し出て借りる形にしている。更に番頭の藤助 (永楽屋東四郎のこと) 宛てに借用書まで書いている。

「コレハ永東子（永楽屋東四郎のこと）より之御使御苦勞く。しかし/手前屋敷より申込ミ之金子でハござらぬ/此方役所なれば、役人共ヲ以而申入升。/コレハせん日大洲（大須）西かけ所ニ而カノ/大だるまをかいた、ア、何サソレク/へくさみとか申た画師か/此せつ甚差つかえると/承ったが、そやつが今日/御無心申渡とい居ったて。/此文面でハ定而きやつ/かりぬときやつも一向つまらず、ハテどふか仕方/がありそうナものだ/イヤくしばらく御待ち被成、今へくさみを呼ニやつて/受取ヲさせて御使へ進上致そう。コレく小遣イ/チョットへくさみを呼でコイヨ。（筆者注：ここまで奉行所の役人の言葉）



覚

一 金貳両貳分

右之通り樋ニ時借仕候。為念如此ニ彼座候。/則自筆受取左ニ御覽可被下候以上。

十月十六日 己（巳）ノ中刻

永楽屋御店 北斎戴斗拝

藤助様

（役人の言葉）コレ/藤之字で/ないてや。/東ノ字（永楽屋東四郎のこと）で/△ルゾ。/年に/不足もなく/不調法 /ノおやじめだ。/ハ、ハ、ハ、ハ、（『北斎大画即書細図』による。ルビは筆者）。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 六編』（正月。半紙本一冊。22.8×16.0 すみだ北斎美術館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：ブルジェラー・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗円楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十四年丑孟春 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺版奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋甚助（江戸麹町平川）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）」とある。

☆序文「絵にかける馬、よなく出て草餅を喰ひ、絵にかける鹿、よなく出ておはぎをくひしといふは、実に馬鹿くしきためしなれど、其妙を得るに至ては、素人ノ簡の及ばざる所にして、そこがかの餅はもちやの場なるべし。ここに戴斗翁の画における、気韻、生動、

骨法を得て、其真を写すに及びては、飴で餅くふうまみありて、一切万物写形の細密には、魔話李思訓も天窓をかきもちなるべし。されば此漫画、世に行はれしより、書肆のためには大福もち、猶あたゝかなる炉びらきのそれは、ゐの子、ねの子の餅みつがひとつのそれならで、みつをふたつの六編に至りて、予が序を乞ふ。こはれて是を餅につきしが、口から出るまゝ筆にまかせて、餅好の酒ぎらひ、下戸の食山人注文宝堂にしるす。」（『北斎漫画』3「奇想天外」2011年 青幻舎 による） 注）食山人：大田蜀山人。



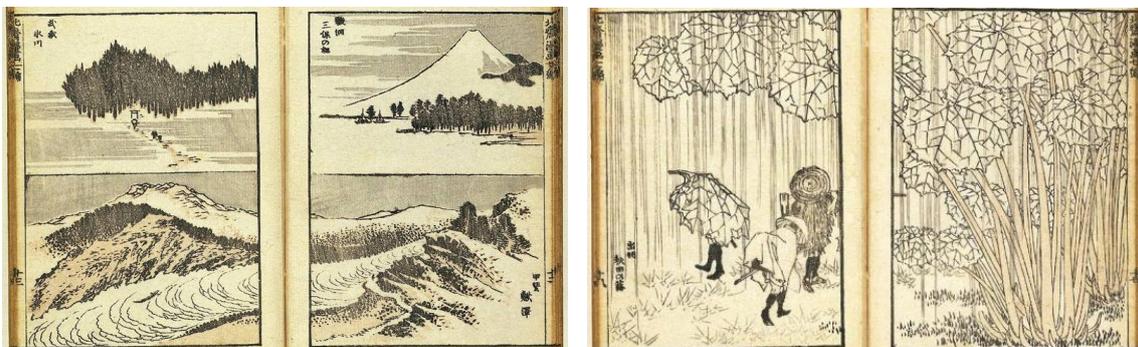
625 伝神開手 北斎漫画 六編（山口県立美術館）

☆表紙：弓の字形をかたどった弓の上下に二頭の龍が居り、上の龍が矢を番えて弦を引き絞っている図。「漫画 六編 東壁堂（永楽屋東四郎） 衆星閣（角丸屋甚助） 合梓」と書かれている。

●絵手本『伝神開手 北斎漫画 七編』（正月。半紙本一冊。22.8×15.8 すみだ北斎美術館/東京国立博物館/ホノルル美術館/山口県立萩美術館/フリーア美術館：プルヴェア・コレクション蔵）

※奥付には「東都画工 北斎改葛飾戴斗。印ふしのやま。同 校合 門人：魚屋北溪、斗丸楼北泉。尾陽名古屋校合門人：月光亭墨僊、東南西北雲。文化十四年丑孟春 竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、英屋平吉（江戸本石町十軒店）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）、角丸屋甚助（江戸麹町平川二丁目）と記されている。

※後摺奥付には「東都画工 葛飾北斎筆。印雷震。尾陽名古屋 校 北亭墨僊、東南西北雲。書林：英屋平吉（江戸本石町十軒店）、竹川藤兵衛（江戸日本橋四日市）、角丸屋甚助（江戸麹町平川）、永楽屋東四郎（名古屋本町七丁目）」とある。



626 伝神開手 北斎漫画 七編（東京国立博物館）

☆序文は、式亭三馬によるもので、『漫画』に描かれた諸所の画に寄せて「枕にせしは、このふみなりけり」と結んでいる。

☆表紙：「芭蕉之像 七篇」と書かれ、芭蕉が老木の下で杖を抱いて座って休んでいる図。名勝巡りの趣の巻。

●絵手本『画本早引』前編(墨摺。中本。一冊。後編は文政2年(1819)7月版。鳥羽絵。葛飾前北斎戴斗老人。十辺舎一九の序に「文化丁丑晩夏日」とある。角丸屋甚助(衆星閣)・鶴屋金助(雙鶴堂)合梓(版木所有)版。島根県立美術館：永田コレクション/すみだ北斎美術館/名古屋市蓬左文庫蔵)

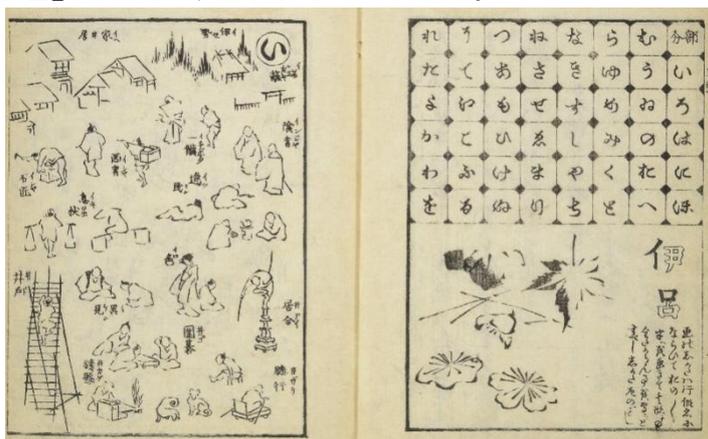
※いろは48文字順にまとめ、人の感情に伴う動きを描いた絵手本。単なる名詞ではなく、感情等の抽象名詞の画材を多く扱っているのに特徴がある。

※初編761図(い～む)。二編588図(う～す)あるという(『北斎の絵手本 四』)。

※巻末舌代に「当年先生この一編を著され候処、急に旅行(二回目の名古屋行きを指す)の権有之候故、全冊満尾致し不申候(略)」とある。

※この編の出版予告に『略画武者鑑』があるが、刊行はされなかった。

※後に『略画早指南』(文化9年：1812)前編を初編に、後編(文化11年：1814)を二編に、『己痴羣夢多字画』(文化7年：1810)を『画道独稽古』に改題して三編に、『画本早引』前篇を四編に、後編を五編として改編し、一連のシリーズ物にした。



627『画本早引』前編「い」の部(メトロポリタン北斎美術館：ARC古典籍部・ケルバースより)

【い】の部(例)

〈陰者〉〈居合〉〈膝行〉〈伊勢〉〈家居〉〈一僕〉〈逸民〉〈医者〉〈石匠〉など。

●肉筆画「月下竹林の虎図」(着色一幅。北斎戴斗筆。印ふしのやま。キヨッソーネ・ジエヴァ東洋美術館蔵)

※二本の竹の脇で腰を下ろして満月を見る虎。天保15年(1844)にも同画趣の「月を見る虎図」がある。

●肉筆画「芋の図」(東陽画狂人 北斎戴斗筆〈花押〉)

※10月6日以降、名古屋で「大達磨」を描いた北斎の様子を記録した高力猿候庵の『北斎大画即書細図』に描く(『年譜』による)。

●肉筆画「孕女」(「はらみおんな」と読むか。着色一幅。前北斎戴斗筆。印ふもとのさと)

※「文化十四丁丑年六月」の書込みがある。着物から上半身をはだけ、腹帯をした大き

な腹を突き出して座っている女。乱れた着物の裾から左の足裏が見える。脇には黒い帯が投げ出されている。

●扇面画「茶笏売図」（紙本着色。北斎戴斗筆。花押。島根県立美術館蔵）

※茶笏売は、もと京都の空也堂の僧たちが、歳末に自家製の茶笏を売っていたが、後に江戸でも真似て、白衣に墨染の十徳（筆者注：腰から下にひだを付けた僧衣）を着て口上を述べながら、茶笏を挿した筒の竹棒を担いで売り歩いたという。正月の初釜用に売る。図は、茶笏売が、風呂敷の荷物を背にして座っている様子を描く。横に置いた竹棒の先に茶笏が数本挿してある。

●絵暦「遊女と三蒲団の客」（1月。前北斎戴斗画？）

※画中の羽子板に大小月が示される。「おもふ事心に叶ふ福茶より わか身をいつそ撫うしの春 春尾待兼」の狂歌が記される。

【以下、文化年間】

北斎、前北斎、戴斗、北斎改為一、葛飾北斎、葛飾北斎改戴斗、北斎改為一、ほくさ
みゑかく、ほくさみうつす、東陽北斎、画狂人北斎、かつしか北斎、画狂老人北斎、
東陽葛飾北斎辰政、北斎戴斗、戴斗逆筆、総州葛飾郷前戴斗、北斎改戴斗、東都
葛飾北斎戴斗、独流北斎、戴斗房中写、画狂人北斎酔中、ホクサイ、前北斎戴斗、向岳
北斎、九々蜃北斎、不染居北斎、北斎爪画、画狂老人卍、北斎老人、葛飾北さゐ、  亀
毛蛇足、一人人形、花押、花押（北）、ふもとのさと、ふしのやま、雷辰、辰、政、辰
政、葛しか

●狂歌絵本「風流勸化帳 万歳図」（文化元年～5年〈1804～08〉。紙本色摺二冊。中挿絵に画狂人北斎画。辰政 東京都江戸東京博物館蔵）

※約140名の様々な分野の人物による寄せ書きがある図。

※『狂歌書目集成』菅竹浦編（臨川書店 1975）及び『江戸の絵本』（八木書店）所収・マティ・フォラー「葛飾北斎と初期門人たち」による。p 293）

●狂歌絵本『狂歌大つとみ』（文化年間〈1804～18〉一冊。萩の屋、花の屋、千秋庵編。北斎・蘭溪画。『狂歌書目集成』によると「浮世絵文献資料館」で紹介）

※『日本古典籍総合目録』（国文学研究資料館）によれば北斎は一点のみ描く。

●狂歌絵本『日本歳時記狂歌集』（文化年間（1814～18）。一冊。文々舎（蟹子丸）撰。葛飾連。戴斗。『狂歌書目集成』によると「浮世絵文献資料館」で紹介）

●狂歌絵本『狂歌三愛集』（文化年間〈1804～18〉。文化12年〈1815〉説あり。浅草庵市人撰 壺側版。北斎画。22.9×16.6 島根県立美術館：永田コレクション蔵）

※北斎は3図のみ描くという。一図は、「月」と題する狂歌が三首記載され、料理屋の座敷の開け放した窓辺に芸妓らしき女が座って、三味線箱を抱えている店の女の方を向いている。窓の外には海の上空に満月が出ている（大和文華館『北斎展図録』昭和62年に掲載）。一図は鳥居の前で雪道を歩く二人の女。

●読本『茶店墨絵艸紙』（文化4年～6年〈1807～09〉この頃か。『茶店墨江艸紙』とも。

半紙本 1 冊。栗杖亭鬼卵作。葛飾北斎画（扉に「岡造酒頭像」のみ描く）。挿絵は、浅山盧国画。酒田市立光丘図書館/島根県立美術館：永田コレクション蔵

●艶本『富久寿楚子』（文化 12 年～14 年〈1815～17〉無款。大本折帖色摺一冊 12 枚揃。25.5×35.8 浦上満/ミカエル・フォーニツ・コレクション蔵）

※殆どの絵が画面から体の一部がはみ出しているので「はみ出しの春画」と言われる。淫水亭女好序注がある。

注) 淫水亭女好：溪斎英泉の隠号。

※艶本『波千鳥注』の原本。この本の書入れを省き、添景を省いて雲母摺にして、恥毛の毛彫を省いてぼかした改板本が『絵本佐勢毛が露』と題して文政年中に刊行される。

628『富久寿楚子』（部分：<https://media.thisisgallery.com/>より転載）

注) 波千鳥：文政 3 年（1820）、『富久寿楚子』を白雲母摺にした上製本として再刊される。



●肉筆画「花魁図」（文化元年～2 年〈1804～05〉。着色一幅。画狂人北斎画。印 亀毛蛇足）

※赤い紐で髪を結んだ花魁が薄茶の打掛けを肩からずらして羽織っている。前帯を垂らし、黒塗りの下駄を履き、思案げに首を少し傾けている。背景は秋を思わせる色合いの細木などが描かれる。

【文化初期から西洋銅版画に関心を示す】

●錦絵『阿蘭陀画鏡 江戸八景』（文化 8 年～11 年〈1811～14〉か。横小判 8 図揃物。全図縁取りの遠近法で描く。銅版画風の木版画。画題の地名は図の上部に横書き。袋に北斎先生図とある。総州屋与兵衛版。島根県立美術館：永田コレクション/日本浮世絵博物館/ボストン美術館/東京都江戸東京博物館/神戸市立博物館/北斎館蔵）

※刊行年については、寛政 9 年（1797）、享和元年（1800）、享和 3 年（1803）、享和末～文化初期（1802～04）、文化 7 年（1810）、文政 2 年（1819）等、多くの説があるが、本稿では文化中期とする。天保初期の『江戸八景』とは別作。

☆〈袋〉（18.0×23.5） 629 袋（島根県立美術館）

※縁取り内に顕微鏡の絵。裏に「日本橋南え通二丁目 板元

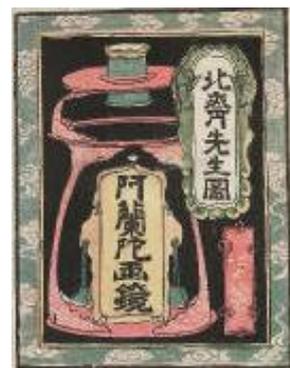


総州屋」の書込みあり。

☆〈観音〉（8.7×11.1）

※図左の浅草寺観音堂には梯子が掛けられている。門まで続く境内の参道は遠近法が強調される。

630 観音（島根県立美術館）



☆〈吉原〉 (8.4×11.3)

※吉原へ続く堤をぞろぞろと歩く人々。図の左には吉原の家並が描かれる。遠景に立ちのぼる白雲。

631 吉原 (島根県立美術館)



☆〈堺町〉 (8.5×11.5)



※日本橋堺町の賑わい。道の左に市村座、その奥に中村座、右に人形座と、芝居小屋を両側に配し、間の往来に歩く人々を描く。

632 堺町 (島根県立美術館)



☆〈高縄〉 (8.8×11.4)

※湾曲した海辺の宿場町の街道を行く人々の向こうに富士山が描かれる。

633 高輪 (島根県立美術館)

☆〈駿河甲〉 (8.6×11.6 アムステルダム美術館蔵)



※日本橋駿河町の越後屋に挟まれた道の向こうには富士山が描かれる。

634 駿河甲 (島根県立美術館)

☆〈日本橋〉 (8.7×11.6)

※手前の日本橋から、家並に挟まれた

湾曲した道を行く人々。遠くに富士山と三日月を描く夕暮れの風景。

635 日本橋 (島根県立美術館)



☆〈不忍〉 (8.7×11.6)

※太鼓橋をわたる人々。その先の不忍の池の弁天堂の背景に白雲 (入道雲) が立ちのぼっている。

636 不忍 (島根県立美術館)

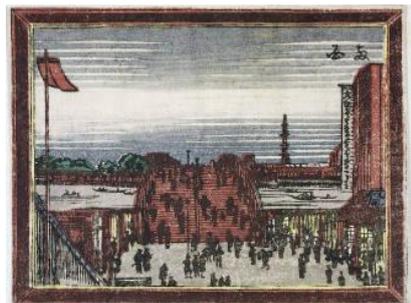


☆〈両国〉 (8.6×11.6 北斎館蔵)

※画面中央に描かれた隅田川に架かる両国橋。湾曲した橋のこちら側だけを描き、そこを渡

る多くの人々。広小路には多くの人々でにぎわう。川には猪牙舟が行き交う。

637 両国 (島根県立美術館)



●錦絵『横中判洋風画シリーズ』（文化1年～3年〈1804～06〉。横中判5匁。ひらがな横書き落款：ほくさゐゑかく。版元不明。額縁風の枠を描く。銅版画をまねた木版画）。



☆〈ぎやうとくしほはまよりのぼとのひかたをのぞむ〉
 (17.4×23.4 東京国立博物館/日本浮世絵博物館/ヴィクトリア・アルバート博物館/ボストン美術館/中右コレクション/ギメ美術館蔵)
 638 ぎやうとくしほはまよりのぼとのひかたをのぞむ (日本浮世絵博物館)



※画面中央に小さく描かれたの二つの鳥居は「富嶽三十六景 登戸浦」(天保2年)に見えるものと同じ。画面左隅にわらぶき屋根が二つ見える。海辺の道には馬に乗った旅人が行く。千葉県

行徳にあった製塩の場所からの図。現在の平井地区。



☆〈よつや十二そう〉 (17.2×23.4 島根県立美術館：永田コレクション/東京国立博物館/日本浮世絵博物館蔵)

※「十二社」は、元角筈と呼ばれた地域で、現在の新宿区西新宿。溪谷に滝が流れ、渡された板橋上で滝を見ている男が三人いる。右岸の松の根元からも滝を眺める男が二人いる。一人は松の幹に手を回しながら、身を乗り出して滝を指差している。

639 よつや十二そう (日本浮世絵博物館)

☆〈くだんうしがふち〉

(版画で唯一の影絵。17.2×23.4 東京国立博物館/フランス国立図書館/すみだ北斎美術館/中右コレクション/日本浮世絵博物館蔵)

640 くだんうしがふち (東京国立博物館)

※急な坂なので大人車を押す事を仕事とする「立ちん坊」が車を押している図。人物の影が描かれている。「牛ヶ淵」は、千代田区の九段坂の南側の田安門から清水門までの江戸城の堀の



名。金を積んだ馬が堀に落ちて上がらなかったという伝説があり、曲亭馬琴が、この話から「牛ゲ淵」の名がついたと随筆『燕石雑志』で述べ、車を引くことが禁じられたとしている（『2005 北斎展図録』作品解説）。

名古屋テレビ/日本浮世絵博物館/東京国立博物館/房総浮世絵美術館蔵）。

☆〈たかはしのふじ〉（17.4×23.4）

※「高橋」は、「たかばし」と読む。小名木川の常盤町と大工町に架かっていた橋。兩岸に掛かる橋が極端に橋桁の高い太鼓橋風に描かれる。高橋の橋桁の向こうには隅田川近く橋が小さく描かれ、その先に富士が見える。『富嶽三十六景』「深川万年橋」につながる絵。

現江東区高橋にその地名が残る。長さ18間（約32.4m）、幅2間（約3.6m）の橋で、洪水から崩壊するのを防ぐため家の棟程高く掛けたもの。『御府内備考』注に「本所深川の橋は洪水の時失せざる為に皆兩岸より石を畳みて平地より或は五六尺、或は七八尺も高く掛渡して、橋上は街並みの楼屋の棟にもひとしければ、高橋とも名付けしなるべし」とある（『原色浮世絵大事典』第8巻）。



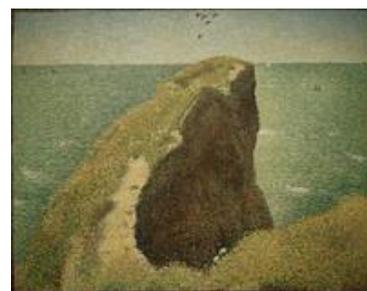
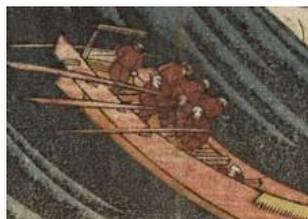
注) 御府内備考：文政12年（1829）、江戸市内の地誌としてまとめられたもの。これを元にして『御府内風土記』が編纂された。

641 たかはしのふじ（東京国立博物館）

☆〈おしをくりはとうつうせんのづ〉（17.2×



23.4 東京国立博物館/日本浮世絵博物館/名古屋市博物館蔵)



642 おしをくりはとうつうせんのづ（東京国立博物館）

スーラ「とがったオック岬、グランカン」

※『横間判洋風画シリーズ』の〈賀奈川沖本空之図〉を反転させたもので『富嶽三十六景』の構図が出来上がっていたと思われる。「おしをくり」は、櫓を押し進める船で「押送船」と呼ばれ、房総から江戸に魚を運んだ足の早い船のこと。但し、押送船は帆があるが、あえて帆を描かず、波濤を越えて行く船を印象つけている。この図は、ジョルジュ・スーラのフランス・ノルマンディー地方の海景色を描いた「とがったオック岬、グランカン」（1885年 テート蔵）に影響しているといわれる。

●錦絵『横間判洋風画シリーズ』（文化元年～3年〈1804～06〉）。間判。五図確認されている。無款。遠近法を用いた洋風表現で額枠図に描かれたもの。画題は図上部に横書き。

いずれも板ぼかし注の技法。総州屋与兵衛版か)

注) 「板ぼかし」は、ぼかす範囲よりも少し大きく周りを彫っておき、その部分を斜めに削って木賊や椋の葉で面を滑らかにしておいた版木を用いて、自然なぼかしを出す技法。

☆〈羽根田弁天之図〉 (22.8×35.9 島根県立美術館：永田コレクション/神奈川県立歴史博物館蔵)



※技芸財福の神である弁財天に続く道に架けられた板橋の図。橋は二等辺三角形の構図で描かれている。沖には帆船が数隻浮かぶ。

643 羽田弁天之図 (山田書店：復刻版)

☆〈日本堤ヨリ田中ヲ見ル之図〉 (22.2×34.2 島根県立美術館：永田コレクション/神奈川県立歴史博物館蔵)

※日本堤を往来する人々。田が右側に広がり、背景には隅田川が描かれる。日本堤は吉原へ通じる道でもある。

644 日本堤ヨリ田中ヲ見ル之図 (復刻版)



☆〈吾妻橋ヨリ隅田ヲ見ル之図〉 (23.1×25.4 島根県立美術館：新庄コレクション蔵)

※橋桁の間から見た舟が浮かぶ隅田川の風景。図の右には川沿いの土堤が描かれる。遠景に入道雲が出ている。

☆〈賀奈川沖本杵之図〉 (21.0×33.9 すみだ北斎美術館蔵)

645 賀奈川沖本杵之図 (すみだ北斎美術館)

※「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」に似た構図。大波に挟まれるように揺れる帆船。覆いかぶさる波の向こう側にももう一隻の船尾が見える。



☆〈滝の川岩間之図〉

※滝の川に掛かる細い板橋を渡る親子。川の両岸には巨大な樹木が描かれる。紅葉寺(現東京都北区滝野川3丁目)と称される金剛寺下にある松橋弁財天の岩間を描いたものとされる。

●錦絵『横小判東海道五十三次』(「東海道五十三次」物の一。文化元年～5年(1804～08)。横小判。全54図。地名はほぼ横書きで振り仮名が付けられている。全図に北斎画の落款あり。版元不明。各平均12.2×16.4 慶応大学図書館/太田記念美術館：長瀬コレクション/すみだ北斎美術館蔵)

※吉野屋徳次郎版(享和元年～4年)の「東海道五十三次」とは別物で、題名が紛らわしいので、本稿では仮に「横小判東海道五十三次」とした。

☆ 〈日本橋〉

※風呂敷の荷物を肩にして橋の欄干から富士山の方を見る男。頭に乘せたざる笊に魚を入れて運ぶ男。天秤棒を担ぐ男など、多くの人で賑わう日本橋の上。遠くに西河岸橋が見える。 646 日本橋 (慶応大学図書館)



☆ 〈品川〉



※品川宿の茶店の側で休む旅人。

遠くには富士山。沖には数隻の船が浮かんでいる。

647 品川 (慶応大学図書館)

☆ 〈川崎〉

※人と馬を乗せた渡し船。船頭が竿を差し、船首ではもう一人の船頭が棒を水面にさしている。手前の岸には



は柳の木がある。

648 川崎 (慶応大学図書館)

☆ 〈神奈川〉

649 神奈川 (慶応大学図書館)

※山形に葉の字が染めてある背当

てをした馬に乗る旅人。首を下げた馬の顔に手をやって休ませる馬子。馬の側には芸者風の女が立っている。



☆ 〈程ヶ谷〉

※松並木の街道を駕籠で行く旅人を駕籠で行く旅人や歩く人々。松の



間から富士山が描かれる。

650 程ヶ谷 (慶応大学図書館)

☆ 〈戸塚〉



※茶店で休む旅人。宿の前の縁台に荷物を下ろし、足を掛けて草鞋を整える男。その背後に富士山。

651 戸塚 (慶応大学図書館)

☆ 〈藤沢〉

※丸に五つ星の家紋のある長持を担ぐ二人とその側



652 藤沢 (慶応大学図書館)

に付き添う笠を被った侍がいる。

☆ 〈平塚〉



※水辺から飛び去る鴨を、手をかざして見る女旅人と供の男。同じよう上半身裸の旅人が立って見ている。旅人たちの荷物は下に置いてある。

653 平塚（慶応大学図書館）

☆ 〈大磯〉

※松の木の根元にある大石（虎が石）を上半身裸の旅人が持ちあげようとしている。同じように上半身裸の男がわきの下の汗をぬぐいながらそれを見ている。

654 大磯（すみだ北斎美術館）



☆ 〈小田原〉

※「うみらう」と書いた箱を置いてセンスを仰ぎながら売り口上を述べ

る売人。男の着物には三升紋が染め抜かれている。後方に小田原城が描かれる。

655 小田原（慶応大学図書館）



☆ 〈箱根〉



※関所で吟味される二人の旅人が土下座している。

656 箱根（慶応大学図書館）

☆ 〈三嶋〉

※石垣の横でうずくまる男。その前を通りすぎる二人の旅人。

657 三嶋（慶応大学図書館）



☆ 〈沼津〉



※休み茶屋で休む脇差しを持つ旅人と、今着いた僧に、盆に乗せた茶を差し出す店の女。

658 沼津（慶応大学図書館）

☆ 〈原〉

※富士山に驚いて手を差し上げている馬上の朝鮮使と徒歩の二人。

659 原 (慶応大学図書館)

☆ 〈吉原〉



※富士山を背景に、海浜で塩を含んだ砂をかき集める三人の男たち。図の右には塩焼小屋がある。

660 吉原 (慶応大学図書館)



☆ 〈蒲原〉

※乗合船が二艘。船首と船尾で船頭が竿さしている。

661 蒲原 (慶応大学図書館)



☆ 〈由井〉



※岩場に生える松の老木。その下にはうねる波。人物は描かれない。

662 由井 (慶応大学図書館)

☆ 〈奥津〉

※大きな碓の先にぶら下がって遊ぶ二人の子ども。背後に松の老木。

663 奥津 (慶応大学図書館)



☆ 〈江尻〉



※松の木の下で駕籠を置いて、頭の汗をぬぐって休む駕籠かき。駕籠の中には人がいる。

664 江尻 (慶応大学図書館)

☆ 〈府中〉

※歯を磨き、鏡の前で化粧をする勤めの前の遊女二人。

665 府中 (慶応大学図書館)



☆ 〈鞠子〉

666 鞠子 (すみだ北斎美術館)

※とろろ汁をうまそうに食べる旅人二人。荷物を

包んだ大風呂敷には「叶」の字が染め抜かれている。

☆〈岡部〉

※街道を往来する四人の旅人。主人らしい男は道中差しを腰に、右手に大きな笠を、左手に杖を持っている。供の男が他の旅人の供の男を指差して何かを言っている。667 岡部（慶応大学図書館）



☆〈藤枝〉※松の木の前に置かれた縁台に腰かけて休む女二人。その脇でしゃがんで縁の縁に手を置いて女を見ている男。この三人の旅人の方に向かう禪姿の人足が二人。668 藤枝（慶応大学図書館）



☆〈島田〉

※肩車されて渡る男が二人。その後ろに荷物を担いで渡る三人の人足。デッサンのような描き方。

669 島田（慶応大学図書館）

☆〈金谷〉

※大井川を渡る武家の駕籠を担ぐ人足たち。肩車されて渡る供の男たちが二人。デッサンのような描き方。

670 金谷（慶応大学図書館）



☆〈日坂〉



※「名物わらび餅」の看板のある茶店で休む馬子は◎と染め抜かれた腹がけをしている。馬にも◎と染められた背当てがしてある。

671 日坂（慶応大学図書館）

☆〈懸川〉

※莫座を敷き、太鼓を叩く男と、両手に撥を持ち、腰に付いたいくつもの鼓を叩いて調子をとる芸人。その前には投げ銭があり、見物人がいる。

672 懸川（慶応大学図書館）



☆〈袋井〉

※「大吉」と染め抜かれた腹掛けをした馬の横座りに乗って、振り分け荷物を背負った旅人に話しかける馬子。傍に笠を被り、背中に荷物を掛け、道中刀を差した旅人がいる。

673 袋井 (慶応大学図書館)

☆ 〈見附〉

※関所の門を通る数名の旅人。一人は「叶」と書かれた大きな荷物を背負っている。



674 見附 (慶応大学図書館)



☆ 〈濱松〉

※浜松の街並みを俯瞰して描く、人物は描かれない。

675 浜松 (慶応大学図書館)



☆ 〈舞坂〉

※松の木のある山道を継ぎ飛脚が二人急いでいる。藁包みと桶を天秤にして担ぐ農夫。木に亀が紐に結ばれてぶら下がっている。その下を虚無僧が歩く。



676 舞坂 (慶応大学図書館)

☆ 〈荒井〉

※松の木のある船着き場近くに帆掛け船が二隻停泊している。図右



677 荒井 (慶応大学図書館)

には幕の向こう側に違い毛槍が五本立ててある。大名一行が宿泊している屋根が見える。

☆ 〈白須賀〉



※振り分けの荷物を載せた馬に乗る旅人。馬子は厚手の布を身体に巻いている。馬の後ろには供人が二人いる。

678 白須賀 (慶応大学図書館)

☆ 〈双川〉

※木の根元に腰を下ろし、盥



入れた馬の足を洗っている馬子。馬の横には下ろした鞍があり男の背後には旅人の大きな笠と荷物が置かれている。

679 双川 (慶応大学図書館)

☆ 〈吉田〉

※強大な朝日が登る海に見える山道を旅人二人と天秤の荷物を担ぐ供人が行く。

680 吉田 (慶応大学図書館)

☆ 〈御油〉



※客の前で強引に客引きをする宿の留女二人と、迷惑そうな旅人の男が二人。

681 御油 (慶応大学図書館)

☆ 〈赤坂〉

※雪を被った屋根が

連なる村の風景。人物は描かれない。

682 赤坂 (慶応大学図書館)



☆ 〈藤川〉

※宿の土間で風呂桶に入り背を手拭いで拭く男と、土間の前の部屋からそれを見ている男や、休んでいる男。

683 藤川 (慶応大学図書館)

☆ 〈岡寄〉



※雪を被りながら橋の上を行く大名行列。

684 岡寄 (慶応大学図書館)

☆ 〈池鯉鮒〉

※「右ち里ふ」と彫られた石の道標の脇で、三頭の馬を休ませながら客を待つ馬子たち。一頭の背には「吉」と染め抜かれた背当てがある。

685 池鯉鮒 (慶応大学図書館)

☆ 〈鳴海〉

※布を晒し乾している職人二人を、座敷の小上がりから眺めている婦人。鳴海紋りで有名。

686 鳴海 (慶応大学図書館)



☆ 〈宮〉

※帆船が二隻が浮かぶ海の向こうには小さく城画描かれる。

次の桑名まで東海道唯一、七里の海上路を船で渡る。

687 宮 (慶応大学図書館)



☆ 〈桑名〉

※松の木のある店で女が団扇を持って蛤はまぐりを焼き、旅の男が立ったまま繋がった蛤を上を向いて飲み込んで食べている。その側でもう一人の男が座っている。

688 桑名（慶応大学図書館）



☆ 〈四日市〉



689 四日市（慶応大学図書館）

※旅人二人に柄杓を出して物乞いする二人の女。

☆ 〈石薬師〉

※山の上にひっそりと建つ石の祠を囲むように松が聳える。人物は描かれな

い。690 石薬師（慶応大学図書館）



☆ 〈庄野〉



※雪道を合羽を羽織り歩く多くの旅人。反対方向に行く馬の背に柴木を乗せた農夫たち。

691 庄野（慶応大学図書館）

☆ 〈亀山〉

※家並みの向こうに亀山城を俯瞰して描く。

692 亀山（慶応大学図書館）



☆ 〈関〉



※板橋を柴木を背負って渡る杣人が、柴木を背負った馬の手綱を取って水の中を歩かせている。天秤の荷物を肩に担ぐ男は反対方向に歩いている。

693 関（慶応大学図書館）

☆ 〈坂の下〉

※険しい山道を行く旅人が小さく描かれる。正面の遠方には険しい山がそそり立つように描かれる。

694 坂の下（慶応大学図書館）



☆ 〈土山〉



※菰を頭から被った男が馬の背に乗り、四人の男が警護しながら歩いている。一人は長槍を抱えている。道端の松の木から紐に結わえられた亀が吊されて居る。

695 土山（慶応大学図書館）

☆ 〈水口〉

※田村神社と思われる屋根の向こう

にうねうねと曲がった堤に旅人が多く歩いている。

696 水口（慶応大学図書館）



☆ 〈石部〉

※腰を屈めて芝木を束ねている農婦と馬の轡を取っている子供。

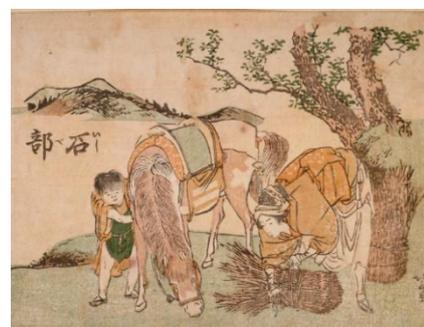
697 石部（慶応大学図書館）



☆ 〈草津〉
〈大津〉

※一枚の図の下部に草津の屋並みが描かれる・図の上部に大津の橋と屋並みと城が描かれる。

698 大津・草津（慶応大学図書館）



る。

☆ 〈京〉

※垂冠を被り笏を手にした束帯姿の二人の貴人。後には折烏帽子の男と侍童が控えている。

699 京（慶応大学図書館）



●錦絵『彩色摺五拾三次』（「東海道五十三次」物の一。画題は袋の題簽による。文化1年～10年（1804～13）。縦小判彩色。全56図。無款。鶴屋金助版。各8.8×5.7 ポストン美術館/すみだ北斎美術館：ピーターモース・コレクション/神奈川県立博物館蔵）

※地名はほとんど、ひらがなの縦書きである。ピーターモース・コレクションでは〈かなや〉と〈かけ川〉が欠落して全54図となっている。

※〈おかべ〉図中の旅人の腹がけに「金」の字があり、〈よしだ〉の図中の馬の腹がけに「鶴」の字があるところから版元が推定される（『ピーターモース・コレクション北斎図録』による）。

※「東海道五十三次」物の最小判。簡略化した画風で描く（以下の図版はポストン美術館蔵）。

☆ 〈表紙〉

☆ 〈日本橋〉



※冒頭図。「ふりだし」の文字が添え書きされているので双六を意識したのではないかと考えられている。これから旅に出る男と伴の者を日本橋で見送る二人の男を描く。

701 日本橋

☆ 〈志な川〉

※遊女が二人、立膝で座って、これからの出番を待っているか。一人は巻紙の手紙を読んでいる。

702 志な川



☆ 〈川さき〉

※渡し舟が二艘、客と荷物を乗せて多摩川を行く。



703 川さき

☆ 〈かな川〉

※馬に乗る人、手綱を取る人、その脇を行く人。

704 かな川



☆ 〈程がや〉



※茅葺屋根の家の前の道を行く二人の旅人。

705 程がや

☆ 〈戸つか〉

※「名物 やきもち」と書いた看板のある茶屋でやきもちを食べる二人の旅人。その側で犬が物欲しそうにしている。706 戸つか



☆ 〈ふち沢〉

※徒歩や馬で行く旅人たち。

707 ふち沢



☆ 〈ひらつか〉

※荷物を背負って川を渡る二人の旅人。

708 ひらつか



☆ 〈大いそ〉

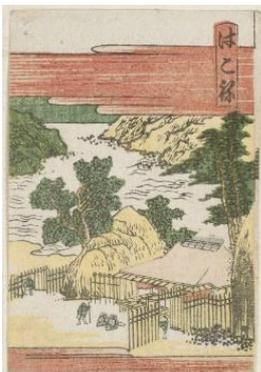
※「虎が石」と呼ばれる大きな岩を抱え上げようとしている旅人と、両手を挙げて応援している旅人。遊女が石になった伝説があり、美男だけが持ち上げられるという。

709 大いそ

☆ 〈おだはら〉

※「うみらう」と書かれた背負い箱の横で、扇子と外郎ういろうを持って見栄を切って売っている男。背景に小田原城が見える。

710 おだはら



☆ 〈はこね〉

※関所で二人の旅人が、座って調べを受けている。その側に棒を持った役人がいる。

711 はこね

☆ 〈みしま〉

※三島神社の鳥居をくぐろうとしている二人の旅人。鳥居の先に石の太鼓橋が見える。

712 みしま



☆ 〈ぬまづ〉

※女の旅人を乗せた馬の脚の様子を見ている馬子。木の枝から亀が吊り下げられている。

713 ぬまづ

☆ 〈はら〉

※遠景の富士と手前の松原の景観が描かれる。人物はいない。

714 はら

☆ 〈よしはら〉

※名物の白酒の臼を挽く男二人と女。

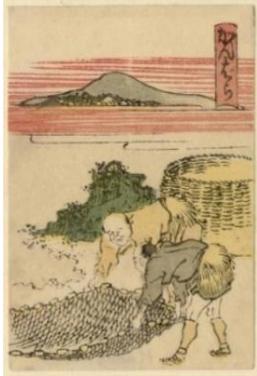
715 よしはら



☆ 〈かんばら〉

※網を広げる漁師二人と、大きな駕籠が描かれる。





716 かんばら

☆ 〈ゆゑ〉

※巖頭いわたがしらの松と、その下の波の景色を描く。
人物はなし。

717 ゆゑ



☆ 〈おきつ〉



※筧ざるに敷いた笹の上に並べられた三匹の鮭の図。

718 おきつ

☆ 〈ゑ志り〉

※宿場前の街道を行く旅人。遠くに紅葉が大きく描かれる。

719 ゑ志り



☆ 〈ふちう〉

※竹細工で籠を作る職人と、竹ひごを叩く職人。

720 ふちう

☆ 〈まりこ〉

※とろろ汁を食べる二人の旅人と、給仕をする女。

721 まりこ



☆ 〈おかべ〉

※「即席御料理御好物肴 江戸屋」と書かれた看板のある店先で休む二人の旅人。旅人の腹がけに版元鶴屋金助を示す「金」の字がある。

722 おかべ

☆ 〈ふじゑだ〉

れる。

※城の櫓やぐらの向こうに旅人が小さく二人描かれる。

723 ふじゑだ



☆ 〈志まだ〉

※荷物を頭上に持ち上げ大井川を渡る人足